

二者間における視線行動の表出に及ぼす対人感情の影響
—視線の対人感情包括的「接近-回避モデル」の検討—

飯 塚 雄 一

目次

第1章	視線行動に関する研究の展望と本研究の目的	2
第1節	視線行動研究の概要	2
第2節	視線行動研究の動向	9
第3節	視線の対人感情包括的「接近-回避モデル」の構築と問題点	15
第4節	本研究の目的	25
第2章	二者会話場面における対人感情と視線行動に関する実験的研究	26
第1節	接近機能をもつ肯定的対人感情が視線行動に及ぼす影響	26
1	好意感情が視線行動に及ぼす影響（実験1）	26
2	恋愛的好意感情が視線行動に及ぼす影響（実験2）	44
第2節	回避機能をもつ否定的対人感情が視線行動に及ぼす影響	64
1	当惑感情が視線行動に及ぼす影響（実験3）	64
2	不安感情が視線行動に及ぼす影響（実験4）	80
第3節	接近機能をもつ特殊な否定的対人感情が視線行動に及ぼす影響（実験5）	92
第3章	総合考察及び今後の課題	113
第1節	本研究の結果の要約と総合考察	113
第2節	今後の課題	116
	引用文献	120

第1章 視線行動に関する研究の展望と本研究の目的

第1節 視線行動研究の概要

1 二者関係における非言語的コミュニケーション

対面状況における二者間では、言語的行動とともに非言語的行動（non verbal behavior:以下NVBと略記）による相互作用が行われる。NVBとは、表情、視線、動作、姿勢、対人距離などの記号を用いて、刺激を送る行動である。言語は、様々なことが表現できるもつとも強力な記号的手段である。しかし、直接表しにくい感情や態度は、言語よりむしろNVBを通して表出される。したがって、二者関係のやり取りのメカニズムやプロセスの解明にとって、二者間に交わされるNVB系の行動に着目することは、きわめて重要である。今から100年以上前にDarwin(1872)は、「言語によるコミュニケーションは、顔面及び身体の表情運動によって大いに助けられている」(p.410)として、非言語行動の重要性を指摘している。さらに日本でも、柳田(1953)が、言語が万能ではなく非言語的手段（しぐさなど）も重要であることを「表現は必ず言語によるということ、これは明らかに事実とは反している。殊に日本人は眼の色や顔の動きで、可なり微細な心のうちを、表出する能力を具えている。」(p.329)と述べている。近年、動物行動学などの研究から、人間のコミュニケーションにおけるNVBが心理学の研究テーマとして再び注目されるようになってきた。NVB及び非言語コミュニケーション(nonverbal communication:以下NVCと略記)研究は身体を通じて人間の内的な心理状態を理解し、人間関係やコミュニケーションにおいて身体がどのように機能しているのかを探求していこうというものである。また、この研究は基本的には外面の行動の研究であり、行動主義的な1つのアプローチといえよう。

(1) NVC の分類 (チャンネル)

チャンネル(channel)という語は NVC 研究では広く使われている。チャンネルとは、特定の身体部位による行動であり、メッセージを運搬するのに使われる (Wiener & Mehrabian, 1968)。コミュニケーションは、いずれか1つのチャンネルによっても成り立つが、実際のわれわれのコミュニケーションでは、言語、非言語の多数のチャンネルを同時に使って多重的なメッセージを発信、受信している。代表的な NVC のチャンネルとしては、以下のものがある。

- ①身体動作：顔面表情、視線、身振り (ジェスチャー)、姿勢、身体接触など。
- ②プロクセミックス：空間行動、対人距離、座席行動など。
- ③パラ言語：発言に付随する声の属性 (高さ、大きさ、速さなど)、沈黙 (無声休止)、有声休止、スピーチ混乱、発話量など。
- ④人工物の使用：衣服、化粧、装飾品、など。
- ⑤身体的特徴：体格、皮膚・毛髪の色、など。

Argyle & Kendon(1967)は、チャンネルを静的な (standing)特徴を持つものと、動的な (dynamic)特徴を持つものに分けている。静的なチャンネルとは相互作用の間、あまり変化のないもので、これには姿勢、体の向き、対人距離などがある。これは、一般的な定位づけ (orientation)として機能している。これに対して、相互作用の間、一定せず静的でなく常にダイナミックに変化しているチャンネルもある。表情、視線、身体の動きなどがこれである。

頭や目などの動的なチャンネルはきわめて動きやすく、例えば、今話し手がどこを見ているかは、話し手の目下の関心のあり方を示している。これに対し、肩、上肢、尻などの動きを変えるのは比較的ゆっくりしている。このような静的なチャンネルは相互作用のあり方を規定している。

さて、視線を一般的な定位行動 (orientating behavior)のうちの1つであるとする研究者もいる (Cranach, 1971)。会話のような相互作用を始めるためには、相手に対し身体を向ける必要がある。この時、必然的に身体と一緒に頭や目が同じ方向に向けられる。これによって、相互作用を開

始する態勢にあることを示すのである。これとは逆に、相手に背を向ける（この時、同時に視線も外される）ことは、相互作用をしないことを意味しているのである。視線の動きは、無意味なものではなく、主体のもつ他者に対する定位づけ（orientation）を意味しているのである。このような定位行動の適切な理解によって、対人関係（相互作用）が促進され、さらに対人関係を積極的な方向へ変えていくことができ、終局的には、人間の福祉の向上につながっていくであろう。

(2) NVC の特徴

NVCには言語的コミュニケーションとは異なる特徴がある。図0-1のように、一方で一連の言語的手段Vによって伝えられる一連の内容があり、他方で一連の非言語的手段NVによって通常伝えられる一連の内容があるとする。この2組の内容には重なる部分があつて、VからNV、またはその逆に翻訳することが可能であるが、このような重なる部分の他に、多くの「話すことはできない」が、「表現できない」ことはない部分が残っている。このようにユニークな特徴をもつ非言語的手段は人間の表現可能性をさらに広げる。言語の方が強力な手段であるが、それだけでは表現可能性という要件を完全には満たせないのである（Eco, 1976）。またRime(1983)は、言語と非言語の関係を図と地の関係になぞらえている。つまり、非言語要素は地であり、中心的な言語（図）へなんらかの色彩を与えている。しかし、反転図形があるように、図と地の関係が交代する時もあり、非言語要素が図となり、認知者の中心を占めることもある。以上のように、言語コミュニケーションとは独立したNVCが存在している。その他、NVCの意味は状況や文脈によって規定されている。また、NVCは個人のもつ感情や対人態度の伝達には適しているが、抽象的な情報や論理的な情報を伝達するのに適していない、などの特徴がある（深田, 1998）。

(3) NVC の機能

Patterson(1983)は、NVBを機能的観点から研究することの有用性を提唱している。単にNVBをチャンネルによって分類するのではなく、背後にある目

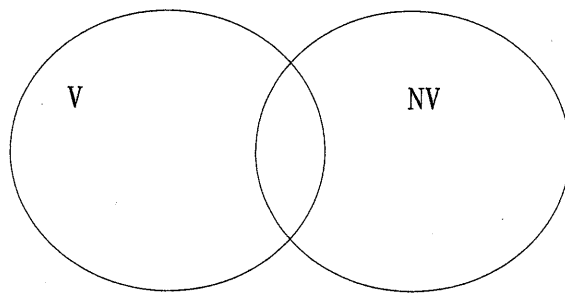


図 0-1 言語と非言語

的、理由、動機を考慮した機能的分類によって包括的、統合的に NVB が理解できるという。この観点からすれば、いろいろな NVB が 1 つの同じ機能を果たし、1 つの NVB がいろいろな機能を果たすのである。

Argyle(1972)の分類と幾分重複する面もあるが、次の 5 つの機能的なカテゴリーをあげている。①情報伝達……社会的場面でのどんな NVB も観察者から見ると潜在的に情動的である。ある人の行為すべてが相手へ何らかの情報を提供している。例えばわれわれは、人の NVB から、一時的な感情状態、対人的態度、持続的な特性や性質などを推測する。②相互作用の調節……会話の話し手と聞き手のスムーズなやり取りを助ける非言語的合図の働きである。この相互作用の調節は、ほとんど自動的に行われるので、あまり意識しない。しかし、相互作用が普通に進まない場合とか、評価されるような場面、普通の話者交代のパターンから外れるような場合には意識されたり考慮される。③親密さの表出……他者への好意、愛、関心などの表出機能である。あまり構造化されず、非公式的で、評価されることのないような状況でこの機能の発現がよくみられる。親密性行動は動機-行動のつながりはあまり意識されないし、感情と行動の間に一貫性がある。④社会的コントロール……この機能には他者の行動に影響を及ぼすとか、変化させようとする意図をもつ動機が含まれている。親密性動機と異なり、行動目的や意図がより明確に意識されている。また感情と行動の間に一貫性がないことが多い。例えば、支持を得るために、好きでもない人に好きなそぶりをするような場合である。⑤サービスや作業目標の促進……対人関係の性質とは別のサービスや課題にもとづく、非人格的な (impersonal) なものである。医者、理容師などは接触という NVB によって仕事が進行する。これらの NVB は、予め予想される順序に従って生起することが多い。さて、ここで上の①と②は、視線、微笑、接触など個々の行動の機能について分類したものである。これと対照的に、③-⑤は、相互作用を通しての行動のパターンの背後にある目的を示したものである。

このように、NVB の機能を明確に区分することで、例えば、社会的コントロール機能だけの NVB という議論が展開できたりして便利である。しかし、Radley (1991)は、人間の行動の背後には意図性と自発性の両面が同

時にあるので、ある行動がいずれか一方であると明確に区別するのは非常に人工的となり、生態学的妥当性(ecological validity)が疑われることになる」と批判している。実際、ある行動がどの点で意図的であり、どこから自発的であるかは簡単には決められない問題であろう。

2 研究対象としての視線行動

視線行動とは、視線を他者の顔面や目などへ向けることである。そして、視線行動は一般的な定位行動であり、相手と交流しようという意図を意味する重要な記号である(Cranach, 1971)。“目は口ほどにものを言う”といわれるように、視線(行動)は対人間において最も重要な意味をもつ記号の1つとして、比較的早くから注目されてきた。すでに、社会学者のジンメル(Simmel, 1921)が、目(視線)は、二者間相互作用の機能をもつ独特のチャネルであり、二者の目と目を結ぶ線の上を真の感情が行き交うと述べている。Stern(1977)も人間関係における視線の重要性を次のように述べている。「大人同士の関係では、視線はあまりにも当たり前すぎて意外と気がつかない信号である。しかし、人間の赤ん坊と母親にとって視線は重要である。親子の絆の始まりはアイコンタクトによって始まるという過言ではない。視線信号の送信と受信の相互作用によって対人行動が始まるのである。このことは大人同士の対人関係の始まりにもあてはまる。すなわち、相手とのアイコンタクトによって人間関係が始まったり、そうでなかったりするるのである。」(Pp. 47-48)

Yarbus (1967)は、人が顔に視線を向けている時、視線の軌跡を調べた結果、顔の中の眼に最も視線が集中することを示し、表情の中心は視線であるということを確認させた。多くの研究者(例えば、Argyle & Cook, 1976; Exline, 1972 など)も、人は表情の中で特に視線に注目すると述べている。Bailenson, Blascovich, Beall, & Loomis (2001, 2003)は仮想現実空間における実験で、対面相手が実際の間人ではなく、コンピューター駆動による人形の場合にも、表情をリアルにする(写真的なリアリズムを

作る)よりも実際的な視線の動きをコントロールして表現する方が、被験者は相手により人間的な存在感を感じることを報告している。このように表情の中でも特に視線(眼)が対人的相互作用のなかで重要な役割を果たしている。

3 視線の測定

視線行動を示す指標の1つに視線量がある。視線量には、相手の顔面—主に目の部分—へ視線を向けている時間や回数(直視量)と二者が同時に視線を向け合う時間や回数(相互視量)がある。視線量を測定するのに最近は、アイカメラなどいろいろな器具があるが、このような器具をつけるのは通常の社会的相互作用にとっては妨害となる。したがって、視線の社会的側面を研究する場合には、人間の観察者が実際の相互作用場面やVTRを見て測定することが多い。例えば、ハーフ・ミラーの後方から観察者が対面している2人のECを観察し2人の視線が合った時ボタンを押し(on)、合っていない時は押さない(off)。このon-offが音としてテープレコーダーに、また線としてペンコーダーに記録されることにより視線量を客観的に取り出している。研究で使われる視線の測度としては、① 視線総量(gaze duration)、② 視線回数(gaze frequency)、③ 視線の平均時間(mean duration of gaze)がある。①は相手に視線を向けている時間の総量(秒、%)であり多くの研究がこの指標を使っている。時間の割合(%)は全相互作用時間中に相手を見ていた時間の割合で、被験者各組の相互作用時間が異なる場合はこの測度がよい。②は相手に視線を向けた回数である。③は総量を頻度で割ったもので、相手を見ている視線時間である。この3つの測度は相互に相関がある。従来は総量(%)にのみ限定して視線研究がなされてきたが、もっと広い範囲の測度を使う必要がある。視線と発話の関係に興味を持つ研究者は、視線と発話の変数を測定して2つの合成変数としての発言中の視線、聴取中の視線を分けて考えることがある(Ellyson, Dovidio, & Fehr, 1985; Exline, Ellyson, & Long,

1975)。日常場面で、われわれは人が実際には自分を見ていないにもかかわらず、自分に視線を向けていると見誤ることがよくある。一般に人間の観察者は信頼度の低い (low-fidelity) 観察者であるといわれている (Webb, Campbell, Schwartz, & Sechrest, 1966) が、相手に視線を向ける、外すという行動の測定の信頼性は高い。従来、視線に関して報告されている数値は.66 ~ .94 の範囲である。一応信頼できる測定の基準としては.80 以上が目安であろうといわれている (Baeslen & Burgoon, 1987)。このように従来の研究で見ると、視線の観察の信頼性は高いといえよう。

信頼性が意味あるものとなるためには測度が妥当である、つまり視線の方向、回数、時間が実際に正しく確かめられたことが分かっているからである。Gibson & Pick (1963) は、視線の送り手に水平に7つの注視点に目を動かさせ、2 m の位置から6人の観察者それぞれに視線の方向の判断をさせた。送り手が受け手の目と目の間へ注視している場合の約 84% が、「真っ直わたしの方を見ている」と判断されたという。このことから彼らは、人は少なくとも自分が見られているかいないかについては、他者の視線をかなり正しく判断できると結論づけている。

第2節 視線行動研究の動向

1 視線行動研究の展開

非言語的行動における視線行動の研究は 1960 年代から始まった。前述のように、視線行動の客観的測度として、相手に向けた視線の位置 (固定点) と向けている時間や頻度 (直視量) などが観察、測定されてきた。Nielsen (1962) や Kendon (1967) は、視線の固定点と直視量が発話と関連していることを見出した。このように、自然事態での視線行動の方向や構造の現象記述から研究が始まった。次の段階として、視線行動の原因などを探るため、機能が研究されるようになった。Kendon (1967) は、対人間に

おける視線の機能として次の3つをあげている。即ち、①モニター（情報収集、フィードバック）機能：視線は自分の働きかけに対する相手の行動や表情を読みとり、次の自分の行動を調節するフィードバックの働きをする。②言語的会話を含む相互作用の展開の調整機能：視線の動きは話し手と聞き手の役割を交替する合図となる。③表現機能：相手に対する態度や感情を視線の動きや視線量で伝達する。また、対人関係の記号であるだけに、視線行動は社会規範によりそのあり方が規制されたりすることで、意識的に統制され内面を表す信号としては使用されない場合もあり、社会や文化による違いのあることも指摘されている。中でも、感情や態度と視線行動の関係に最も研究の関心が集中している。その研究課題は、2つに大別される。一つは、視線の送り手の内的状態（感情など）や対人関係を独立変数とし、視線行動を従属変数とする実験的研究（エンコーディング encoding 研究）である。もう一つは、視線行動を独立変数とし、内的状態（感情など）や対人関係を従属変数とする実験的研究である。即ち、視線行動が送り手及び受け手の関係に対してどのような影響を与えるかについての研究（ディコーディング decoding 研究）である。対面して会話している二者間における対人感情と視線行動との関係について、実験室場面で多く検討されてきた。そして、好意、非好意感情と視線行動とが密接に関連していることが示唆されている。しかし、探索的研究が多く理論的な意味づけや解釈があまりなされていない。また従来の視線行動の研究では、研究者が自分の研究を追試しても結果が異なるという再現性の低さも指摘されている。そして“ゴミ箱的経験主義 dustbowl empiricism”といわれるくらい十分な理論的枠組みを持たずに展開される傾向があった（McGuire, 1985）ので、今後、統一的、体系的な整理をすることには意義がある。日常の人間関係でも重要な意味を持つ視線行動を心理学的に検討することで、対人的相互作用のメカニズムをより深く理解することができる。

2 視線の「接近—回避モデル」とその検証

(1) 視線の「接近一回避モデル」

視線行動と親和、拒否・回避欲求の関係を説明しようとする理論的枠組みの1つに親和葛藤理論 (affiliative conflict theory: 以下AC理論と略記) がある (Argyle, 1994; Argyle & Cook, 1976; Argyle & Dean, 1965)。これは、もともと Miller (1944) によるラットの学習実験で、目標へ接近する傾向と回避する傾向が同時に生起し、それが相拮抗するという葛藤理論に示唆を得て提唱されたものである。つまり、対人相互作用にも相対立する欲求 (あるいは動機) の葛藤が想定されるとしている。AC理論によると、対面する二者 (A と B) の一方 (A 又は B) の直視量を増やす方向の力を接近力と表現し、減らす方向の力を回避力と表現すると、この相対立する力の均衡が一方の最適な直視量及び二者間の最適な相互視量を決定する。直視量や相互視量が均衡した量を超えると人は不安・気恥しさを感じ、下回ると物足りなさや不満を感じ、いずれの場合も直視量や相互視量を元のレベルへ戻そうとするとされている。ここで接近力とは、親和欲求とフィードバック欲求に基づくものである。回避力とは、見られること、内的感情を相手に知られること、などに対する恐れによる拒否・回避欲求に基づくものであるとされている。AC理論中のこの部分は視線の「接近一回避モデル」と呼ばれている (Argyle & Graham, 1977)。視線量の増減のメカニズムを説明するために、このモデルで重要な点は、視線行動を生起させたり抑制している直接の心理的状态は欲求 (接近力、回避力) であると考えられる必要がある (Argyle, 1983)。ある人がある行動をとろうとするのは、そのような欲求がその人の内に生じるからである。相手に接近したいと思い、視線を多く向ける行動がとられ、相手を避けたいと思い、視線を外すという行動がとられる。つまり、欲求 (接近力、回避力) が生じ、視線行動が生起するという関係式で欲求と視線行動の関係をとらえることができる。Argyle & Dean (1965), Argyle & Graham (1977) の視線の「接近一回避モデル」を図示したのが図 0-2 である。

このような考え方は、親和欲求と関連する相互視以外の他の行動にも適用できる。即ち、対人距離、話題の親密さ、微笑、などについても均衡点

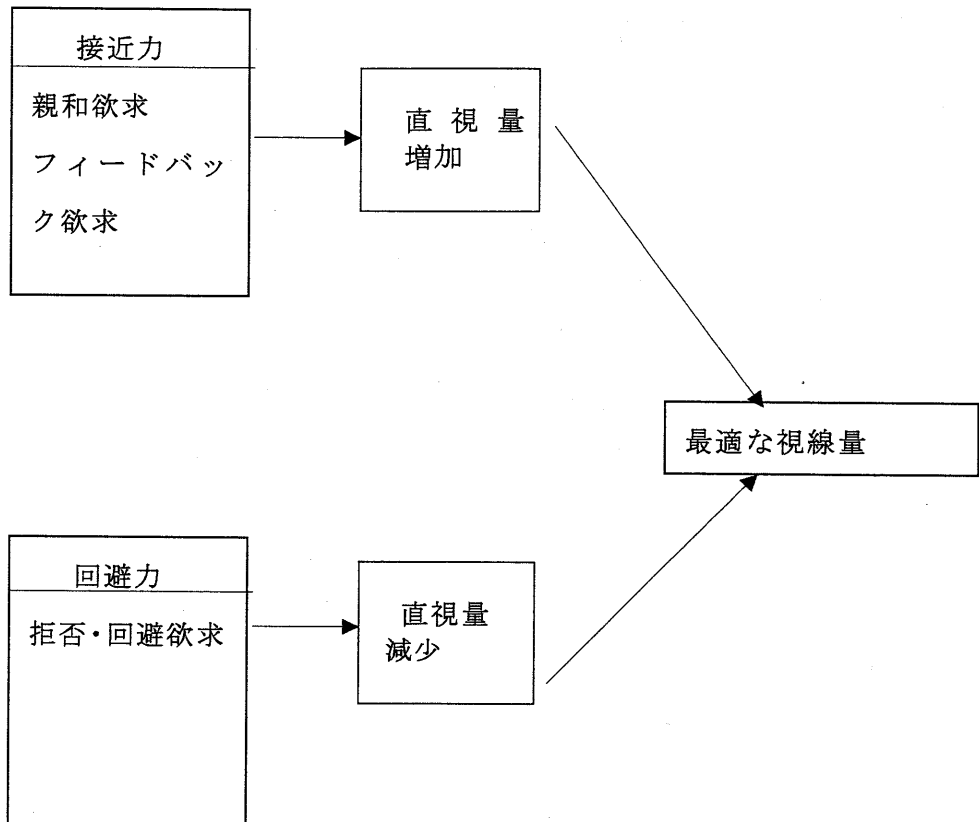


図0-2 視線の「接近—回避モデル」

がある。さらに、ある人間関係には、その関係に応じて親密性レベル（二者間の親密さの程度）が存在する。この親密性は、身体的接近、話題の親密さ、微笑、などが組合わさったものである。そして、もしこれらの構成因の1つが変化すると、他の要因間で親密性レベルを元に戻そうとする補償的な変化が起るとするのである。多くの研究者が、このAC理論の親密性レベル維持の部分に注目し、対人距離が遠くなれば、相互視量が増加し、近くなれば減少するという補完関係を見いだしている(Bailenson et al., 2001, 2003; Coutts & Schneider, 1975; Patterson, 1977)。

(2) 視線の「接近－回避モデル」に関する先行研究

視線の接近－回避モデルでは、親密な関係を求める欲求（親和欲求）と視線量に相関がみられるとされている。Exline (1963) は、親和欲求の高い女性は低い者より多く視線を向け合うことを見いだしている。Exline, Gray, & Schuette (1965) は、男女各 40 名の学生に Schutz の対人関係尺度 (FIRO-B) を実施し、面接中の視線行動との関係をみた。その結果、愛情を求める得点の高い者ほど、直視量（回数）が多くなり、モデルが支持されていた。Exline & Messick (1967) は、34 名の男子学生を FIRO-B により分類し、依存欲求が高い者が、面接者に対する直視量が多いことを示している。

次に、親和欲求を直接操作（利用）して視線行動に及ぼす影響をみた研究もいくつかある。Pellegrini, Hicks, & Gordon (1970) は、対人距離を一定にして、承認を求める欲求（親和欲求）は視線量を増加させ、承認を回避する欲求（回避欲求）は視線量を減少させるというモデルの予測する仮説を検討した。その結果、親和欲求群（総量：67.46, 回数：27.88）、統制群（総量：50.42, 回数：21.54）、回避欲求群（総量：44.58, 回数：20.75）と、条件差は有意となり、モデルの予測通りとなっていた。また相手からの承認を期待する（承認欲求がある）時に、視線量が増加するという結果を示した研究もある (Efran, 1968; Efran & Broughton, 1966; Fugita, 1974)。Nevill (1974) は、困難な課題について援助を止めたり、援助することで依存欲求を実験的に操作した。課題後の面接場面で、依存欲

求の高い者が面接者への直視量が多くなったことを示した。Lefebvre(1975)も、男性被験者が女性実験協力者に取り入る(親和欲求を増す)よう教示する群と統制群の直視量を比較した。その結果、親和欲求を増すよう教示した群(総量:75.34%, 平均時間:4.64秒)の方が統制群(総量:57.16%, 平均時間:2.61秒)より直視量が多くなり、モデルが支持されていた。

他方、福原(1977)は、日本版 FIRO-B によって高親和群と低親和群に被験者を分け、面接者との距離別に相互視量に差があるかを検討したが、いずれも有意差を見いだしていない。つまり、モデルの予測を支持する、親和欲求が高い者が低い者より視線量が多いという結果を得ていない。彼は被験者を FIRO-B 尺度の得点分布で高親和群と低親和群に分けているが、両群の平均値に大きな差はなく、低親和群といえ、親和欲求は低くなかった。視線量に差がみられなかったのは、被験者の親和欲求の高低を十分区別できなかつたためと考察している。

また、Kendon & Cook(1969)は、11名の被験者が4名の他の被験者とそれぞれ30分間会話する間の視線量を測定した。44回の会話に基づく視線量の諸測度と FIRO-B で測定された欲求との相関をみている。それによると親和欲求の高い者と聴取中の直視回数に負の相関($-0.48, p < .05$)があった。また、他者と共に居ようとする欲求の高い者と相互視平均時間に正の相関($.51, p < .05$)がみられている。しかし、彼らは、この研究は標本数が少なく、見いだされた相関データは明確なものではないと述べている。

次に Hobson, Strongman, Bull, & Craig(1973)は、視線の「接近一回避モデル」において回避欲求が視線量を減少させるという仮説を検討している。これは、被験者と実験協力者の会話の途中(2分後)で、実験者が被験者に次のような教示をして不安を操作する。ここで彼らは、不安を回避欲求とみなしている。「あなたは話が下手で、退屈である。もっと面白くしてもらわないと結果が駄目になるので、もう一度話してもらいます。」(不安群)、「あなたは大変上手に話している。もう一度同じようにやって下さい。」(肯定群)、「今休憩中です。もう一度続けてください。」(統制

群)。実験後質問紙（不安評定）とスピーチ混乱率により操作の有効性は確認された。結果は、不安操作後の2分間の会話中の各群の被験者の相手に対する視線量に差はみられず、モデルは支持されなかった。

(3) 視線の「接近－回避モデル」の妥当性

以上のように、視線の「接近－回避モデル」の検証に利用できる12の先行研究のうち、9研究はモデルを支持し、2研究は親和欲求（接近力）あるいは拒否・回避欲求（回避力）と視線量の増減との間に有意な関係を見いだしていない（福原, 1977; Hobson, et al., 1973）。そして、1研究のみがモデルの予測とは逆の結果を報告しているが（Kendon & Cook, 1969）、この研究結果は、相関分析に基づくものであり、因果関係が証明されたわけではない。したがって、従来の研究結果をみると、おおむねモデルは支持されていると考えられる。

この視線の「接近－回避モデル」は、対人感情と視線行動の関係をも説明でできるという示唆（Argyle & Cook, 1976）もあるので、対人感情という観点から発展的に再検討する必要がある。

第3節 視線の対人感情包括的「接近－回避モデル」の構築と問題点

1 視線の「接近－回避モデル」の問題点とモデルの改良の方向性

Argyle & Dean (1965)は、あらゆる対人相互作用にはある程度の親密感情 (intimacy) の表出がみられるとしている。つまり、対人感情の表出は対人相互作用に不可欠の本来的に備わった特質であることを示唆している。そして更に、Argyle & Cook (1976)は、視線の「接近－回避モデル」は対人感情と視線行動の関連性をも説明するモデルであると述べている。

ところで、一時的な心理過程である欲求に対して、対人感情は、特定の他者について個人が持っている比較的持続的で安定した感情傾向である

(深田, 1987)。また Heider(1954)は、「人々の間で起こる行為の多くは、それらを動かす感情を識別して初めて理解できる」(p. 174)として、対人関係の研究において、対人感情の理解が重要であることを指摘した。従って、接近力と回避力を規定する先行条件として、欲求に代わり対人感情を導入すると、Argyle のモデルを包括的に表現することができ、明確な予測や説明ができるようになり、利用価値も高まると考えられる。

さて、この対人感情と欲求との関係は、接近したいとかしたくないという対人的欲求を決定する基盤が対人感情であるという関係になる。ある対人感情をもつ時には、それに随伴する欲求が生じると考えられる。事実、好意感情に親和欲求が随伴し、非好意感情に拒否・回避欲求が随伴することが報告されている(齊藤, 1990)。このように、欲求の生起には、相手に対する対人感情が大きな影響を及ぼす。ある一定の感情傾向には、それに随伴する欲求があり、その感情傾向をもった時は、それに随伴する欲求が生じる。この欲求は、接近力、回避力を内包している。そして、この2つの力に応じた視線行動がとられると考えられる。例えば、好意的感情を抱く相手を目の前にしたときは、好きという感情と同時に、好意感情に随伴している親和欲求(接近力)などが生じる。そして、この接近力に基づいた行動が生起する。つまり、相手に視線を多く向けるとか、相手に接近していくという親和的行動が行われる。一方、嫌悪を抱いている相手には、嫌いという感情と同時に、嫌悪感情に随伴している拒否的欲求(回避力)などが生じる。そして、この回避力に基づいた行動が生起する。つまり、相手から視線を外すとか、相手から離れるという回避的行動が行われるのである。

次に、Argyleらの、もともとの視線の「接近-回避モデル」(Argyle & Dean, 1965)は、主に相互視について言及し、直視にはふれていないので、個人よりペアが分析の単位であろうと考えられる。従って、初期の研究の多くが相互視を重視し検討していた。しかし後に、Argyle(1983, 1994)は、直視量についても最適レベル(均衡レベル)があるとしている。また Rutter(1984)の指摘のように、相互視は2人の単なる直視の重なりであり、直視こそが基本的に重要であり、また直視によって対人感情が表出さ

れる。そこで、2者(A,B)のうち的一方(AまたはB)の側の行動に限定したモデルを考慮する必要がある。

2 視線の対人感情包括的「接近一回避モデル」の提案

以上のような過程を、筆者は図0-3のように一括した形で表現し、視線の対人感情包括的「接近一回避モデル」と呼ぶことにする。図0-3は、対面する一方の側の直視量に関するモデルである。これによって、二者の一方の側の対人感情と視線行動に関する予測が明確にできると考えられる。なお、「接近一回避モデル」では接近力と回避力は構成概念であり、直接測定されていない。

対人感情包括的「接近-回避モデル」によると、対人距離などの非言語的行動が一定ならば二者関係で好意感情を抱いている他者に対しては親和欲求が生じ、接近力が相対的に強くなるとともに、回避力が弱くなるので視線量が多くなると考えられる。これに反し、非好意感情を抱いている他者に対しては拒否・回避欲求が生じ、回避力が相対的に強くなる反面、接近力は弱くなるので視線量が少なくなると予想される。このように、このモデルから肯定的、否定的な対人感情と視線行動の間の規則的関連性が示唆される。

3 視線の対人感情包括的「接近一回避モデル」に関する先行研究

視線の対人感情包括的「接近一回避モデル」に関する研究(エンコーディング研究)例を表0-1に挙げた。

表0-1に示すように、先行研究の多くは、2水準以上の肯定的感情要因(1水準は中立的感情を含む)を用いた研究であった。つまり、対人感情包括的「接近一回避モデル」(図0-3)の上半分(接近力)の直接的検証に役立つものが多い。これらのほとんどの研究で、弱い肯定的感情より強い肯定的感情の場合に視線量が多くなっている。9研究がモデルを支持して

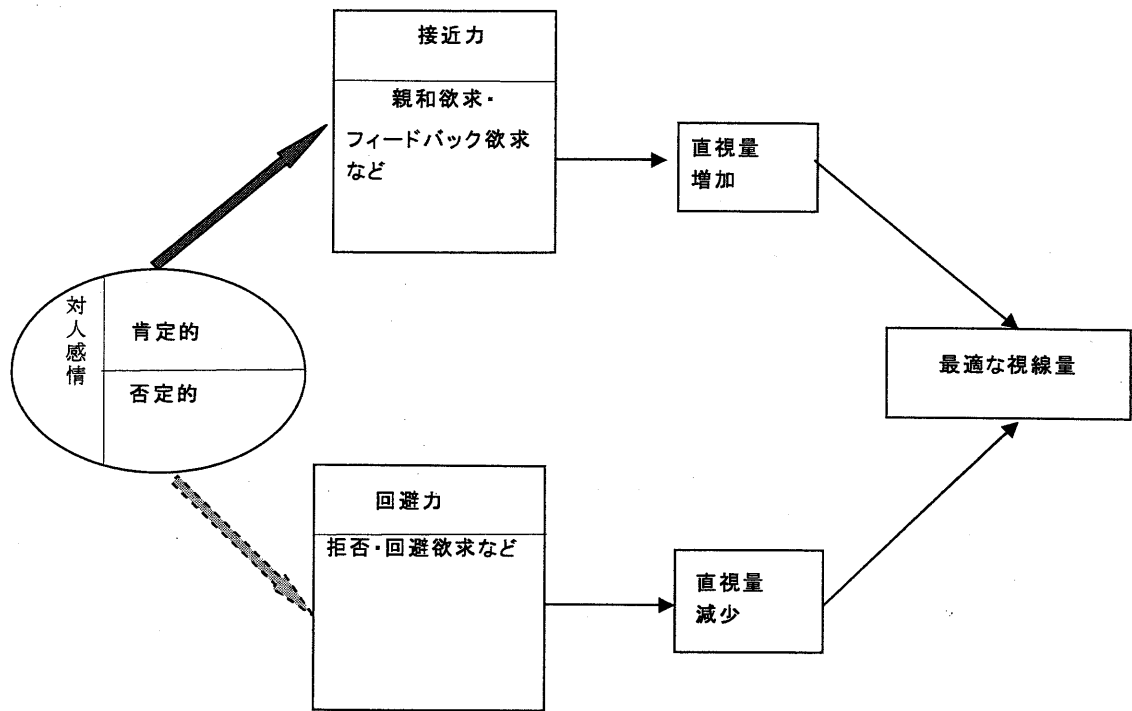


図 0-3 視線の対人感情包括的「接近-回避モデル」

表 0-1 視線の対人感情包括的「接近-回避モデル」に関係した先行研究

1. 視線の対人感情包括的「接近-回避モデル」に沿った先行研究（接近的肯定感情と回避的否定的感情を扱った研究）

1) 視線の対人感情包括的「接近-回避モデル」の直接的検証には役立たない研究（間接的証拠を提供する研究）

肯定的感情と否定的感情を対比的に 2 水準 1 要因として用いた研究

視線量…肯定的感情 > 否定的感情（モデルを間接的に支持）

Palmer & Simmons (1995)

2) 視線の対人感情包括的「接近-回避モデル」の上半分（接近力）の直接的検証に役立つ研究

2 水準以上の肯定的感情要因を用いた研究（1 水準は中立的感情を含む）

視線量…強い肯定的感情 > 弱い肯定的感情（モデルを支持）

Coutts & Schneider (1976), Foot, Chapman, & Smith (1977), Goldstein, Kilroy, & Van de Voort (1976), Guerrero (1997), Maxwell, Cook, & Burr (1985), McAdams, Jackson, & Kirshnit (1984), Murray & McGinley (1972), Rubin (1970), Russo (1975)

視線量…強い肯定的感情 \leq 弱い肯定的感情（モデルを不支持）

Glasgow & Arkowitz (1975), 和田(1986)

視線量…肯定的感情 \leq 中立的感情（モデルを不支持）

Pennington & Rutter (1981), Rutter & Stephenson (1979), 和田(1989)

3) 視線の対人感情包括的「接近-回避モデル」の下半分（回避力）の直接的検証に役立つ研究

2 水準以上の否定的感情要因を用いた研究（1 水準は中立的感情を含む）

視線量…強い否定的感情 < 弱い否定的感情 < 中立的感情（モデルを支持）

Efran & Cheyne(1974)

視線量…否定的感情 \geq 中立的感情（モデルを不支持）

Vrugt (1990)

4) 視線の対人感情包括的「接近-回避モデル」の組織的体系的な直接的検証に役立つ研究

肯定的感情、中立的感情、否定的感情を3水準1要因として用いた研究

視線量…肯定的感情 > 中立的感情 > 否定的感情 (モデルを支持)

Exline & Winters (1965)

視線量…肯定的感情 = 中立的感情 > 否定的感情 (モデルを部分的に支持) Breed (1972)

視線量…肯定的感情 < 中立的感情 > 否定的感情 (モデルを不支持) Mehrabian (1968)

2. 対人感情包括的接近—回避モデルの枠を越えた先行研究 (接近的否定的感情と回避的肯定的感情を扱った研究)

1) 2水準以上の接近的否定的感情要因を用いた研究 (1水準は中立的感情を含む)

視線量…強い否定的感情 > 弱い否定的感情

Kimble, Forte, & Yoshikawa (1981), Kimble & Olszewski (1980), Lochman & Allen (1981), Patterson, Mullens, & Romano (1971)

2) 2水準以上の肯定的感情要因を用いた研究 (1水準は中立的感情を含む)

視線量…強い肯定的感情 < 弱い肯定的感情

Thornquist, Zuckerman, & Exline (1991)

いた。しかし、5研究はモデルを支持していない。すなわち、和田（1986）はByrne(1961)の好意度操作法により好意感情の高低を操作して有効性を確認しているが、強い肯定的感情（高好意）でも平均値が4.5(7段階評定)で中点に近い。つまり、視線量に反映するほどに強い肯定的感情が喚起されなかったものと考えられる。次に、友人同士と未知同士を被験者としながらモデルを支持していない研究（和田，1989；Pennington & Rutter, 1981）もある。これは、友人同士では未知同士より接近力が強いので視線量が多くなるという仮定によってのみ二者間の視線量を測定し比較している。しかしながら、両研究ともに友人同士が未知同士より好意感情が強いという確認はなされていない。Rutter & Stephenson (1979)は、同性の未知同士と友人同士の視線行動を比較している。その結果、未知同士が同性の友人同士より相互視量、直視総量（%）、直視平均時間が多くなった。この実験では、被験者の半数の組に政治社会的話題について“お互いに相手を自分の意見に従わせるように説得する”、別の半数の組には、“相手と同じ意見になるよう協力的討論をする”、という教示（会話の意図）がなされていた。つまり、強力な意図要因（支配欲求）が介在したために、直視量が増加したと考えられる。

そして、対人感情包括的「接近—回避モデル」（図0-3）の下半分（回避力）を直接的に検証している先行研究はわずか2研究しか存在しないが、1研究がモデルを支持し(Efran & Cheyne, 1974)、1研究がモデルを支持しなかった(Vrugt, 1990)。すなわち、Efran & Cheyne (1974)は、被験者に二者会話中の実験協力者の共有空間侵入させる時の視線行動を観察した。その結果、二者の間を歩く侵入強群（強い否定的感情）、二者の側を歩く侵入弱群（弱い否定的感情）、実験協力者とカメラの間を歩く統制群（中立的感情）の順に視線行動が多くなりモデルを支持していた。しかし、Vrugt(1990)は、面接技能の評価の研究という名目で、男性セラピスト（面接者）がクライアント群と非クライアント群に、心理学授業の満足度についての面接をさせた。セラピストにクライアントと非クライアントの自己記述文を読ませることで、対人感情操作を行った。クライアント群は、自信がなく、他人との関係がうまくいかない、などの自己記述であり、

非クライアント群は、自信があり、他人との関係もうまくいっている、などの自己記述であった。その結果、セラピストはクライアント群 ($M=4.24$) より非クライアント群 ($M=2.68$) に否定的感情をもった。しかしセラピストの相手に対する直視量には差がみられず、モデルは支持されていない。

更に、より組織的体系的なモデルの直接的検証に役立つ研究が3研究存在する。Exline & Winters (1965) の研究では、面接者から否定的評価、中立的評価、肯定的評価を受けた被験者の視線量の変化量は、それぞれ、3.3%の増加、変化なし、8.8%の減少となりモデルを支持していた。また Breed (1972) も、被験者の肯定的態度、中立的態度、否定的態度に対して、被験者の相互視量は、肯定的態度 = 中立的態度 > 否定的態度となりモデルを部分的に支持していた。しかし、Meharabian (1968) の研究は、肯定的感情と否定的感情の両方が中立的感情よりも視線量を減少させることを報告し、モデルが支持されなかった。

4 対人感情包括的「接近一回避モデル」の妥当性

以上のように、モデルを支持する結果と不支持の結果が混在している。つまり、接近的肯定感情と回避的否定的感情と視線量の増減との関係も一貫していない。従って、従来の研究結果を見る限り、モデルが支持されているとは言い難いので再検討の必要がある。つまり、本研究における基本的な研究課題（第1の検討課題）として、接近的肯定的感情及び回避的否定的感情と視線量の関連性の検討がある。すなわち、接近的肯定的感情が視線行動に及ぼす影響を調べる実験を2つと、回避的否定的感情が視線行動に及ぼす影響を調べる実験を2つ設定し、対人感情包括的「接近一回避モデル」を組織的に検討する。

5 対人感情包括的「接近一回避モデル」の問題点と限界

(1) 対人感情包括的「接近—回避モデル」で説明しきれない研究結果

Fromme & Schmidt(1972)は、男子学生に、恐怖、怒り、悲しみ及び中立的な感情を対面相手に表出させたところ、非好意的な怒り感情でも相互視量が多くなることを見出した。また、男女被験者が図書館で机に座っているところへ、実験協力者（侵入者）が視線を向けて（30%）近くへ座る。このような侵入に対して、被験者は姿勢の動きや、侵入者に対する直視量を増加させた(Patterson, 1977)。これは、侵入者に対する非好意感情が示された状況であり、視線量の増加は嫌悪を意味していると考えられる。Lochman & Allen(1981)は、恋愛関係にあるカップルに葛藤場面を役割演技させて、言語、非言語的な同意、非難を観察測定した。非言語的な非難行動カテゴリーの中の相互視回数について、男女ともに不平、苦情と相互視回数に相関を見いだしている。つまり、弱い非難（弱い否定的感情）を表出する時には直視量が少ないが、強い非難（強い否定的感情）を表出する時には直視量が増加していることが見いだされた。以上の諸研究は、視線量の増加をもたらす特殊な否定的感情の存在を示唆するものである。

これらの矛盾する事実を統合してモデルを修正する必要性は、既にFromme & Beam (1974)によって示唆されているものの、未だ検討はなされていない。

(2) 否定的な接近力に関する検討課題

先行研究でみたように、好意・非好意感情と視線行動の関係がモデルの予測とは逆であることを示す研究がある。つまり、好意感情がある（接近力が強い）場合にも非好意感情がある（回避力が強い）場合にも視線量が増えることがある。これが、視線の対人感情包括的「接近—回避モデル」に対する問題点となっている。

次に、視線の対人感情包括的「接近—回避モデル」の限界は、肯定的な感情が接近力、否定的な感情が回避力と関連すると限定しているところにある。しかし、例えば、怒り感情は、否定的で不快な感情であると同時に攻撃性・支配性をも含んでいる (Fromme & Beam, 1974; Osgood, 1966)。一般に動物は、怒り、攻撃性、支配性を示すのに相手に視線を多く向けて

睨むという事実がよく知られている (Darwin, 1872; Eibl-Eibesfeldt, 1970)。更に、視線量の増加が支配欲求 (Strongman & Champness, 1968) や敵対的、攻撃的欲求 (Ellsworth, Carlsmith, & Henson, 1972) の表れであるとする研究もある。したがって、Fromme & Schmidt (1972) の怒り感情表出における視線量増加は、攻撃性・支配性が顕著に表出された結果の反映とみられる。このように、彼らの結果をも包括的に説明するためには、新たに“攻撃・支配欲求”を接近力の中に含める必要があると考えられる。なおこの場合の接近力は、好意感情のもつ肯定的な接近力とは異なる、否定的な接近力であると考えられる。しかし、こうした視点の存在は、視線の「接近－回避モデル」では考慮されていない。

また、接近力、回避力は内的なものであり、測定ができないという限界もある (Aiello, 1987)。このように、このモデルには様々な問題点があるが、AC理論は発見的な価値を持っており、今後も対人関係の理論化にとって重要な役割をするであろう (Harper, Wiens, & Mattarazzo, 1978)。

本研究における発展的課題として、否定的な接近力の問題を検討することがあげられる。すなわち、怒りのような否定的感情が視線行動を増加させるかどうかを検討することにより、否定的接近力の存在を検討することが、本研究の第2の課題である。

6 日本における視線の対人感情包括的「接近－回避モデル」検討の意義

先に述べたように、視線行動は文化規定的である。例えば、日本人は欧米人に比べて、他者に向ける視線量を抑制することが指摘されている (Argyle & Cook, 1976)。また、欧米の「視線を合わす文化」に対し、我が国が「視線を避ける文化」と呼ばれている (井上, 1982)。このように、欧米人の視線行動と日本人のそれは意味が異なる (Argyle & Cook, 1976) という指摘にもかかわらず、これまで我が国では欧米の諸研究の追試さえもあまり試みられず、研究数が多いとはいえない。例えば、視線の「接近－回避モデル」及び視線の対人感情包括的「接近－回避モデル」に直接関

連する我が国の先行研究は、筆者の研究を除くと、わずか2例(和田, 1986, 1989)が報告されているに過ぎない。視線は、文化差の大きいチャンネルでもあるので、欧米の結果がそのまま日本人に妥当しない場合もありうる。従って、日本における視線行動を組織的に研究する意義は大きい。そこで、欧米とは文化の異なる我が国においても、視線の対人感情包括的「接近一回避モデル」が適用されるかどうか検討することには付加的な意義がある。そして、本研究の知見は、現実の日本人の対人関係で生起している諸問題の解決に役立てることができるともかもしれない。事実、欧米では社会的スキル・トレーニングで視線量のコントロールの問題が取り上げられている。

第4節 本研究の目的

本研究の目的は、日本において、肯定的あるいは否定的な対人感情が視線行動に及ぼす影響を視線の対人感情包括的「接近一回避モデル」(図0-3)の立場から体系的に検討することである。第2章第1節では、二者関係において、他者に接近機能をもつ肯定的な対人感情がある場合、即ち、モデルで接近力が回避力より強い場合の視線行動について検討を加える。まず、好意感情、非好意感情を実験的に操作し、これが視線行動に及ぼす影響を検討する(実験1)。次に、交際中の男女と未知の男女について、実際の恋愛的好意感情の有無が視線行動に及ぼす影響を比較究明する(実験2)。第2節においては、他者に回避機能をもつ否定的な対人感情がある場合、即ち、モデルで回避力が接近力より強い場合の視線行動について検討を加える。まず当惑場面で当惑感情が誘発される状況における視線行動を検討する(実験3)。次に、欺瞞場面で不安感情が誘発される状況における視線行動を検討する(実験4)。最後に、他者に接近機能をもつ特殊な否定的な対人感情(実験5)が表出された場合に、図0-3のモデルから予測が当てはまるかどうかを検討する。そして、予測が当てはまらない場合にはモデルの修正を検討する。

第2章 二者会話場面における対人感情と視線行動に関する実験的研究

第1節 接近機能をもつ肯定的対人感情が視線行動に及ぼす影響

第1節では、まず実験的に操作された好意感情が視線行動にどのような影響を及ぼしているかについて調べる(実験1)。次に、現実的に恋愛的好意感情をもっている男女と、未知で初対面の男女の視線行動を比較する(実験2)。両方とも、接近力が回避力より強い事態であり、モデルから視線行動の増加が予測される。好意感情を実験的に操作する場合と現実の好意感情を要因として組み込む場合で検討することにより、好意感情が視線行動に及ぼす影響がより明確になるであろう

1 好意感情が視線行動に及ぼす影響(実験1)

問 題

二者関係において、他者に接近機能をもつ肯定的な対人感情がある場合、即ち、モデルで接近力が回避力より強い場合の視線行動について検討を加える。まず好意感情、非好意感情を実験的に操作し、これが視線行動に及ぼす影響を検討する。従来、好意感情が視線行動に及ぼす影響を調べるのに、実験的に好意感情を操作し、それと視線行動との関連性を調べるという方法が伝統的に主に使われてきた。例えば、Exline & Winters(1965)の典型的な研究がある。これは、まず面接の途中で面接者が被験者に面接中の被験者の印象評定を知らせる。「印象が悪い」(否定的評価)と告げられた被験者は、それ以後の面接で面接者に向ける視線量が減少した。また、「印象が良い」(肯定的評価)と告げられた被験者は面接者に向ける視線

量が多くなった。この結果は、視線の対人感情包括的「接近－回避モデル」が示すように、相手に好意感情をもつ場合は接近力が回避力より強くなるので視線量が増加し、非好意感情をもつ場合は回避力が接近力より強くなるので、視線量が減少するという予測を支持している。しかし、モデルの予測に反する研究もある。Mehrabian(1968)は、役割演技的実験で、非好意感情を抱く他者に対して男性被験者は視線量を減少させたが、女性被験者では有意差がなかった。しかし、この研究では被験者が役割演技中に実際に好意、非好意感情を経験したかどうかについては言及されていないので不明である。和田(1986)は、未知の者同士の男子学生に実験的に好意感情を操作した。つまり、自己紹介後に相互の第一印象を評定し、それを回収する。次に、あらかじめ好意的か非好意的な印象を与えるように評定しておいた対人判断尺度をお互いがもった印象ということで示すという方法で操作した。その結果、非好意群のほうが好意群より相互視量が多かった。操作の有効性は確認されているが(好意群： $M = 4.56$ ；非好意群： $M = 2.89$ ；7段階評定)、第一印象の操作では好意、非好意感情の喚起は不十分だと考えられる。これらの結果はモデルの予測とは逆である。以上のように、モデルの予測と一致する結果と一致しない結果がある。そこで、このモデルを再検討する必要がある。本実験では、まずByrne(1961)の態度の類似・非類似性によって好意、非好意感情を操作し、これが視線行動に及ぼす影響をみる。この方法はある程度の相互作用があるので、強い好意、非好意感情の喚起が期待できる。モデルから、相手に好意感情を持つ場合、視線量が多くなることが予測される。

さて、日本人の非言語行動(視線行動)に強い影響を与えていることが示唆されている重要な変数の1つに地位(status)要因がある。地位は、日本人の社会生活における基本的な要素である(中根, 1967)。そして例えば、日本文化においては、地位の低い者は高い者に視線を多く向けるべきではないという規範もある。しかし、地位要因によって変化する非言語的行動について実証的研究も少なく、明確な結果が得られていない。そこでこれを1つの要因として組み入れる。Lott & Sommer(1967)によると、二者間に地位の差があることは親密さが少ないことに相当する。そして、

同地位者同士より地位の差がある場合には相手と離れた距離に座席を選択する傾向があることを見出している。Exline(1972)及びExline et al.(1975)は、地位の違いの関数として、二者間の視線パターンを検討した。その結果、一般的に、地位の低い者が地位の高い者に視線を向ける方が、その逆の場合よりも多いことがわかった。ただしこの場合、話者、聞き手という役割関係を考慮する必要があるとしている。つまり地位の低い者は、話を聞いている時に相手に視線を向け、地位の高い者は話をしている時に相手に視線を向けることを見いだしている。しかし逆に高地位者が相手に視線を多く向ける場合もあることも報告されている(Mehrabian, 1968; Mehrabian & Friar, 1969; Fehr & Exline, 1987)。このように視線行動と地位要因との関係は一貫性があまりない。Argyle & Cook (1976)は、視線行動に及ぼす地位の効果は、他の変数と関連(交互作用)していることを示唆している。例えば Mehrabian(1968)は、男女被験者共、低地位より高地位の相手とより多い相互視があり、この効果は男性の方が大きいことを見いだしている。地位の効果は、女性より男性で大きく、男性は、好意感情をもつ高地位者により多く視線を向けることを見だし、性差との関連性を指摘した。しかし Mehrabian の実験では、被験者が行動を向ける対象が実際の人間ではなく、コート掛けを対象人物に想定するという仮想実験なので、現実的妥当性に欠けると考えられる。ボンド・白石(1973)は実際の面接場面での地位が非言語行動に及ぼす影響を検討している。彼らは、2名の男子学生(面接者)の服装と言語教示(高地位者:背広を着た25歳の大学院生;低地位者:セーターを着た20歳の大学生)で地位操作をしている。相互視量について被面接者の性と地位の交互作用が見いだされ、女性は低地位の面接者より高地位の面接者との相互視が多かったが、男性は逆になった。この研究では、面接者は男性だけなので、女性被験者にとっては性と地位が混交している可能性もある。従って、同性同士の相互作用も検討する必要がある。

本実験の目的は、実際の面接場面において、相手に対する好意感情と相手の地位が被験者の視線行動やその他の非言語的行動に及ぼす影響を検討することである。

仮説1. モデルより、被験者が相手に好意感情をもつ場合は、非好意感情をもつ場合よりも、視線行動が多いであろう。

ところで Mehrabian(1968)は男性被験者について、好意感情をもつ高地位者に対する視線行動が多いことを見出している。また、先のボンド・白石(1973)の結果から、次の仮説も検討する。

仮説2. 被験者は、好意感情をもつ場合は、同地位者より高地位者に対する視線行動が多いが、非好意感情の場合、両条件間に違いはないであろう。

方 法

(1) 被験者と面接者

被験者は女子短大生 44 名である。面接者（実験協力者）は被験者とはほぼ同年齢の女子短大生 4 名である。地位と年齢は混交しないように同年齢とした。なお、面接者と被験者とは以前からの面識はない。高地位の面接者、同地位の面接者として各 2 名ずつ割り当てた。

(2) 実験計画

対人感情（好意、非好意）、面接者の地位（高地位、同地位）を独立変数とする 2 要因の被験者間計画である。44 名を無作為に 4 分し、「好意・高地位」、「好意・同地位」、「非好意・高地位」、「非好意・同地位」の 4 条件にそれぞれ 11 名の被験者を割り当てた。

(3) 実験状況

面接場所は実験室で 3×3 m の空間である。面接者と被験者は対面して、間の机を隔てて、約 1.2 m の距離で座る。面接者と被験者の間に置いた机の裏側にマイクを隠しておいた。また、2 台の隠しビデオカメラによって被験者の全身像と上半身を録画した（図 1-1）。

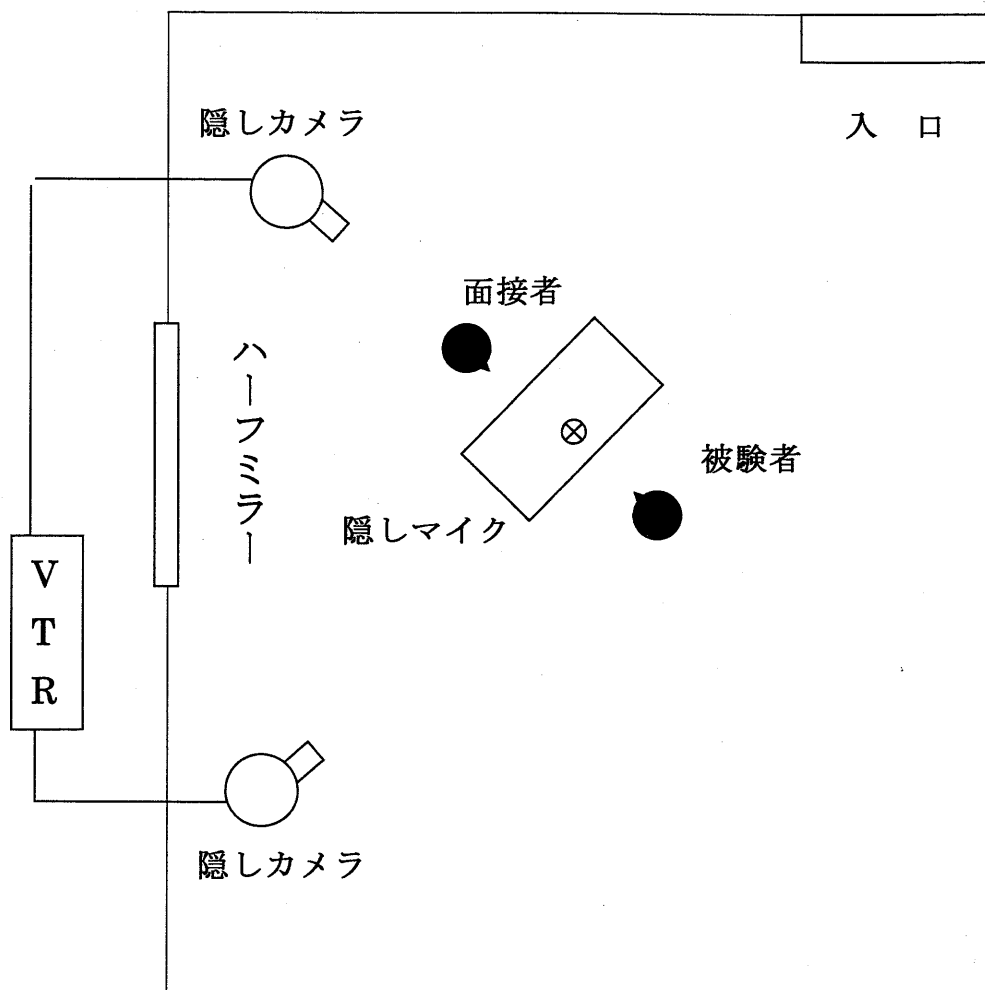


図 1-1 実験状況

(4) 手続き

1) 教示

実験開始前に、実験者は被験者に次のような教示をする。「今日ここに来て頂いたのは、“福短の学生の生活意識”について皆様方から意見をお聞きし、学生指導や就職指導の参考資料にするためです。この人が、あなたにいろいろな質問をする方です。」

2) 地位の操作

教示に続いて、地位の操作をする。高地位群には、「この人は、本学の学友会の執行部で学生生活改善部会の部長をしておられる方です。今日はこの方があなたにいろいろ質問されます。」地位の変数は、言語的教示と共に、被験者より高い地位を示すため、面接者は薄く上品な化粧をし、スーツ（短大基準服）を着用した。同地位群には、「この人は、あなたと同じ本学の学生です。今日はこの方があなたにいろいろ質問されます。」また、面接者は被験者と同じような、カジュアルな服装を着用した。被験者が質問のみに集中できるように、面接者はアクセサリなど目を引くものを一切身につけないようにした。

3) 好意感情の操作

好意、非好意感情の操作は、2人の態度の類似によって好意感情が生じ、非類似によって非好意感情が生ずるという Byrne(1961)の方法を適用して次のように行った。「それでは、質問に入る前に、お二人に簡単なアンケートをして、意見を交換して頂きます。これは、後での質問との関係を見るためのものです。それでは、お手元の質問紙に記入してください。」被験者と面接者の共同作業として上の教示のように、態度質問紙(世間の青年観—8項目)に記入する。実験者は、二人が質問紙に記入するのを側で待っている。記入が終わった頃を見計らって、「これから、お二人にそれぞれ自分の回答を読み上げて頂きますので、お互いによく聴いて下さい。」と言う。そして、被験者に向かって、「それでは、あなたから自分の回答を読み上げてもらいます。」と言い、さらに面接者(実験協力者)に向いても「あなたにも後で読み上げてもらいます。」と言って、被験者の自分の回答を声を出して読み上げさせる。記入後、「これからお二人に

それぞれ自分の回答を読み上げていただきますので、お互同士よく相手の回答を聞いてください。」と教示して、この時、好意条件(類似群)の場合は、面接者が8項目中7項目について被験者と全く同じ回答を読みあげる(好意感情条件の操作)。非好意条件(非類似群)の場合は、8項目7項目について被験者とは異なる回答を読み上げる(非好意感情条件の操作)。実験者は、面接者に被験者の回答を知らせるため、毎回、被験者が先に答えるよう指示する。面接者は気づかれないように被験者の回答をメモして、後で、それと類似、非類似の回答として読みあげる。そして次に、被験者と面接者は相互に相手の印象評定をする。記入後、用紙は実験者が回収する。

4) 面接

地位操作、対人感情操作の後、面接者は質問を始める。面接者は、一定の位置で手に持った質問用紙を見て質問をし、被験者が回答をする間は顔をあげて、常時、被験者の目の周辺に視線を向けている。質問を一定の順序に従って繰り返す。質問は、次のような16項目から成る(表1-1)。

「あなたはどんなスポーツが好きですか」、「あなたはどんな本を読むのが好きですか」、「あなたの好きな学科は何ですか」、「あなたはこの学校で何かクラブ活動をしていますか」、「あなたは休日はどのように過ごしておられますか」などである。面接者は普通(中性的)の表情で、前傾でも後傾でもない普通の姿勢で質問を行った。質問は1項目ずつ、ゆっくり、はっきりと言う。被験者が質問した場合は、最小限度の答えをするが、それ以外には話をしない。被験者の各回答後、一度軽くうなずくだけで、それ以外にうなずいたり、同意したり、微笑したりしない。被験者の回答がない場合は、4~5秒待つて次の項目を質問する。また、各面接者はすべての被験者に対し同様な服装で対応した。面接が終了した時、実験者は、面接者の後方のドアをノックした。面接終了後、被験者は別室で実験後質問紙に記入して実験は終了した(図1-2)。

(5) 好意感情操作後の質問紙

1) 面接者に対する類似性の知覚と好意感情

表 1-1 面接に使用した質問項目

1. あなたの出身地はどこですか。
 2. 出身高校はどちらですか。
 3. この短大に入学して、設備、環境、授業などについてどんな印象を受けましたか。
 4. あなたは、日曜日などの休みの日は、どのように過ごしておられますか。
 5. 最近、かなりの学生がアルバイトをしているようですが、
学生がアルバイトをするということについてどう思いますか。
 6. あなたはどんなスポーツをするのが好きですか。
 7. それはなぜですか。
 8. あなたはどんな映画が印象に残っていますか。
 9. あなたの好きなテレビ番組は何ですか。
 10. あなたはどんな本を読むのが、好きですか。
 11. 最近読んだ新聞記事の中で印象に残ったのは何ですか。
 12. あなたはどんなところへ旅行したいですか。
 13. それはなぜですか。
 14. あなたは、将来どんな職業につきたいと思いますか。
 15. なぜ、その職業につきたいと思いますか。
 16. 女性が結婚後も仕事を続けることについてどう思いますか。
-

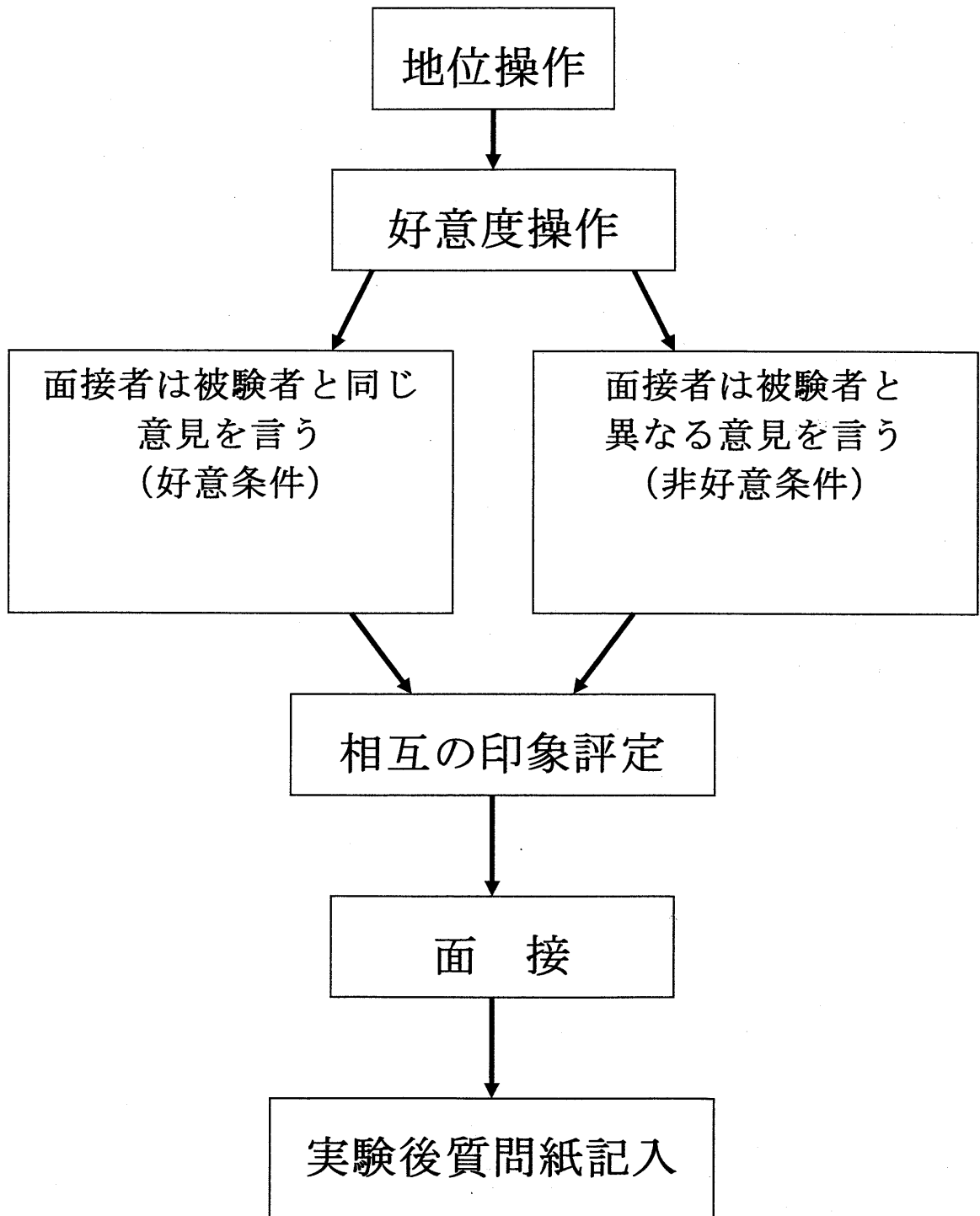


図 1-2 実験手続き

被験者の面接者に対する類似性の知覚を測定する指標として、「考え方が似ている」、好意感情の指標として、「友好的な」、「暖かい」、「好意的な」の3項目の尺度を作成した。それぞれ「非常に……な感じがする(7)」から「全く……な感じがしない(1)」までの7点尺度であった。これらは項目別に分析した。

(6) 面接後質問紙

1) 面接者に対する印象

印象評定項目は、「やさしい(7) - 厳しい(1)」、「勇敢な(7) - 臆病な(1)」、「まじめな(7) - ふまじめな(1)」、「冷たい(1) - 暖かい(7)」、「丸い(7) - 角のある(1)」、「地位の高い(7) - 地位の低い(1)」、「無能な(1) - 有能な(7)」、「ごうまん(1) - けんそん(7)」、「情熱的な(7) - 冷静な(1)」、「不安定な(1) - 安定な(7)」、「外向的な(7) - 内向的な(1)」、「元気な(7) - 病弱な(1)」、「誠実な(7) - 不誠実な(1)」、「無口な(1) - おしゃべりな(7)」、「理性的な(1) - 情熱的な(7)」、「たくましい(7) - 弱々しい(1)」の16項目で、7点尺度である。これらは項目別に分析した。

2) 面接中の気持ち

「リラックスした(7) - 緊張した(1)」、「いらいらした(1) - 落ち着いた(7)」、「快い(7) - 不快な(1)」、「ドキドキした(1) - おだやかな(7)」の4項目で、7点尺度である。これらは項目別に分析した。

(7) 従属変数の測定

1) 直視量

ハーフ・ミラーの後方から観察者2名が1名ずつ交代で被験者の視線量を測定した。録音式行動記録器(竹井機器製)により、精度1秒で測定がなされた。観察者は被験者が対象人物に視線を向けている間、エンコーダーボタンを押している。対象人物から視線を外した時にはボタンを離す。このボタンはコードでブザーに接続されており、このボタンを押すたびにブザーが鳴る。この音はブザーの横に置かれたテープレコーダーに録音さ

れる。これによって、直視の回数と持続時間とが記録される。エンコーダーから発信された音信号がテープレコーダーに録音される。この音信号をデータアナライザーによって数値に変換し、後の分析に用いた。測定した変数は、直視回数、直視総量（秒）、さらに直視総量／直視回数から、直視の平均時間を算出した。

2) 面接時間

「あなたの出身地は－……」から「質問は以上です」の直前までの時間（秒）。ストップウォッチで測定する。

3) 発言量

質問に対する被験者の応答の時間総量。1秒以上の沈黙している時間は含めない。

結 果

(1) 信頼性の検討

従属変数の測定は、実験者とは別の2名の観察者により行われた。2名の観察者は44名の被験者のほぼ半数ずつを受けもって測定した。2名の測定がどの程度一致しているかをみるために、被験者7名の22回の表出を2名が独立に測定した値について、一致度（Pearsonの相関係数）を求めた。これによると、視線回数… $r = .87$ ($p < .001$)、視線総量… $r = .98$ ($p < .001$)となった。一致度は満足すべきものであるので、2名の観察者の測定値をそれぞれ以下の分析に使用した。

(2) 実験操作の有効性

1) 好意感情の操作

好意感情の操作は、意見の類似、非類似によった。面接前の意見調査後の自己評定質問紙によると、類似群は非類似群より有意に“考え方が似ている”と感じていた ($F(1, 40) = 350.62$, $p < .00001$)。そして、相手に対して、友好的で、暖かく、好意的な感情を抱いていた(好意群: $M = 14.64$, $SD = 2.72$, 非好意群: $M = 10.82$, $SD = 2.75$; $F(1, 40) = 25.94$, p

く .00001)。したがって好意感情の操作の有効性が確認された。

2) 地位の操作

地位は、教示によって操作された。この効果を“地位の高い—地位の低い”の項目の尺度得点で確かめた。この指標について2要因の分散分析を行ったところ、地位要因の主効果が有意であった ($F(1, 40) = 7.31, p < .01$)。すなわち、被験者は、「生活改善部会の部長」と紹介された面接者 ($M = 4.77, SD = 0.17$) を「同じ学生」と紹介された面接者 ($M = 4.14, SD = 0.17$) よりも地位が高いと認知していた。したがって地位の操作も有効であったといえよう。

(3) 面接者の印象

面接者に対する印象は、16項目の各得点に、それぞれ2要因の分散分析を施した。まず、高地位より同地位の面接者に対してよりやさしいと感じ (高地位群: $M = 4.18, SD = 1.26$; 低地位群: $M = 5.23, SD = 1.07$; $F(1, 40) = 9.51, p < .003$)、より謙遜であると感じ (高地位群: $M = 4.04, SD = 1.26$; 低地位群: $M = 5.00, SD = 1.07$; $F(1, 40) = 11.70, p < .001$)、より暖かいと感じている (高地位群: $M = 3.95, SD = 0.84$; 低地位群: $M = 4.77, SD = 0.92$; $F(1, 40) = 10.80, p < .002$)。また、非好意群より好意群の方がより暖かいと感じている傾向もみられる (高地位群: $M = 4.59, SD = 0.80$; 低地位群: $M = 4.14, SD = 1.08$; $F(1, 40) = 3.33, p < .07$)。さらに、同地位の面接者では好意感情の影響はないが、高地位の面接者では好意感情の影響がみられ、好意群の方が非好意群より暖かいと感じていた ($F(1, 40) = 4.80, p < .03$)

面接中の被験者の気持ちは、4項目それぞれによってチェックした。この各得点に2要因分散分析を行った。その結果、「リラックスした—緊張した」の項目について、対人感情の要因の主効果が有意となった ($F(1, 40) = 6.77, p < .01$)。すなわち、好意群 ($M = 3.05, SD = 1.00$) の方が非好意群 ($M = 2.32, SD = 0.89$) より面接中にリラックスしていた。また地位要因の主効果が有意な傾向となった ($F(1, 40) = 3.81, p < .058$)。つまり、同地位 ($M = 2.95, SD = 1.05$) より高地位 ($M = 2.41, SD = 0.91$)

の面接者の場合に、緊張している傾向がみられた。次に、「ドキドキした—おだやかな」の項目について、対人感情の要因の主効果が有意となった ($F(1, 40) = 10.0, p < .003$)。すなわち、好意群 ($M = 3.50, SD = 1.23$)の方が非好意群 ($M = 2.41, SD = 1.01$)より面接中に穏やかな気持ちであった。その他の項目については、有意差がみられなかった。

(4) 仮説の検討

データの分析については、直視総量、1分当りの直視回数及び直視の平均時間(総量/回数)について行った(表1-2)。なお、直視総量については、これを角変換した値について以下の分析を行った。各条件における従属変数の平均値と標準偏差を表1-2に示した。さて仮説1は、好意感情をもっている相手に対しては、視線行動が増えるということであった。直視量について対人感情要因の主効果が有意であった(総量, ($F(1, 40) = 5.00, p < .03$ (図1-3) ; 平均時間, $F(1, 40) = 4.02, p < .05$)。つまり、好意感情をもっている相手に対しては、直視量(総量、平均時間)が多くなり、仮説1が支持されていた。次に仮説2は、好意感情をもつ場合は、同地位者より高地位者に対する視線行動が多いが、非好意感情の場合、両条件間に違いはない、ということであった。しかし、直視総量、平均時間、回数いずれの測度についても地位要因の主効果及び対人感情との交互作用は有意ではなかった。したがって、仮説2は支持されなかった。

(5) 面接中の視線以外の非言語的行動

1) 面接時間

面接時間(秒)の平均は、240.01秒($SD = 40.6$)であった。2要因分散分析によると、いずれの条件についても有意差はなかった。

2) 被験者の発言量

発言量については、%値に角変換を施し分散分析を行った。その結果、好意感情、地位、交互作用要因すべての要因が有意となった(図1-4)。対人感情要因が有意で($F(1, 40) = 4.51, p < .03$)、

表1-2 対人感情と地位による直視量の平均値と標準偏差

対人感情	地位	総量 (%)		回数		平均時間	
		<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
好意	同地位	37.60	13.62	10.36	2.75	2.40	1.17
	高地位	42.12	24.41	9.44	3.28	3.33	3.57
非好意	同地位	29.58	11.47	10.02	2.46	1.74	0.47
	高地位	28.72	10.38	10.45	2.86	1.67	0.75

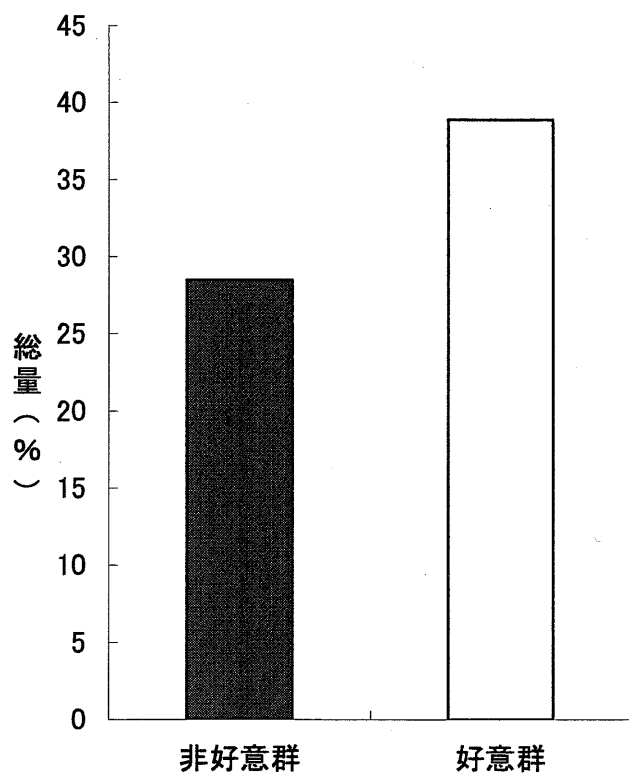


図1-3 直視総量の平均値 (実験1)

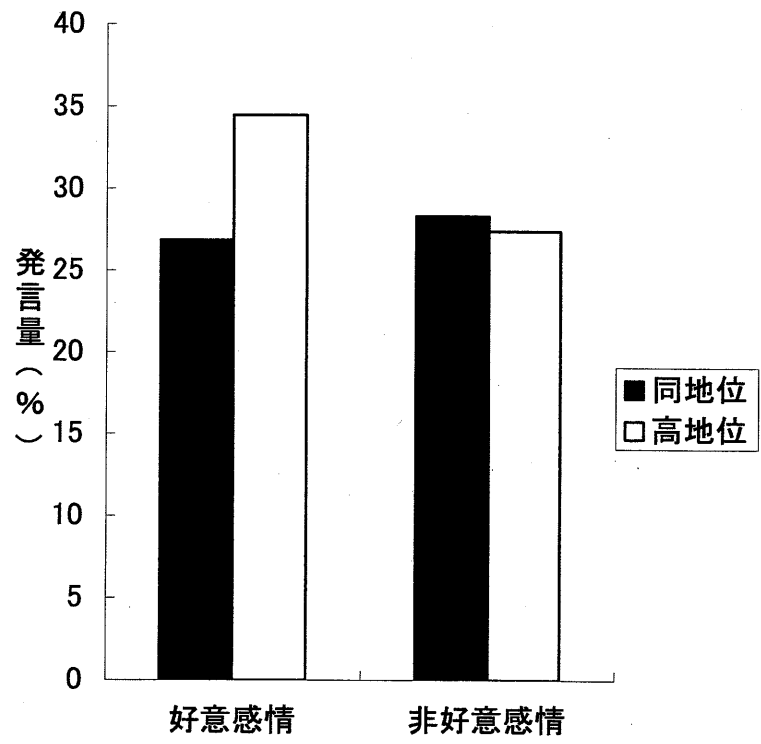


图1-4 发言量

面接者に好意感情をもっている条件で、発言量が多かった。また、地位要因の主効果が有意で ($F(1, 40) = 6.31, p < .01$)、高地位条件で発言量が多かった。さらに、交互作用も有意となった ($F(1, 40) = 10.27, p < .002$)。すなわち、好意感情をもつ高地位者に対して発言量が最も多くなっていた。好意感情がある場合、同地位者より高地位の面接者に対して発言量が多い。しかし、非好意感情がある場合には、地位の違いによる発言量の差はなかった。

考 察

表 1-2 に示されているように、相手に好意的感情をもっている場合は非好意的感情をもっている場合より直視量が多かった (直視総量 - 好意: 39 % vs 非好意: 32 % ; 直視平均時間 - 好意: 2.84 vs 非好意: 1.71)。つまり、好意感情をもつ他者に向けた視線量 (直視総量と平均時間) が多くなり、仮説 1 は支持され、モデルを支持しているといえよう。このように、実験的に操作された好意感情について、モデルの予測通りに、好意感情をもつ他者に向ける視線量が多くなった。これはモデルから、好意感情を持つ場合には、接近力が強く、回避力が弱くなると考えられるので、線量が増加したと解釈された。本研究では、実験的に操作された好意、非好意感情と視線行動との関連を検討した。その結果、視線の対人感情包括的「接近-回避モデル」の予測通りになった。本研究は、実験的に操作された対人感情であるので、実際に好意感情を抱き合っている者同士についても検討する必要がある。

仮説 2 の地位要因の主効果及び対人感情と地位要因の交互作用はともに有意ではなかった。したがって、仮説 2 は支持されなかった。本研究では、高地位者 (平均評定値: $M = 4.77$) と同地位者 (平均評定値: $M = 4.14$) の間に有意差があり、地位操作の有効性は確認されていた。しかし、両評定値とも 7 段階の中間であり、十分な地位の差にはなっていないと考えられる。従って、先行研究でみられたような地位の差に起因する視線量の差が得られなかったと推測される。地位を実験的に操作している多くの研究

では役割演技（ロールプレイ）法を使っている。本研究でもこの方法を使った。そこでは、面接者は、自分が高地位、低地位であるとみなして演技行動している。この場合、役割動機（role motive）が問題となるという指摘がある（Hall & Halberstadt, 1986）。つまり高地位者、低地位者の非言語行動は、地位自体の要因よりも、このような文脈、動機的要因と関連している可能性もある。例えば、高地位者が自分の役割を権威的にとらえている場合は、えらそうにして微笑も少なくなるだろう。逆に、支援的で暖かい上司というように規定している場合には、優しく微笑も多くなるであろう。このような問題を排除するには、現実の高地位者（または、低地位者）が面接するような事態での実験が望まれる。

さて、視線量には地位の影響は見られなかったが、被面接者の発話量については地位要因、対人感情及び交互作用が有意となった。つまり、高地位条件で発話量が多くなっていた。録音された高地位条件の被験者の発話を検討してみると、敬語が多く使われ、省略文でなく正しい文章で話す者が多かった。つまり、Meharabian(1981)の指摘のように、人は同地位の関係より、地位の差がある場合は行動が形式的、儀礼的になるためであろう。このことも、発話量が多くなった原因の1つと考えられる。また、好意感情を抱いている条件でも発話量が多かった。これは、好意感情を持っている場合、会話量が多くなる（ボンド・白石, 1973）という指摘とも一致している。以上のことから、好意感情を抱いた高地位者に対して最も発話量が多くなったと考えられる。

本研究では、面接者、被験者ともにすべて女性であった。今後、男性を含めた検討も必要である。

最後に、本論文の枠組みに沿って実験1を要約すると以下のようなになる。

要 約

実験1においては、相手に対する好意感情が視線行動に及ぼす影響を次の仮説によって検討した。モデルより、被験者が相手に好意感情をもつ場合は、非好意感情をもつ場合よりも、直視量が多いであろう。被験者は女

子短大生 44 名、面接者（実験協力者）は女子短大生 4 名であった。実験計画は対人感情（好意、非好意）と面接者の地位（高地位、同地位）を独立変数とする 2 要因の被験者間計画であった。面接（「学生生活意識」について）の前に、2 人に簡単な質問紙を実施し各自相手の目の前で回答を読み上げた。2 人の態度の類似（被験者と面接者が同じ回答）によって好意感情が生じ、非類似（被験者と面接者が異なる回答）によって非好意感情が生ずるという Byrne (1961) の方法を適用し、対人感情の操作をした。また地位の操作では、高地位群には面接者が、“学生生活改善部会の部長”であるとし、同地位群には、“本学の学生”として紹介した。好意感情と地位の操作は共に有効であった。従属変数の測定にあたっては、ハーフ・ミラーの後方から 2 名の観察者が 1 名ずつ交代で被験者の視線量を測定した。使用した測度は、対面時間全体における直視の総量（記録測定時間に対する直視時間の比率：％）、1 分当りの平均回数、1 回当たりの平均時間（秒）であった。直視総量、平均時間について、対人感情要因の主効果が有意となった。すなわち、好意感情をもつ他者への直視量が多くなり仮説は支持された。モデルから予測される通り、実験的に操作された好意感情については、好意感情をもつ他者に対する直視量が多くなった。

2 恋愛的好意感情が視線行動に及ぼす影響（実験 2）

問 題

実験 1 では対人感情のうち好意感情を取り上げ、操作された好意感情についてモデルが当てはまることを明らかにした。次の課題として、実験的に操作されていない、実際に自然的に好意感情を既にもっている人の場合もモデルが当てはまるかどうかを明らかにされねばならない、ということを指摘しておいた。したがって本研究では、操作された好意感情だけでなく自然発生的な好意感情の場合にもモデルが当てはまるかどうかを調べ

るために実験2を実施する。

Fehr & Exline(1987)は、まず現実にある実際の間人間関係を選んで、その中で視線を測定するのが視線研究を意味深く進展させると述べている。従来の対人間の視線研究では、肯定的な対人感情を実験的に操作して作られた関係や状況において視線量を測定することが多かった。そこで本研究では、実験的に作られた関係性ではなく、実際に恋愛的好意感情をもって交際中の男女と初対面で未知の男女を対象としてとり上げる。また多くの視線研究が扱っている、実験協力者と被験者の相互作用ではなく、日常場面に近い状況で、二者間会話中における視線行動を検討する。

さて、実際に好意的な関係にある人々の直視量を検討した研究がいくつかある。Coutts & Schneider(1976)は、女子学生の友人同士と未知同士のそれぞれの会話中に、友人同士が未知同士より直視量と相互視量が多いことを見いだした。また、男女児童(7, 8歳)の相互作用場面でも、友人同士が未知同士より直視総量(秒)が多いことが報告されている(Foot et al., 1977)。次にRubin(1970)は、強度の恋人同士(男女とも恋愛感情尺度[love scale]で平均点以上を得た者)の方が弱度の恋人同士(平均点以下を得た者)より、待ち時間中に相互視量(強度44.0%; 弱度34.7%)が多いことを見いだした。また男性より女性の直視量が多いことも見いだされた。しかし、強度の恋人同士と弱度の恋人同士の直視量について有意差はなかった。Goldstein et al.(1976)は、Rubinの追試的研究で、会話中に相互視総量(%)が未知の男女(25%)より恋愛感情の強い男女(52%)の方が多く見いだした。しかし、Rubinの追試を行ったWhite(1975)は直視量と恋愛的好意感情の間に有意な相関を見いだしていない(Harper et al., 1978)。Beier & Sternberg(1977)は、51組の新婚夫婦(3-6ヶ月後)に結婚適応度調査(Discord Questionnaire; 不和調査)を実施し、適応度の異なる夫婦を面接観察した。その結果、うまくいっている夫婦はうまくいっていない夫婦より相互視の回数、平均時間が多いことを見いだした。Guerrero(1997)は、恋人、同性友人、異性友人のNVBを比較し、恋人同士が、同性・異性友人より視線量が多いことを見いだした。しかしこの研究では視線量が7段階評定で調べられており、実際の視線量は測定され

ていない。

Russo(1975)は、幼児、児童の会話場面で、友人同士と未知同士の間に相互視総量(%)に有意差を見いだしていない。Rutter & Stephenson(1979)は、新聞の募集広告に応じた男女大学生で、同性について実際の友人同士と未知同士の会話場面を分析した。その結果、友人よりも未知同士の間で相互視総量及び直視量(総量、平均時間)と聴取中の直視総量が多いことを報告している。発話の分析結果では、友人同士は未知同士より発話が短く回数が多く、発話量は友人同士より未知同士の方が多くなっていた。また、沈黙時間は友人同士が多かった。すなわち、友人同士はお互いの考え方などを既によく知っているのも特に多く話す必要がないのである。Pennington & Rutter(1981)は、11歳の男児、女児をソシオメトリック・テストで友人同士と未知同士に分け、各ペアに3分間の会話をさせ、視線量と発話量を測定した。その結果、友人、未知関係によって視線量、発話量共に影響を受けなかった。また和田(1989)は、友人同士より未知同士において直視回数が多くなることを見いだしている。市河・車谷・香西(1989)も、実際の友人同士、未知同士を比較しているが、相互視量と直視量に関係性要因の有意な主効果は認められていない。このように、現実の二者関係においても視線の対人感情包括的「接近-回避モデル」の予測と一致する結果と一致しない結果がある。

前述の12研究のうち7研究は、友人同士と未知同士を比較している。二者関係(独立変数)による視線量の差を認めた研究が2つ、認めなかった研究が5つある。単なる友人同士と未知同士では独立変数の操作としては弱すぎたがために独立変数の効果が検出できなかつたとも考えられる。さて、モデルは、好意感情の強さと直視量の間には正比例関係を予測している。これは、Rubin(1970)で強い愛情群が弱い愛情群より、またGuerrero(1997)で恋人同士が友人同士より視線量が多いことから支持されているといえよう。そこで、本研究では恋愛的好意感情を抱きあっている男女を対象に取り上げる。恋愛的好意感情では強い好意感情が予想されるので、恋人同士と未知の男女を比較することで、より明確にモデルの検討ができると考えられる。なお本研究では、恋愛的好意感情も好意的感

情の一部である (Steinberg, 1988) という立場で研究を進める。日本では、恋愛関係の研究は調査を中心に進められており、恋愛関係の行動的特徴 (視線行動など) の実験的研究は非常に少ない。従って、本研究の結果は恋愛行動の特徴についての知見に寄与することも期待される。

さて、実験 1 は面接者も被験者も女性だけなので女性同士のペアの結果であった。本実験 2 では、女性と男性のペアという観点でも異なっている。Ellsworth & Ludwig (1972) が言うように、視線行動においては原則として必ず性差が見いだされている。多くの研究で、女性が男性より直視量が多いことが見いだされている (Hall, 1984)。そこで本研究でも視線行動の性差についても検討を行う。

最後に、本研究では男女の会話中の視線行動を観察するので、視線と発話の関係についても検討する。視線行動は会話と密接な関係があり、会話の流れによって変化する (Kendon, 1967)。したがって、直視総量、相互視総量のような測度だけでは、会話の流れに基づく視線の変化を十分に反映することができない (吉田・飯田, 1981)。そこで本研究では、視線と発話の変数を測定して、2つの合成変数としての発言中の視線量と聴取中の視線量という視線分析測度を導入する。

さて以上の論点を踏まえて、実験 2 では次の3つの仮説を検証する。

仮説 1 初対面の男女間に比較して交際中の男女間の相互視量が多いであろう。

仮説 2 交際中の男女の方が初対面の男女よりそれぞれの直視量が多いであろう。

仮説 3 交際中及び初対面の男女において、男性が女性に向ける直視量より女性が男性に向ける直視量が多いであろう。

方 法

(1) 被験者

男女大学生 (18~20 才) 76 名 (男性 38 名、女性 38 名) が被験者である。被験者は、交際中の男女学生 (Dating Couples: 以下 DC と略記) 18

組と初対面の男女学生 (Unacquainted Pair: 以下 UP と略記) 20 組、計 76 名である。女子短期大学の大学祭に来学した男女のカップルを対象にして実験を実施した。交際中の男女の交際期間はそれぞれ異なるが、2 ヶ月～4 年程度の範囲にある。被験者は 2 人 1 組で実験に参加する。

(2) 実験計画

二者関係 (初対面、交際中) と性を独立変数とする 2 要因の被験者間計画である。

(3) 実験状況

男女の被験者は、約 80 度の角度でお互いに少し向かい合うようにして椅子に座って話す (図 2-1)。相互視量は二者間の対人距離と関連している

(Argyle & Dean, 1965) ので、距離は変えないように固定してある。具体的には、2 つの椅子を床に固定した。2 人間の距離は初対面、交際中条件とも約 1.1 m である。2 人の会話は、机の上にあるマイクによってテープレコーダーに収録される。また 2 人の行動は、2 台の隠しビデオカメラにより収録される。2 台のビデオカメラによる映像は、特殊効果装置 (SONY 製) によって合成し、画面に 2 人が左右に並んでいるように収録される。

(4) 手続き

実験者は、2 人の男女被験者を実験室へ案内し、どちらの席でもよいから椅子に座るよう告げる。2 人が座ると、実験者は次のような教示を行う。「私達は、今、若い男女の異性観について調べています。男女のカップルの方にここへ来て頂いて、しばらくの間、話し合いをして頂いています。なお、実際の生の意見がほしいので、話し合いを録音させて下さい。もちろんお名前や内容について個別的に公表したりすることはありません。集計が終わりしだい、内容は消してしまいますので安心して下さい。それではお話頂く前に、私は隣の部屋でテープレコーダーの準備をします。この準備に 2 分ぐらいかかりますので、その間待っていて下さい。準備が終わ

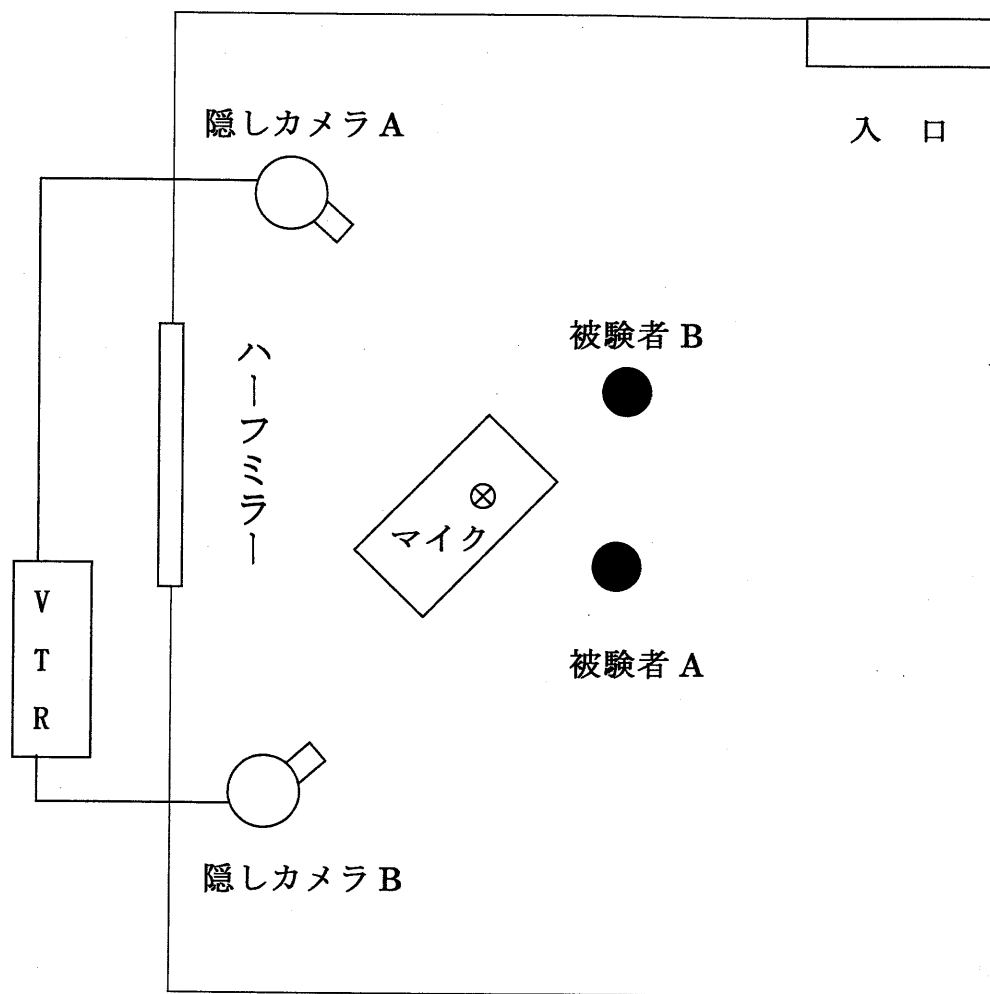


図 2-1 実験状況

りましたらあのドアをロックしますので、その合図で話し始めて下さい。5分間くらいしたらまたここへ戻って来ますので、それまで話し合っていて下さい。それではよろしくお願いします。」この教示の後、実験者は隣室へ退室する。約2分後、実験室と観察室の間のドアをロックして話し合いを始める合図をする。さらに5分間経過後、再びロックをして話し合い終了の合図をする。実験者は実験室へ戻り、2人に質問紙を手渡しその場で記入してもらう。記入後、すべて終了した旨を告げて2人を退出させた。

(5) 実験後質問紙

1) 話題内容の難易度、恥ずかしさ、一般性、及び視線

難易度に関しては、「話の内容は難しかったですか、やさしかったですか」という内容に「非常に難しかった(7) —非常にやさしかった(1)」で回答する7点尺度であった。恥ずかしさに関しては、「話の内容は恥ずかしかったですか、恥ずかしくなかったですか」という内容に「非常に恥ずかしかった(7) —全く恥ずかしくなかった(1)」で回答する7点尺度であった。一般性に関しては、「話の内容は一般的でしたか、個人的でしたか」という内容に「非常に一般的(7) —非常に個人的(1)」で回答する7点尺度であった。視線に関しては、「相手の目を見て話せましたか」という内容に「非常によく見て話せた(7) —全く見て話せなかった(1)」で回答する7点尺度であった。これらは項目別に分析した。

2) 対面時の気持ち

「快い(7) —不快な(1)」、「リラックスした(7) —緊張した(1)」、「いらいらした(1) —落ち着いた(7)」、「ドキドキした(1) —おだやかな(7)」の4項目から成るSD形式の7点尺度である。これらは項目別に分析した。

3) 恋愛感情

DC群にRubin(1970)の恋愛感情尺度を翻訳して実施した。これは、親和欲求、援助傾向、独占的感情という要素を含む13項目から成るリッカート尺度で、被験者は特定の人物を挙げた後で、それぞれの項目に対して、「全くそう思わない(1)」から「非常にそう思う(9)」に至る9点尺度上に評定する。13項目の合計点が尺度値とされるので、可能な得点範囲

は、13-117 となる。なお、値が大きいほど恋愛感情が強くなるように得点化した。藤原・黒川・秋月（1983）は、Rubin の尺度の日本語版で信頼性と妥当性を確認している。

(6) 従属変数（直視量と発言量）の測定

2 人の被験者の直視と発話を同時に観察し記録するために、1 回のセッションで 4 名の観察者（測定者）が 2 名の被験者の直視と発話をそれぞれ 1 つずつ受けもつ。そして、視線を担当する 2 名の観察者はハーフ・ミラーの後方で、また発話を担当する観察者は VTR モニターの前でそれぞれ測定する（図 2-1 参照）。視線を担当する観察者（1）は自分が担当している被験者（A）が、もう 1 人の被験者である相手（B）の目の辺りに視線を向けている時にはスイッチを押して（on）、視線を向けていない時にはスイッチを離しておく（off）。同様に、発話を担当する観察者（2）は自分の担当している被験者（A）が話している時にはスイッチを押して、話していない時にはスイッチを離しておく。被験者 2 人の視線と発話は on-off パターンとして観察者が連続的に記録する。この on - off 信号が行動分析器（竹井機器製）で処理される。この行動の連続は 4 つの状態としてチャートに、図 2-2 に示すようにプリントアウトされる。なお、測定は実験者がドアをロックする合図で開始され、約 3 分後のドアのロック音で測定を終了した。

観察者の測定は、行動分析器により次の測度がプリントアウトされる。なお、待ち時間と会話中は別々に測定した。①男性の女性に対する直視量、②女性の男性に対する直視量、③男性の発言量、④女性の発言量。なお、⑤男性の発言中の直視量、⑥男性の聴取中の直視量、⑦女性の発言中の直視量、⑧女性の聴取中の直視量については次のように算出する。すなわち、①と②より 2 人の相互視量を、①と③より⑤を、②と④より⑦を、①と④より⑥を、②と③より⑧を、それぞれプリントアウトされたチャートから算出した。具体的には、例えば、①と②より相互視量を求めるには、チャートで 2 人の直視が重なった部分を物差しで計り、その長さを時間に換算することで相互視量（時間）を算出した。

No.	OCH	1CH	2CH	3CH
31	0:02:40 3.05	0:02:44 1.54	0:02:09 1.64	0:02:24 0.64
32	0:02:44 2.39	0:02:50 2.70	0:02:12 0.22	0:02:25 0.70
33	0:02:57 3.88	0:02:58 0.96	0:02:12 1.26	0:02:28 0.55
34	0:03:01 1.24	0:03:00 1.07	0:02:17 0.26	0:02:30 0.40
35	0:03:07 0.76	0:03:12 3.58	0:02:18 0.55	0:02:30 2.20
36	0:03:13 0.60	0:03:17 1.11	0:02:19 0.37	0:02:36 0.75
37	0:03:13 0.71	0:03:47 0.43	0:02:20 0.56	0:02:37 1.74
38	0:03:18 ⋮		0:02:23 ⋮	0:02:40 ⋮
51			0:03:18 0.53	
52			0:03:36 0.30	
N	40	37	52	47
MIN	0.33	0.22	0.15	0.17
MAX	15.90	5.20	2.02	5.76
TOTAL	99.97	66.38	38.39	51.69
MEAN	2.49	1.79	0.73	1.09
S.D.	2.92	1.43	0.50	1.01

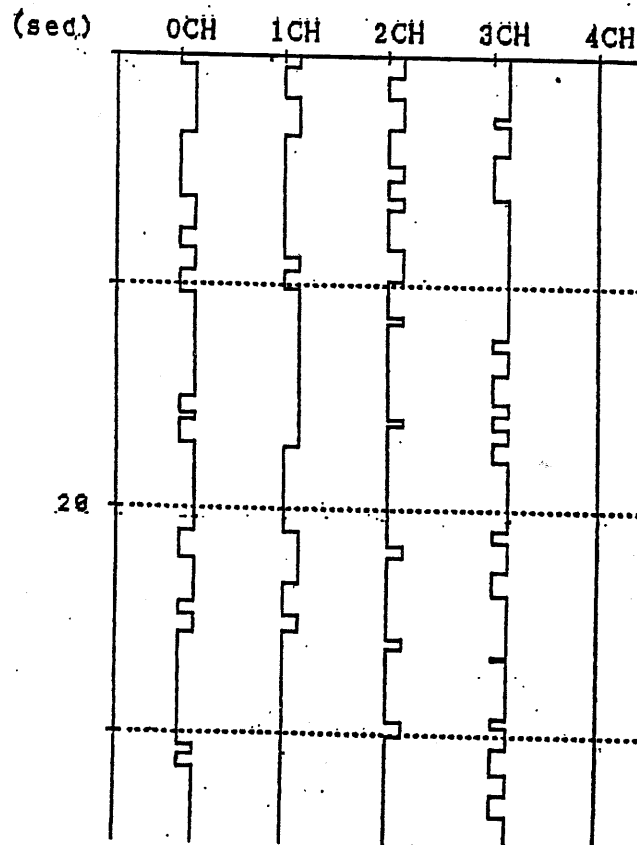


図 2-2 行動分析器による視線量と発言量の出力例

結 果

(1) 測定信頼性

測定信頼性は、観察者間一致率によって検討した。すなわち、VTRに収録された男女の対面場面の中からランダムに4組を選んで、複数の観察者が同一被験者の直視を測定し、その一致度をみるというやり方である。その結果、観察者間一致率は、男性の女性に対する直視総量で96%、女性の男性に対する直視総量で97%、男性の発言中の直視量で89%、男性の聴取中の直視量で87%、女性の発言中の直視量で94%、女性の聴取中の直視量で85%となった。

(2) 実験後質問紙

DC群にRubin(1970)の恋愛感情尺度を実施した結果、男性の平均得点は90.00($SD = 18.01$)、女性は85.67($SD = 14.08$)となった。得点間の有意差はない。これらの得点は、中点(65)よりも愛情高の極の側に寄っており、DC群の男女相互に恋愛感情をもっていることが確認された。またUP群について相手と対面している時の感情を「快(7)－不快(1)」尺度(7段階)で評定させた。その結果、男性の平均値は4.85($SD = 0.99$)、女性は4.85($SD = 0.81$)となり両者共同様にほぼ中性的な感情をもっていることも確認された。実験後質問紙について、関係性(交際中、初対面)と性を要因とする 2×2 の分散分析を行った。この結果、話の内容の恥ずかしさ、一般的か個人的か、について主効果、交互作用ともに有意ではなかった。話の内容の難易度について関係性の要因の主効果が有意となった($F(1, 72) = 5.84, p < .01$)。つまり、DC群の方がUP群より話の内容が難しいと回答していた。“相手の目を見て話せたか”という質問については、関係性の要因の主効果が有意となった($F(1, 72) = 6.36, p < .01$)。つまり、交際中の男女が初対面の男女より目をよく見て話せたと答えていた。

(3) 仮説の検討

待ち時間中および会話中の相互視の平均値と標準偏差を表 2-1 及び表 2-2 に示した。会話中の相互視量は、会話開始後 2 分目から 2 分間について測定したものを分析した。また総量 (%) は角変換したものについて統計処理を行った。

待ち時間中における相互視量では、回数 (1 分当り) については有意差は認められなかった ($t(36) = 1.47, p < .14$)。総量については、DC 群が UP 群よりも多かった ($t(36) = 3.77, p < .0006$)。また平均時間についても DC 群が UP 群よりも長かった ($t(21.9) = 3.85, p < .0009$)。

次に会話中 (2 分間) における相互視量では、回数 (1 分当り) については DC 群が UP 群よりも多かった ($t(36) = 1.88, p < .06$)。総量についても、DC 群が UP 群よりも多かった ($t(24.5) = 3.00, p < .006$)。さらに平均時間についても DC 群が UP 群よりも長かった ($t(24.2) = 2.98, p < .006$)。このように、会話中における相互視の 3 つの測度すべてについて仮説 1 が支持されていた。全会話時間 5 分間についての直視量の平均値と標準偏差を表 2-3 に示した。仮説 2 と 3 を検討するため、初対面及び交際中のそれぞれの男性、女性群の直視量の 3 つの測度について検討を行なった。なお総量 (%) は角変換値になおして処理した。この角変換値について、分散分析を行なった。3 つの視線測度それぞれについて、関係と性を要因とする 2×2 の分散分析を施した。さて仮説 2 は、初対面の男女間に比較して交際中の男女間の直視量が多いということであった。直視総量 (図 2-3 参照) と平均時間において関係の主効果が有意となった (総量: $F(1, 76) = 12.42, p < .001$; 平均時間: $F(1, 76) = 9.94, p < .002$)。直視回数については関係の主効果に有意な傾向があった ($F(1, 76) = 2.91, p < .09$)。すなわち、初対面より交際中の男女の直視量 (総量、平均時間) が多いことが判明し仮説 2 が支持された。しかし性の主効果及び関係と性の交互作用は 3 つの視線測度それぞれについて有意ではなかった。つまり、女性の直視量と男性の直視量の間には有意差は見いだされず、女性の方が男性に視線を向ける量が多いという仮

表2-1 相互視量の平均と標準偏差（待ち時間中）

測 度	初対面男女 ($n=20$)		交際中男女 ($n=18$)	
	M	(SD)	M	(SD)
回数 (1分当り)	5.48	(4.15)	7.22	(3.00)
総量 (%)	11.30	(9.00)	29.10	(18.30)
平均時間	1.11	(0.49)	2.30	(1.22)

表2-2 相互視量の平均と標準偏差（2分間の会話中）

測 度	初対面男女 ($n=20$)		交際中男女 ($n=18$)	
	M	(SD)	M	(SD)
回数 (1分当り)	6.43	(3.16)	8.53	(3.72)
総量 (%)	13.80	(9.20)	31.80	(22.60)
平均時間	1.25	(0.50)	2.04	(1.02)

表2-3 初対面及び交際中男女による直視量と発話量の平均値と標準偏差（5分間の会話中）

視線測度	初対面		交際中	
	女性($n = 20$)	男性($n = 20$)	女性($n = 18$)	男性($n = 18$)
直視量 (%)	38.69 (14.99)	35.18 (18.61)	56.01 (22.26)	51.22 (23.87)
直視回数 (1分当り)	8.38 (2.83)	8.72 (2.23)	7.17 (2.89)	8.00 (1.69)
直視平均時間	2.85 (1.47)	2.52 (1.50)	5.63 (5.23)	4.08 (2.39)
発言中の直視量 (%)	16.19 (13.01)	24.06 (15.59)	24.34 (21.83)	46.06 (21.70)
発言中の直視回数 (1分当り)	14.00 (6.47)	15.83 (6.91)	12.43 (8.09)	17.62 (5.43)
発言中の直視平均時間	0.66 (0.36)	0.86 (0.28)	1.10 (0.46)	1.53 (0.55)
聴取中の直視量 (%)	39.61 (20.21)	28.23 (16.00)	47.99 (21.51)	23.53 (14.66)
聴取中の直視回数 (1分当り)	11.14 (4.41)	10.15 (3.84)	12.01 (4.05)	9.17 (4.55)
聴取中の直視平均時間	2.26 (1.73)	1.68 (1.03)	2.55 (1.38)	1.58 (0.93)
発言量 (%)	11.15 (7.98)*	14.24 (10.14)*	28.17 (6.41)	29.81 (13.51)

() 内は標準偏差を示す。 * $n = 18$

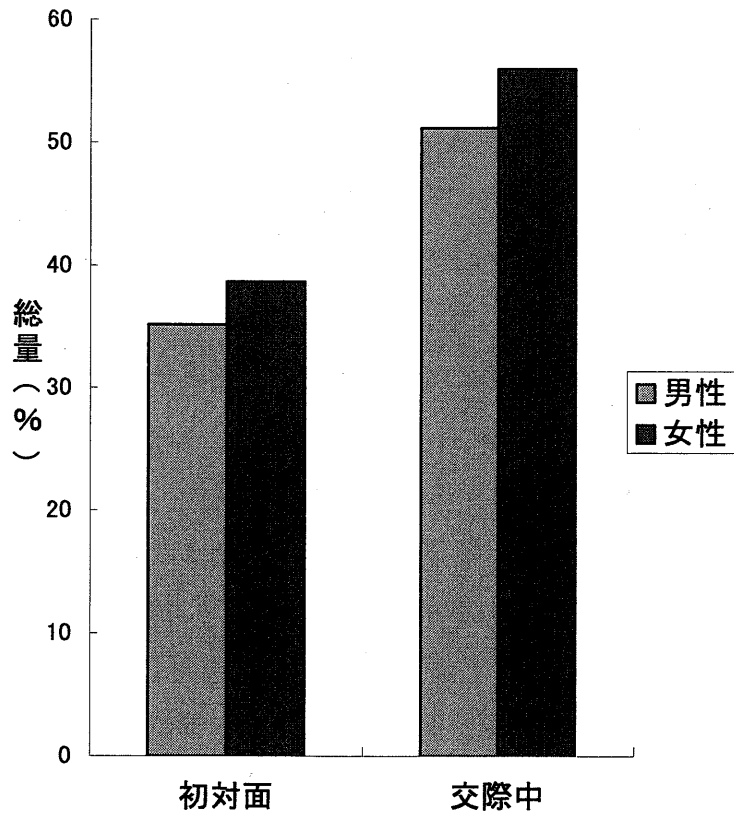


図2-3 直視総量の平均値 (実験2)

説 3 は支持されなかった。

(4) 発言中及び聴取中の直視量

1) 発言中の直視量

初対面及び交際中のそれぞれの男性群、女性群の発言中の直視量の総量、回数、平均時間の測度について検討を行った。なお、直視総量 (%) は角変換値になおして処理した。それぞれについて、関係と性を要因とする 2×2 の分散分析を施した。その結果、3つの測度において性の主効果が有意となった (総量: $F(1, 76) = 12.43, p < .001$; 回数: $F(1, 76) = 5.06, p < .028$; 平均時間: $F(1, 76) = 10.70, p < .002$)。つまり、男性の方が女性より発言中の直視量が多かった。また総量と平均時間において関係の主効果も有意となった (総量: $F(1, 76) = 12.32, p < .001$; 平均時間: $F(1, 76) = 33.20, p < .0001$)

2) 聴取中の直視

初対面及び交際中のそれぞれの男性群、女性群の聴取中の直視量の総量、回数、平均時間の測度について検討を行った。なお、直視総量 (%) は角変換値になおして処理した。それぞれについて、関係と性を要因とする 2×2 の分散分析を施した。その結果、3つの測度において性の主効果が有意となった (総量: $F(1, 76) = 15.66, p < .0001$; 回数: $F(1, 76) = 3.90, p < .028$; 平均時間: $F(1, 76) = 6.04, p < .016$)。つまり、女性の方が男性より聴取中の直視量が多かった。しかし、関係及び交互作用は3つの視線測度それぞれについて有意ではなかった。

3) 発言中の直視と聴取中の直視の関係

発言中の直視量および聴取中の直視量について、それぞれ3つの測度ごとに t 検定による比較を行った。まず、総量 (%) の角変換値については、聴取中の直視総量が発言中のそれより有意に多かった ($t(75) = 2.38, p < .02$)。次に平均時間についても、聴取中の直視平均時間が発言中のそれより有意に長かった ($t(75) = 5.83, p < .0001$)。また回数については、発言中の直視回数が聴取中のそれより有意に多かった ($t(75) = 5.70, p < .0001$)。

4) 発言量

初対面及び交際中のそれぞれの男性群、女性群の発言総量 (%) の角変換値について関係と性を要因とする 2×2 の分散分析を施した。その結果、関係の主効果が有意となり ($F(1, 68) = 56.77, p < .0001$)、DC 群が UP 群より発言量が多かった。性の主効果と交互作用は有意ではなかった。

考 察

Rubin(1970)の研究では強い恋愛感情のカップルが弱いカップルより相互視量が有意に多く、また直視量が多い傾向が確認されている。本研究でも相互視量については、仮説1の予測通り、待ち時間、会話中のいずれにおいても初対面より交際中の男女間の相互視量が有意に多かった。また、交際中の男女の方が初対面の男女より直視量が有意に多く、仮説2も支持された。これは、実験後質問紙で交際中の男女が初対面の男女よりよく目を見て話せたという回答とも一致していた。視線の対人感情包括的「接近一回避モデル」が示すように、好意感情(親和欲求)から生じる強い接近力、弱い回避力によって、恋人同士が未知の男女間より直視量、相互視量が多くなったと解釈される。実際、VTRに収録された交際中の男女を観察してみると、男女間に親しさ、遠慮のない馴れ馴れしさ、開放性、気楽さなどが感じ取られた。そして、相互視には微笑が伴っていることが多かった。相互視は、親密な感情を直接表現するチャンネルの1つと考えられる。したがって、男女が親密感を共有しない時に、相互視を維持することは極めて困難であろう。次に、未知の男女同士では、お互いが遠慮がちで、初対面の相手と視線を合わせるのはいかにも照れくさいという感じがみられた。しかし、照れ微笑は多くみられた。未知の男女間では、相互視を長く持続するほどの親しさはないのであろう。さらにVTRの観察によれば、好意感情や恋愛感情を抱いている相手に対しては接近し、頻りに働きかけようとし、視線を多く向け、話しかけ、身体を相手の方へ向け、そして相手に多く接触しようとする行動が多く見られた。Rubin(1970)の研究では強度の恋人同士の相互視量は約31%で、本研究とほぼ同量である。また、

未知の男女の相互視量は約 22 %で、本研究の未知の男女間の 15 %より多い。恋人同士の相互視量に関しては日米の差はないようだが、未知の男女間の相互視量については、米国の被験者の方が幾分多いようである。これは、初対面同士ではあまり多く視線を向け合わないという日本人の視線傾向が反映しているのかもしれない。

次に、男女によって直視量は違いがあるということは確認できず、仮説 3 は支持されなかった。一般に、男性より女性の方が相手によく視線を向けることが繰り返し指摘されている (Exline, 1963; Mulac, Studley, Wiemann, & Bradac, 1987; Rubin, 1970)。しかし本研究では、初対面および交際中の各条件における男女間に、直視量 (回数、平均時間) の有意差は見いだせなかった。さて、対面相手が同性か異性か (性の組合せ) も視線行動に影響を及ぼすことが知られている (Hall, 1984)。本研究 (実験 2) は対面相手が異性であり (図 2-3, p. 58)、前の実験 1 は同性 (女性) 同士であった (図 1-3, p. 40)。図 2-3 と図 1-3 を比べるとわかるが、対面相手が異性の場合には、同性同士と比べると直視量が全体的に多めになっている。つまり、女性と男性のペアが女性同士のペアより視線活動性 (直視量の多少) がより活発になっている (視線活動性が高まっている) ことがうかがえる。

なお男女によって直視量に違いは見いだされなかったが、視線量を発言中と聴取中に分けて検討すると性差があった。つまり、聴取中の直視量は男性より女性が多く、発言中の直視量は女性より男性が多かった。Hall (1984) は、15 の研究のうち 9 つ (60%) において、女性が聴取中に多く相手に視線を向け、男性は発言中に相手に多く視線を向けるという結果が示されていることを報告している。本研究の結果もこれに一致している。聴取中に女性の直視量が男性より多いのは、親和的で、熱心に男性の話を聞くという女性の性役割行動としても説明できるかもしれない (Hall, 1984; Kleinke, 1986)。また、聴取中の直視は情報収集機能を示しているのかもしれない (市河他, 1989)。次に Exline & Winters (1965) は、次のような事例で発言中の視線の機能を示唆している。「パーティなど多くの人がある所で、あなたに話しかけながらあなたにだけ視線を向け

ている人物 A とあなたに話しかけながらも他の人々に視線をキョロキョロと向けている人物 B を比べると、どちらの人物があなたに真の好意、関心を抱いているのか (p. 349)」。人物 A が B よりあなたに好意をもっていることから推察できるように、発言中の視線は他者に対する好意感情を正確に示す指標ではないかと示唆している。また Exline et al. (1975) は、実際の直視量の多少とは別に、聴取中より発言中に相手に多く視線を向ける者は、相手を支配、統制しようとする欲求が強いと示唆している。Noller (1984) は、適応度の低い夫婦ほど、発言中に相手（配偶者）に向ける視線量が多いことを報告している。うまくいっていない夫婦はお互いに話を聞いて理解し合うというよりも、自分の発言が相手にどのような効果をもたらしているかを、話しながら相手を見て、常に監視 (monitor) し支配しようとする動機の表れであると解釈している。特に、否定的なメッセージの場合に発言中の直視量が多くなったという。これは、視線に敵対的な意味がこめられ、否定的なメッセージに対する相手の反応を監視する傾向ではないかと示唆している。しかし適応度の高い夫婦間では、夫は発言中より聴取中に妻の方に多く視線を向けているという。つまりこれは相手と競争したり、相手を支配しようとする傾向がないことを示していると述べている。このように、発言中の視線は、態度の表出や会話の調節機能を果たしているのかもしれない (市河他, 1989)。

視線の量的研究当初から、発言中と聴取中の直視量に違いがあることが知られている (Nielsen, 1962)。まず、聴取中の直視量が発言中の直視量より多いことが見いだされている (Exline, 1963; Exline et al., 1965; Kendon, 1967; Nielsen, 1962; 吉田・飯田, 1981)。本研究でも同様に、聴取中の直視量（総量、平均時間）が発言中の直視量より多いことが確認された。聴取中の直視量が発言中の直視量より多いという理由はいくつかあげられている。まず、人は発言時には聴取時以上の注意集中を必要とするので注意が散漫になるのを防ぐため、視線を相手から外して考えるために、そのような認知努力の違いが視線量の差になると考えられる（注意散漫仮説）。2つ目の理由として、Exline et al. (1965) は、会話内容が個人的で恥ずかしい内容である場合、相手からできるだけ自分の感情を隠そう

とする動機が働き、発言中の視線量が減少するとも考えられている（隠蔽仮説）。しかし他方、発言中の直視量が聴取中の直視量より多いという結果もある（Noller, 1984）。一般的に人は発言中より聴取中に多く相手に視線を向けるという説が、アフリカ系米国人を被験者とした研究（LaFrance & Mayo, 1976）や地位要因を考慮した研究（Ellyson, Dovidio, & Corson, 1981; Ellyson, Dovidio, Corson, & Vinicur, 1980）では必ずしも妥当しないことが報告されている。Mulac et al. (1987) は、発言中の直視と聴取中の直視についてのデータはまだ十分に収集されているとはいえないので、2つの測度がどのような機能を持っているのかを決めるのは現段階では時期尚早であろうと述べている。今後更にこの2つの視線測度を検討する必要がある。

最後に、発言量を検討した結果、交際中群が初対面群より発言総量が多かった。これは、発言量は好意感情の指標と考えられる（ボンド・白石, 1973）ので、好意感情のより強い交際中群の発言量が多くなったと考えられる。

さて、本論文の枠組みに沿って実験2を要約すると、次のようになる。

要 約

実験2では、実際の生活場面で相互に恋愛的好意感情をもっている者同士と未知の者同士の自然な会話場面（約5分間）における視線行動をVTRに収録し、観察者が行動分析器により直視量を測定し、検討した。モデルから、交際中の男女の直視量が初対面の男女の直視量より多いと予測された。実験計画は二者関係（交際中、初対面）と性を独立変数とする2要因の被験者間計画であった。被験者は、交際中の男女学生（Dating Couples: 以下 DC と略記）18組と初対面の男女学生（Unacquainted Pair: 以下 UP と略記）20組、計76名であった。実験終了後、DC群にRubin (1970)の恋愛感情尺度を実施した。その結果、DC群の男女は相互に恋愛的好意感情をもっていることが確認された。またUP群についても、両者共、同様にほぼ中立的な感情をもっていることが確認された。使用した測度は、実

験 1 と同様である。分散分析の結果、UP 群よりも DC 群の男女の直視量（総量、平均時間）が多いことが判明した。モデルが示すように、恋愛的好意感情をもっている男女間では接近力が回避力より強いと考えられるので、未知の男女よりも直視量が多くなったと解釈された。

第 2 節 回避機能をもつ否定的対人感情が視線行動に及ぼす影響

先の第 1 節では、接近力が強くなる事態を検討したが、モデルの予測通り、好意感情によって視線行動が増加することが明らかとなった。第 2 節では、回避力が強くなる事態を取り上げて、モデルの予測が妥当であるかどうか調べる。

1 当惑感情が視線行動に及ぼす影響（実験 3）

問 題

当惑感情 (embarrassment) や恥 (shame) に関しては主に、「無意図的な、あるいは自らの望まない苦境や逸脱を意識した際の反応」(Edelmann, 1987; Goffman, 1967) と定義されている。恥、羞恥、対人不安、はずかしさ等、様々な用語が恥を示すのに使用され、内容に多少差異はあるものの、大まかには同じものを対象にしている (樋口, 2000)。当惑感情は Exline et al. (1965) によって最初に視線行動との関連で取り上げられ、また包括的な概念であると考えられる (樋口, 2000) ので、本研究では当惑感情という語を使用する。当惑感情は対人方向性が明確な好意や怒りとは異なり、自分の感情の発露に焦点があり対人方向性は明確でないが対人場面において感じられるので、本研究では対人感情の一つとして位置づけている。当惑したり恥ずかしがっている人の視線については

Darwin(1873)が初めて次のように言及した。「鋭い恥の感を有する場合にはこれを隠蔽しようとする強い欲求がある。我々は全身を特に顔面をそむけ、これをどうにかして隠そうと努める。恥じ入った人は、同席者の凝視に耐えがたいため、ほとんど必ずその目をふせるか又は側をむく」(p. 371)。そして、赤面したり、おどおどしたり、目や顔を伏せるなどの兆候で情緒が乱れ、混乱している様子は否定的特徴の表れとみなされている(Goffman, 1967)。

実験的に当惑感情を喚起して視線量の変化を調べた研究がある。Modigliani(1971)は当惑によって相互視量が減少することを示した。彼は、当惑感情が他者の存在場面で生ずるという立場から、男性被験者が、他者の見ている前(公的)または一人の時(私的)に課題で成功させたり、失敗させたりした。公的場面での失敗によって、被験者は男性の実験協力者との相互視量を減少させた。また公的場面での成功は実験協力者との相互視量を増加させた。Edelmann & Hampson(1979)は、次のようなユニークな方法で被験者を当惑させて相互視量を測定した。まず被験者にいろいろな絵を見せて、その中で自分の最も嫌いな絵を選ばせる。次に被験者は自分の選んだ絵や芸術一般について質問を受ける。それらの質問の中に当惑を喚起する質問が含まれている。すなわち、「あなたが選んだ絵は、実は私が描いたものですが、どう思われますか」という質問によって被験者が当惑するよう仕組まれている。この質問中に当惑を感じた被験者の相互視量が減少したという。両実験とも当惑感情によって相互視量が減少することを見いだしている。

次に、話題が喚起する当惑感情が視線行動に及ぼす影響に関する一連の実験的研究がある。まず Exline et al. (1965) は、個人的な質問(当惑した私的な過去経験)と一般的な質問(好きな映画、スポーツ、本など)の2条件で相互視量を測定した。その結果によると、話題内容の主効果が相互視総量で有意となった(一般話題:49.8%; 当惑話題:39.3%)。また話題内容の主効果は、聴取中と沈黙中の相互視量では有意でなかったが、発言中の相互視量で有意となり、一般話題(総量:49.8%)より当惑話題(総量:39.3%)の時に発言中の相互視量が少ない($p < .05$) ことが見いださ

れた。次に Schulze & Barefoot(1974)は、男性被験者が男性面接者に面接される状況で、親密な質問（「あなたが恋した相手はどんな人ですか」など）の時に発言中の相互視量は減少するが、聴取中の相互視量には影響がないことを見いだした。この結果は Exline et al. (1965) と一致している。Carr & Dabbs (1974) の研究では、親密な質問（自分の性行動について）時に、相互視回数は有意に減少したが、総量と平均時間は減少傾向だが有意には至らなかった。Goldberg & Wellens (1979) は、対面とビデオによる面接状況で、親密な質問で発言中の相互視量が減少するが、聴取中の相互視量には影響がないことを見いだした。以上の研究は、当惑感情によって視線量が減少することを示した研究である。一方 Rohner & Aiello(1975)は、女性被験者に女性の実験協力者と親密な話題（立ち入った話題）または、中性的な話題で討論させて、視線量や対人距離を測定した。その結果、親密な話題で視線量の減少や対人距離の増大はみられなかったという。また Anderson(1976)は、同性のペアに2分間ずつ高、中、低の親密度の話題で会話をさせたが話題の相互視量への影響は見いだしていない。Abele(1986)も高（恋愛）、中（共通の関心）、低（リクレーション）の親密度の話題で面接したが、話題の直視量への影響はなかった。以上のように、話題が喚起する当惑感情が視線行動に及ぼす影響についての研究結果は必ずしも一致していない。

かつて Benedict(1946)は、恥は日本人の生活において最高の位置を占めているので、各人は自分の行動に対する他者の評価をいつも気にしていると述べた。そして対人関係においても、当惑して面目を失うこと（loss of face）は非常な混乱を招くことが指摘されている（Argyle, 1969）。また視線恐怖は「恥の文化」をもつ日本に特有の神経症である（内沼, 1983）と言われるように羞恥（当惑感情を含めて）と視線の関連性は日本における古くて新しい心理学的課題といえよう。Edelmann & Iwawaki (1987)は、日本と英国の大学生に当惑した時の生理的、言語的、非言語的反応を想起させて自己報告による調査を行った。その結果、当惑した時に、英国の学生の49%、日本の学生の13%が視線回避をすると回答し、英国人の視線回避の方が多かった（ $p < .05$ ）という。しかし、この結果は質問紙に

基づいたもので、実際の場面で日本人の被験者が、当惑感情に対してどう
いう視線行動をとるかは不明である。吉田・堀（1988）は、女子学生に男
性面接者と当惑話題（性の問題）または一般話題（ファッション）で面接
させて、直視量などを測定した。その結果、一般話題に比較して当惑話題
で直視回数は有意に減少したが、総量と平均時間に有意な減少はみられな
かった。先の Carr & Dabbs（1974）や吉田・堀（1988）では、直視回数
のみに有意差があり、面接時間全体の測定から導かれた総量と平均時間
に関しては有意な差が示されていない。モデル検討の立場からすると、直視
総量のような面接時間（対面時間）全体で平均化された視線測度に対人感
情（当惑感情）の違いによる影響が反映することが期待される。

そこで本研究では、Exline et al. (1965)の実験の一部を踏襲して、日
本における面接場面で喚起された当惑感情と視線行動の関係について次
のようなモデルからの予測が妥当するかどうかを調べる。面接場面で、当
惑感情が誘発される状況は回避力が強くなる事態であり、モデルから視線
量の減少が予測される。したがって、当惑質問を受ける被面接者は非当惑
質問を受ける被面接者に比べて面接者との直視量が少ないであろう。

方 法

(1) 被験者と面接者

被験者は女子短大生 80 名である。平均年齢は 20 歳である。面接者は
男子大学生 1 名(20 歳)と女子短大生 1 名(20 歳)である。なお、面接者と被
験者とは以前からの面識は全くない。なお、2 名の面接者には仮説を知ら
せていない。

(2) 実験計画

面接内容（非当惑質問、当惑質問）、面接者の性（男性、女性）を独立
変数とする 2 要因の被験者間計画である。80 名を無作為に 4 分しそれぞ
れ 20 名で構成される実験群毎に、「非当惑質問・男性面接者」、「非当惑質
問・女性面接者」、「当惑質問・男性面接者」、「当惑質問・女性面接者」の

4条件に割り当てた。

(3) 実験状況

面接場所は教室の一隅に2枚のパネルで仕切られた3×3mの空間である。面接者と被験者は対面して、間の机を隔てて、約1mの距離で座った。

(4) 面接の質問項目

本研究では、当惑感情を喚起する話題として、異性との交際などに関する話題を選んだ。これは、公的場面や初対面で未知同士での話題としては、ぶしつけなもので、その場に居合わせる者に、羞恥心、気まずさ、当惑感情を喚起させるものである。これに対し、一般的な話題として選んだ、学生生活のような話題は、性別、年齢等によっても異なるが、基本的には無難なトピックであり、対話者のプライバシーに対して非脅威的であり、視線交錯に対しても非抑制的なものである(吉田・堀, 1988)。各質問はそれぞれ2-4項目から成る。一般的質問は次のような質問から成る。「あなたはどんなスポーツが好きですか」、「あなたはどんな本を読むのが好きですか」、「あなたの好きな学科は何ですか」、「あなたはこの学校で何かクラブ活動をしていますか」、「あなたは休日はどうのように過ごしておられますか」、「あなたはどんな映画を見るのが好きですか」などである。また、当惑的質問は次のような質問から成る。「あなたの初恋はいつでしたか」、「あなたはいままでに失恋したことがありますか」、「あなたはいままでにラブレターを書いたことがありますか」、「あなたの理想の男性はどんな人ですか」などである。

(5) 手続き

面接開始前に、実験者は次のような教示を与えた。「人から情報を得る手段としては、アンケートや面接などがあります。ここではその中の面接を取り上げて、これが情報を得る上でどのくらい有効であるかを知る手掛かりにしたいと思います。」面接者は予め暗記しておいた質問を

一定の順序に従って繰り返す。面接者は普通（中性的）の表情で、前傾でも後傾でもない普通の姿勢で質問を行った。質問は1項目ずつゆっくり、はっきりと言う。被験者の回答がない場合は、4～5秒待って次の項目を質問する。また、各面接者はすべての被験者に対し同様な服装で対応した。面接は3分間行われた。実験者は、3分間たったらドアをノックして合図するのでそれまで面接を続けるように言って、隣室へ退出する。3分経過後、実験者は、面接者の後方のドアをノックして面接を終了させた。面接終了後、被験者は別室で実験後質問紙に記入して実験は終了した。

(6) 面接後質問紙

1) 面接者に対する好意度

Byrne(1961)の対人魅力尺度 (Interpersonal Attraction Scale)を使用した。この尺度は、① 知能、② 道徳性、③ 好意度、④ 適応性、⑤ 知識、⑥ パートナーとしての適否の6項目からなり、「非常にそう思う(7)―全くそう思わない(1)」で回答する7点尺度である。このうちの③(相手に好意を感じますか)と⑥(相手と一緒に働くのは楽しいと思いますか)で好意度を測定した。 α 係数が.90と満足のいく値なので、2項目の合計値をもって好意度値とした。なお、好意度については、値が大きいほど好意度が高くなるように得点化した。

2) 面接者に対する印象

評定項目はOsgood, Suci, & Tannenbaum (1957)のSD尺度の評価性 (Evaluation)、力量性 (Potency)、活動性 (Activity)の3次元を代表する4項目ずつから成る。つまり、「つめたい―あたたかい」、「愉快的―不愉快的」、「悪い―良い」、「好きな―嫌いな」、「勇敢な―臆病な」、「強気な―弱気な」、「服従的―支配的」、「かたい―やわらかい」、「やさしい―こわい」、「激しい―穏やかな」、「不活発な―活発な」、「丸い―角のある」の12項目で、7点尺度である。各次元の4項目についてクロンバックの α 係数を算出した結果、評価性は.90、力量性は.66、となり、おおむね満足のいく値であった。しかし、活動性は.24とい

う低い値を示していた。面接者の印象はあくまでも補足的なものであることを考慮し、最終的には、すべての項目を採用した。評価性、力量性、活動性の高い極に7点、低い極に1点を与え、各次元の得点は4項目の合計得点とした。

3) 面接に対する感じ

「質問に答えるのに恥ずかしいと思いますか」、「質問に答え易かったと思いますか」、「面接中の雰囲気は良いと思いますか」の3項目に「非常にそう思う(7)―全くそう思わない(1)」で回答する7点尺度である。これらは項目別に分析した。

(7) 従属変数の測定

従属変数としての直視量は次のようにして測定した。面接者は面接の間中、常時、被験者の目に視線を向けているようにした。したがって、本研究の場合は、被験者が面接者へ視線を向ける直視が同時に相互視ともなっている。面接者は被験者が自分(面接者)を見る度に、手に隠し持ったスイッチを押す。このスイッチはコードで隣室にあるブザーに接続されており、押している間“ビー”という信号音が鳴る。この音はブザーの横に置かれたテープレコーダーに録音された。なおブザーの音は、面接中の被験者には聞こえないように防音してある。これによって、直視(相互視)の回数と持続時間とが記録された。2名の面接者は実際の面接を行う前に、被験者が自分に視線を向ける時には、被験者に気づかれないようにスイッチが押せるような訓練を十分に行った。予備テストによると、面接者は相手の視線の動きを追跡しスイッチを押すのに困難さを感じていなかった。実際、面接者の背後で、少し高い位置から観察する観察者の直視総量測定的一致率は平均90%と高かった。直視量はかなりの高い信頼性で測定が可能であるという指摘(Argyle & Dean, 1965; Exline et al., 1965)と一致している。テープレコーダーに収録されたブザーの音をストップウォッチで測定者が測定した。測定した変数は、3分間の直視回数、3分間の直視総量(秒)、さらに3分間の直視総量/3分間の直視回数から直視の平均時間を算出した。

結 果

(1) 被面接者の発話時間

非当惑的質問を受けた被面接者の平均発話時間は 72.98 秒 ($SD = 14.17$) で、当惑的質問を受けた被面接者の平均発話時間は 66.97 秒 ($SD = 14.20$) であった。この 2 群の発話時間の中に有意差はなかった ($t(36) = 1.30, ns$)。

(2) 実験操作の有効性

実験の操作チェックのために実施した面接後質問紙に対する回答結果を分析した (表 3-1)。

1) 面接者に対する好意度

好意度得点に 2×2 の分散分析を施した。その結果、面接者の主効果が有意となった ($F(1, 76) = 35.95, p < .0001$)。つまり、男性面接者より女性面接者に対して好意度が高かった。また、面接内容の主効果が有意となった ($F(1, 76) = 6.87, p < .01$)。つまり、当惑面接をする面接者より非当惑面接をする面接者に対して好意度が高かった。

2) 面接者の印象

2 名の面接者に対する印象を、評価性、力量性、活動性の 3 つの次元から検討した。この 3 次元を代表する各 4 項目の合計得点に、それぞれ 2×2 の分散分析を施した。その結果、まず評価性については、面接者の主効果が有意となった ($F(1, 76) = 9.98, p < .01$)。つまり、女性面接者が男性面接者より評価性が高かった。また、力量性についても面接者の主効果が有意となった ($F(1, 76) = 13.86, p < .001$)。つまり、男性面接者が女性面接者より力量性が高いと感じていた。次に、活動性では面接内容の主効果が有意となった ($F(1, 76) = 7.54, p < .008$)。つまり、非当惑話題を質問した面接者が当惑話題を質問した面接者より活動性が高いと感じられていた。

3) 面接に対する感じ

当惑質問を受けた被面接者群 ($M = 4.07, SD = 1.91$) が非当惑質問を

表3-1 面接後質問紙に関する平均値と標準偏差

面接者	面接内容	面接者に対する	面接に対する感じ			面接者に対する印象		
		好意度	恥ずかしさ	答易さ	雰囲気	評価性	力量性	活動性
男 性	非当惑話題	6.65 (2.98)	3.15 (2.08)	4.95 (1.91)	3.50 (1.79)	16.70 (2.43)	16.70 (2.30)	16.45 (2.01)
	当惑話題	4.40 (2.46)	4.50 (2.09)	2.75 (1.55)	2.80 (1.77)	15.47 (2.32)	16.63 (2.77)	14.89 (2.75)
女 性	非当惑話題	9.25 (2.61)	2.75 (1.80)	4.90 (1.55)	4.45 (1.57)	17.50 (2.46)	14.70 (2.18)	16.95 (1.96)
	当惑話題	8.70 (2.18)	3.65 (1.66)	3.65 (1.60)	3.80 (1.15)	17.10 (2.38)	14.75 (2.12)	15.80 (2.24)

受けた面接者群 ($M = 2.95$, $SD = 1.93$) より質問に答えるのは恥ずかしい (当惑する) と感じていた ($F(1, 76) = 6.87$, $p < .01$)。したがって、当惑感情の操作の有効性が確認された。また、当惑質問が非当惑質問より答にくいと感じていた ($F(1, 76) = 21.64$, $p < .001$)。そして、面接中の雰囲気は男性面接者より女性面接者の場合がよく感じ ($F(1, 76) = 7.51$, $p < .008$)、当惑質問は非当惑質問の場合に比べよくないと感じる傾向があった ($F(1, 76) = 3.60$, $p < .06$)。

(3) 仮説の検討

3つの視線測度について各条件毎に平均値と標準偏差を示したのが表3-2である。3つの視線測度それぞれについて、面接内容と面接者の性を要因とする 2×2 の分散分析を施した。直視総量(%)は角変換を行った。さて仮説は、当惑質問を受ける被面接者が非当惑質問を受ける被面接者より直視量が少ないことであった。直視総量(図3-1)と平均時間において質問内容の主効果が有意となった(総量: $F(1, 76) = 11.10$, $p < .001$; 平均時間: $F(1, 76) = 8.72$, $p < .004$)。しかし、直視回数については質問内容の主効果は有意ではなかった。つまり当惑質問を受ける被面接者は非当惑質問を受ける被面接者より直視総量と平均時間が少なかった。したがって、直視総量と平均時間について仮説が支持された。次に、直視回数、総量、平均時間すべてにおいて面接者の性の主効果が有意となった(回数: $F(1, 76) = 49.02$, $p < .0001$; 総量: $F(1, 76) = 64.51$, $p < .0001$; 平均時間: $F(1, 76) = 13.07$, $p < .001$)。つまり、同性の面接者より異性の面接者の場合に直視量が少なくなっていた。さて、質問内容と面接者の交互作用が直視回数において有意であった ($F(1, 76) = 19.60$, $p < .0001$)。しかし直視総量と平均時間について交互作用は有意ではなかった。直視回数についての下位検定によると、非当惑質問における面接者の性の要因の単純効果に有意な傾向が見られた ($F(1, 76) = 3.31$, $p < .10$)。すなわち、非当惑質問を受けている時には、同性の面接者より異性の面接者の場合に回数が少ない傾向があった。また当惑質問における面接者の性要因の単純効果が有意であった ($F(1, 76) = 65.29$, $p < .001$)。つまり

表3-2 面接者と面接内容による直視量の平均値と標準偏差(3分間の面接中)

面接者	面接内容	総量 (%)		回数		平均時間	
		<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
男性	非当惑話題	41.71	21.62	20.95	5.40	3.44	2.21
	当惑話題	22.86	23.15	13.75	9.50	2.51	1.57
女性	非当惑話題	67.49	12.52	24.60	4.16	5.34	2.62
	当惑話題	60.78	8.76	29.95	4.18	3.73	0.77

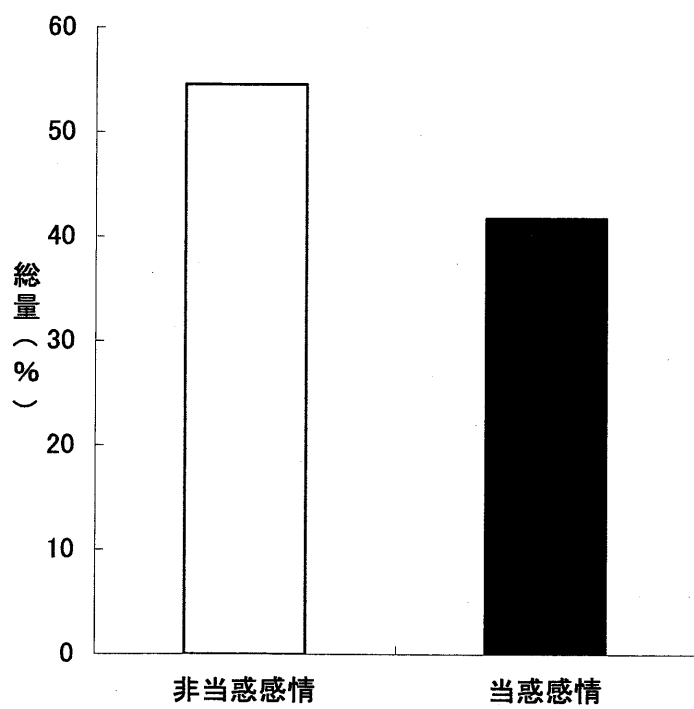


図 3-1 直視総量の平均値 (実験 3)

当惑質問を同性の面接者より異性の面接者から受ける場合に、回数が少なくなっていた。また女性面接者における質問内容の単純効果が有意であった ($F(1, 76) = 7.12, p < .01$)。すなわち、女性面接者の場合、非当惑質問より当惑質問の時に回数が多かった。また男性面接者における質問内容の単純効果も有意であった ($F(1, 76) = 12.89, p < .001$)。すなわち、男性面接者の場合は女性面接者とは逆に、当惑質問より非当惑質問の時に回数が多かった。

最後に、4つの条件別に、直視量の3つの測度間相互の相関係数（ピアソンの r ）を算出した（表3-3）。これによると、まず、4つの条件すべての場合に、直視総量と平均時間の間に正の相関が認められた。また、女性面接者の条件では回数と総量及び平均時間の間には負の相関が認められた。

考 察

モデルの予測通り、当惑質問を受ける被面接者は非当惑質問を受ける被面接者に比べて面接者との直視量は少なかった。実験後質問紙では、当惑質問を受ける被面接者は当惑し、答えにくく、雰囲気がよくなく、相手にあまり好意を感じていなかった。つまり、否定的な感情を抱いていたことが推測される。従って、このような当惑感情によって回避力が相対的に強まり、面接者に視線を向ける量が少なくなったと解釈された。面接者自身の観察によると、当惑質問の場合は、被験者は自分の膝の上とか目の前にある机の上のような一定の場所に視線を低く落としていることが多く、面接者の顔に視線を向けることが少なかった。Exline et al. (1965)も、当惑感情を喚起するような話題の場合に直視量の減少を報告している。これについて彼らは次のような解釈をしている。つまり、当惑した時に他者の視線を避けるのは、相手から自分の感情（この場合は当惑感情）を隠したいという欲求があるためであろう。また、人は相互作用によって平静状態が破られる時には、相手との相互作用を避けることによって心理的距離を調節して、平静状態を保とうとすると解釈している。これはまた、相手との関係から心理的に回避しようとする試みでもあるという。Edelmann (1987)も、恥ずかしくなると、穴があいたら入りたい気になるが、実際は出来ないの、その代り非言語行動（相互視を回避する、話をしない、など）によってこれが表わされると解釈している。さてExline et al. (1965)は、発言時の直視に話題の主効果があり、当惑話題より非当惑話題で発言中の視線量が多かったという。これから彼らは、当惑感情の影響は発言時の視線によく

表3-3 視線測度間の相関係数

		非当惑的話題		当惑的話題	
		1	2	1	2
1. 直視量					
男性面接者	2. 直視平均時間	.87**		.81**	
	3. 直視回数	.39	-.01	.84**	.45*
1. 直視量					
女性面接者	2. 直視平均時間	.78**		.72**	
	3. 直視回数	-.57**	-.88**	-.05	-.72*

表中の ** は $p < .01$, * は $p < .05$ を示す。

各条件の $n = 20$ 。

表れると示唆している。つまり我々は、相手の発言中の視線がどうであるかに注目すると、相手の当惑の程度を推測することができるかもしれない。実験 3 では、視線量の測定法や測定器具の限界があったために発言時の視線、聴取時の視線を分けて測定していないが、第 1 節 2 でも述べたように発言時の視線、聴取時の視線を分けて検討する必要があるだろう。

さて吉田・堀 (1988) の結果とは異なり、直視の総量と平均時間について仮説は支持されたが、直視回数については支持されなかった。したがって、回数についてはモデルが当てはまらなかった。特に女性面接者の場合にはモデルの予測とは逆で、非当惑質問より当惑質問の時に回数が多くなっていた。このことは、測度によって意味する機能も異なることが示唆されている。Argyle & Dean (1965) もモデルに当てはまる測度に関しては明記していない。市河他 (1989) は、直視回数はモデルへの当てはまりはよくないことを指摘している。Russo (1975) は、平均時間の方が好意感情などの表出のよい指標であると示唆している。視線の 3 測度の心理的な意味や性質については今後更に検討する必要がある。本研究では、3 つの測度の相互関係を調べてみた。4 つの条件別に、直視の 3 つの測度間相互の相関係数 (ピアソンの r) を算出した (表 3-3)。これによると、まず、4 つの条件すべての場合に、直視総量と平均時間の間に正の相関が認められる。つまり、総量が多くなれば平均時間も長くなる傾向がある。また、女性面接者の条件では回数と総量及び平均時間の間には負の相関が認められる。つまり、総量及び平均時間が多くなると回数は減少傾向にあるといえよう。

次に、面接者の主効果が有意となって、同性 (女性) の面接者より異性 (男性) の面接者の場合に直視量が少なかった。さて、異性同士よりも同性同士 (特に女性同士) で直視が多いことが知られている (Hall, 1984)。本研究では男性被験者は参加していないので性差の確認はできなかった。性は強力な変数であるので、男性を含めた検討が今後必要である。

面接後質問紙による面接者の印象の結果が示すように、男、女の面接者は異なるように認知されていた。他者を力量性が高いと認知するのは、他者が権威、支配力、統制力をもつとみることである。男性面接者と対面した被験者は、女性面接者と対面した被験者よりも相手をより力量性が高いと認知していた。視

線には支配性、統制 (control) を示す機能もある。男性面接者が常時、視線を向けていたことが、女性面接者が常時、視線を向けているよりも支配的な印象を与えたのかもしれない。次に評価性については、被験者は男性面接者よりも女性面接者の方により高い評価性を認知していた。評価性は肯定的な態度と関連があるので、女性面接者が常時、視線を向けていたことと関係があるかもしれない。次に活動性については、非当惑質問を受けた被験者の方が当惑質問を受けた被験者よりもより高い活動性を感じていた。つまり2種類の面接が異なる影響を与えていたことを示唆している。

さて、当惑質問を同性の面接者より異性の面接者から受ける場合に、回数が少なくなっていた。これは異性の面接者が当惑的な質問をしたために、当惑感情が増幅された結果、面接者に対する直視回数が最も少なくなったと考えられる。本研究では各性の面接者が1名なので、結果が面接者の性差を反映していると断定することはできない。しかし女性は、相手が同性より異性の場合に直視量が少ないという従来の研究結果と一致している。ところが、Exline et al. (1965)の研究では、面接者の性の効果は見いだされていない。これについて彼らは、女性は相手が同性でも異性でも相互視を持続させたいと思う傾向があるからだという。そしてこの傾向は、女性が情愛に満ちた関係を指向するという一般的な傾向を反映したものであると解釈している。しかし実験3の結果は、米国での結果と異なっていた。つまり男性面接者が当惑質問をすることによって女性被験者の当惑感情がさらに強まり、異性の面接者に対する直視量が、同性の面接者に対する直視量の約半分にまで減少していた。これは文化差の反映ではないかと考えられる。

さて、本論文の枠組みに沿って実験3を要約すると以下のようなになる。

要 約

実験3では、回避力が強い事態を取り上げ、女性被験者と初対面の面接者との対面状況において、当惑（立ち入った自己開示的）話題が喚起する当惑感情と視線行動の関連を次の仮説に基づき検討した。当惑質問（「異性交際」等）を受ける被験者は、非当惑質問（「趣味」等）を受ける被験者に比べて面接者への

直視量が少ないことが予測された。実験計画は、当惑感情喚起（非当惑感情、当惑感情）、面接者の性を独立変数とする2要因被験者間計画であった。被験者は女子学生80名であった。面接者は男女学生各1名であった。当惑感情喚起操作の有効性は、実験後質問紙によって確認された。面接者は面接の間中、常時、被験者の目に視線を向けながら3分間の質問を行った。面接者は被験者が視線を向ける度に、手に隠し持ったスイッチを押して直視量を測定した。使用した測度は、実験1と同様である。その結果、非当惑質問に比べ当惑質問を受けた被験者は、面接者への直視の総量と平均時間が少なくなり、仮説が支持された。

2 不安感情が視線行動に及ぼす影響（実験4）

問 題

先の実験3では、視線の対人感情包括的「接近—回避モデル」の予測通り、当惑感情を抱いた被験者は回避力が強くなると考えられるので視線量が減少することが見いだされた。実験4では、欺瞞場面で不安感情が誘発される状況における視線行動を検討する。欺瞞（又は嘘）とは、他者を意図的に欺こうとする行為をいう（DePaulo, Lindsay, Malone, Muhlenbruck, Charlton, & Cooper, 2003）。欺瞞の手がかりとなる行動についての諸研究のメタ分析から次のことを見いだされている。欺瞞者は会話中に身が入らず、詳しく話さず、間接的で、不快で、緊張し、愛想がよくなり、不安である（Mehrabian, 1971; DePaulo et al., 2003）。また、本当のことを言う時の行動と比較すると、罪悪感情や不安感情が喚起され、不愉快な神経質反応（どもる、そわそわするなど）、非親和反応（相互視の減少、長い沈黙、会話量の減少など）などの行動がみられる（Zuckerman, DePaulo, & Rosenthal, 1981）。そして欺瞞者の視線行動については、少ない（Knapp, Hart, & Dennis, 1974）、または逆に多い（Bond, Kahler, & Paolicelli, 1985）、有意差はない（大坊・瀧本, 1992; Zuckerman et al., 1981）とする諸研究がある。したがって、嘘つきは相手の目を見ることは少ないといったステレオタイプや俗信は、明確な支持を得ていないといえよう。これまで、欺瞞時

の非言語行動に関しては多数の研究がある (DePaulo et al., 2003)。

本研究の主な目的は、欺瞞によって喚起された不安感情が視線行動に及ぼす影響をモデルの立場から検討することにある。そして本論文の視線の対人感情包括的「接近—回避モデル」では、人は嘘をついて、罪悪感や不安を感じるときに視線を回避するよう動機づけられると予測している (Argyle & Cook, 1976)。Jurich & Jurich (1974) は、1名の男子大学生に40名の女子学生を“婚前性交渉”などについての話題で面接させた。その結果、話題によって喚起された不安感情と面接者との相互視量に有意な負の相関を見いだした。これは相関研究であるが、モデルの予測を支持する方向にある。Word, Zanna, & Cooper (1974) は、白人の面接者 (被験者) は、白人の被面接者 (実験協力者) に比べアフリカ系米国人の被面接者に対する直接性 (他者との密接性と非言語相互作用を高める程度) が低下することを見いだした。これは、言い間違い、どもり、無意味な音声などの増加に示される不安感情が高まったためと解釈している。しかし、直接性の一部である直視量などの減少はみられていない。また Hobson et al. (1973) は、男女大学生 (被験者) と実験協力者に2分間ずつ会話させた。会話の途中で、実験者が会話のまずさを指摘する群 (不安群) と会話のうまさをほめる群 (肯定群) の視線量を比較したが、有意な差は見いだされていない。このように、不安感情が視線行動に及ぼす結果は一貫していない。そして否定的な対人感情 (回避力) が視線行動に及ぼす影響を検討した研究—特に不安感情と視線行動の関連—は、肯定的な対人感情 (接近力) を取り上げた研究に比べ欧米でも数が少なく日本では見あたらない。そこで日本において、不安感情と視線行動の関連性を取り上げた本研究の意義は大きい。

Exline, Thibaut, Hckey, & Gumpert (1970) はマキアベリアニズム (Machaveallianism) 傾向と視線行動の関係を検討した。この傾向の高い者 (高マック者) は、目的達成の為には他人に嘘をつくことも辞さない者である。実験者が被験者にごまかしを指摘している間の視線量を調べたところ、ごまかしを否定している間、高マック者は低マック者より実験者の方へ視線を多く向けていたという。つまり欺瞞時に、マキアベリアニズム傾向が大きい者は相手に多く視線を向けることを見だし、パーソナリティ要因は欺瞞中の視線行動の違いの一因になることを示唆した。Mehrabian (1971) も、不安や外向性・内向性

と欺瞞の間に相互作用があり、この両要因の兼ね合いにより、どのような非言語的行動が示されるかが決まるとしている。そして、外向性－内向性が欺瞞時の非言語行動と関連をもつことを指摘した。つまり、欺瞞時には内向者は羞恥心や罪悪感から直接性を低めようとする傾向が強い一方、外向者ではむしろ相手を統制することに積極的であり、顔面表情などの身体動作は活発になるといふ。Riggio & Friedman (1983) も、欺瞞の過程では非言語行動と同時にパーソナリティ特性も考慮することの重要性を指摘している。彼らの実験は、被験者が写真を見てそれについて、ビデオカメラの前で嘘の報告をするという状況であった。結果は、嘘を言っている時に直視量が多くなっていた。しかしカメラに対する直視をとり上げているので、実際の相互作用場面ではなく、人工的で不自然である。そこで、本研究では実際の面接という相互作用場面で、欺瞞時における視線行動と外向性－内向性の関連について、視線の対人感情包括的接近－回避モデル及び Mehrabian (1971) の示唆に基づき、次の仮説を検討する。

仮説 1. 欺瞞者は非欺瞞者よりも直視量、相互視量が少ないであろう。

仮説 2. 内向者の直視量は非欺瞞時より欺瞞時に少ないが、外向者では両条件に直視量の差はないであろう。

方 法

(1) 被験者と面接者

心理学の講義時間に、女子短大生 130 名に MPI 質問紙を実施した。被験者の回答を MPI 総得点の高い順に並べ、総得点の高い者を最高得点者から順に 20 名選び出し外向群とし、総得点の低い者を最低得点者から順に 20 名選び出し内向群とした。

面接者は女子短大生 2 名である。面接者には仮説は知らせていない。各面接者は各条件を半数ずつ分担した。面接者と被験者には面識はない。2 名の面接者は、同じような服装をした。アクセサリーなど目を引くようなものは、一切身につけないようにした。

(2) 実験計画

発言内容（欺瞞、非欺瞞）とパーソナリティ特性（外向性、内向性）を独立変数とする 2 要因被験者間計画であった。

(3) 面接状況

被験者と面接者は向かい合って椅子に座った。2 人との距離は約 1.2 m である。面接者と被験者の間に置いた机の裏側にマイクを隠しておいた。また、2 台の隠しビデオカメラによって被験者の全身像と上半身を撮った。

(4) 手続き

1) 質問項目の選定

青年の学生生活などに関する意見項目を 44 名の女子学生に提示し各項目について賛成、反対及び各項目の重要度について評定を求めた。例えば、“男女の間で友情は成り立つ。1. そう思う、2. そう思わない”などの項目である。そして重要度が高く評定され、賛成・反対の態度ができるだけ明確に分かれるような 12 項目を選定して、質問項目とした（表 4-1）。

2) 欺瞞の操作

会話開始前に質問（表 4-1）に回答させ、意見の方向を確認しておく。欺瞞者群に実験者は、「自分の態度とは反対の立場に立って意見を述べてみてください」と言って、全ての質問に対し自分の態度を逆転して回答するように予め要請した。非欺瞞群には、「自分の態度で意見を述べてください」と言って、何の操作もせず全ての質問に対し自分の思っているままの回答をするように要請した。

3) 面接

被験者が椅子に座ると、面接者は質問を始める。実際の質問の前に次のような説明をする。「今日ここに来ていただいたのは、福短生の生活意識についての意見をお聞きし、学生指導の参考資料にするためです。皆さんの回答内容については秘密を厳守し、一切ご迷惑をおかけすることはありませんので、安心して回答にご協力ください。」面接中、面接者は、表情、態度を一定に保った。質問をする時には、手に持った質問用紙を見て、被験者が回答している時には、被験者の顔（目の周辺あたり）へ常時、視線を向けているようにした。

表 4-1 面接に使った質問項目

-
1. マスコミなどでは今の青年は礼儀を知らないといわれていますが、あなたは、そう思いますか。
 2. あなたは、試験でカンニングしようと思いますか。
 3. あなたは、授業中に私語をしてよいと思いますか。
 4. あなたは、小さいゴミなら廊下などへ捨ててもよいと思いますか。
 5. あなたは、出なかった講義のノートを試験前にコピーさせてもらいますか。
 6. 親の意見には従いますか。
 7. あなたは、電車などで老人が前へ来たら座席を譲りますか。
 8. あなたは、出席をとらない授業は時々さぼってもよいと思いますか。
 9. あなたは、見つからなければ万引してみようと思いますか。
 10. あなたは、学校の備品を壊したら届け出ますか。
 11. あなたは、相手にわからなければ二人の彼氏とつきあってもよい、と思いますか。
 12. あなたは、太ってきた時にはダイエットを始めよう、と思いますか。
-

(5) 面接後質問紙

1) 面接の質問内容の難易度、恥ずかしさ、重要度及び視線について

難易度に関しては、「質問に答えるのは難しかったですか、やさしかったですか」という内容に「非常に難しかった (7) —非常にやさしかった (1)」で回答する 7 点尺度であった。恥ずかしさに関しては、「質問に答えるのは恥ずかしかったですか、恥ずかしくなかったですか」という内容に「非常に恥ずかしかった (7) —全く恥ずかしくなかった (1)」で回答する 7 点尺度であった。重要度に関しては、「あなたにとって質問内容は重要でしたか」という内容に「非常に重要 (7) —全く重要でない (1)」で回答する 7 点尺度であった。視線に関しては、「相手の目を見て話せましたか」という内容に「非常によく見て話せた (7) —全く見て話せなかった (1)」で回答する 7 点尺度であった。これらは項目別に分析した。

2) 面接者に対する印象評定

SD 形式の尺度で、“友好的な”、“愉快的な”、“暖かい”、“親切的な”の 4 項目からなり、「非常に感じがする (7) —全く感じがしない (1)」の 7 点尺度であった。これら 4 項目について、 α 係数を算出した結果、.90 と満足のいく値であったので、合計値をもって印象値とした。なお、印象値については、値が大きいほど印象が良くなるように得点化した。

3) 面接時の被験者の気持

「リラックスしている (1) —緊張している (7)」、「冷静である (1) —当惑している (7)」、「否定的である (7) —肯定的である (1)」、「不安である (7) —落ち着いている (1)」、「愉快である (1) —不愉快である (7)」の 5 項目の 7 点尺度であった。これら 5 項目について、 α 係数を算出した結果、.80 と満足のいく値であったので、合計値をもって気持の得点とした。なお、気持の得点については、値が大きいほど緊張し不安であるように得点化した。

(6) 従属変数の測定

ハーフ・ミラーの後方から観察者が被験者の視線量を測定する。また、発言量（質問に対する被面接者の言語的応答の時間総量）と初発時間（面接者の質問が終了して被面接者が答え始めるまでの時間）、有声休止、無声休止、頭の動

きなどの非言語行動も測定する。

結 果

(1) 信頼性の検討

測定的一致率を信頼性として算出した。同一対象を 2 名の測定者が同時に測定し、一致率を算出した。この結果、一致率は、視線量が 88.7 %、発話量が 94.8 %となった。

(2) 実験操作の有効性

1) 内向性—外向性の操作

MPI による得点で、外向群の平均得点は 41.55 ($SD = 3.09$)、内向群は 18.50 ($SD = 6.02$) となった。外向群の方が内向群に比べて得点が有意に高かった ($t(38) = 15.23, p < .001$)。

2) 欺瞞の操作

2 名の面接者に対する印象を t 検定により比較したところ有意な差はみられなかった ($t(38) = .83, ns$; 面接者 A: $M = 11.86, SD = 3.82$; 面接者 B: $M = 10.53, SD = 6.11$)。したがって、2 名の面接者の印象評定値をこみにして分散分析を行った。その結果、欺瞞群 ($M = 9.2, SD = 4.87$) が非欺瞞群 ($M = 14.3, SD = 4.32$) より面接者に対して否定的な対人印象 (感情) をもっていた ($F(1, 36) = 12.01, p < .01$)。質問に答えるのは難しいかどうかについて、発言内容の主効果が有意であった ($F(1, 36) = 5.00, p < .002$)。つまり非欺瞞群 ($M = 5.40, SD = 1.05$) より欺瞞群 ($M = 6.45, SD = 0.89$) がより難しいと感じていた。質問に答えるのは恥ずかしかったかどうかについて、発言内容の主効果が有意であった ($F(1, 36) = 5.00, p < .03$)。つまり非欺瞞群 ($M = 4.3, SD = 1.69$) より欺瞞群 ($M = 5.3, SD = 1.34$) がより恥ずかしいと感じていた。また、非欺瞞群 ($M = 3.90, SD = 1.71$) より欺瞞群 ($M = 2.60, SD = 1.57$) があまり目を見て話せなかったと答えていた ($F(1, 36) = 5.99, p < .01$)。面接時の気持ちに関する 5 項目の合計得点を分散分析した。その結果、非欺瞞群 ($M = 22.65, SD = 4.36$) より欺瞞群 ($M = 27.25, SD = 4.27$) が緊張

し、不安で、当惑し、不愉快であると感じていた($F(1, 36) = 11.62, p < .002$)。以上のように、欺瞞群は緊張し、不安を感じており、欺瞞の操作の有効性は確認された。

(3) 仮説の検討

3つの視線測度について各条件毎に平均値と標準偏差を示したのが表4-2である。相互視量の3つの測度について発言内容の主効果が有意となった(回数: $F(1, 36) = 4.19, p < .05$; 総量: $F(1, 36) = 8.28, p < .01$; 平均時間: $F(1, 36) = 7.81, p < .01$)。いずれの測度についても欺瞞者群が有意に少なかった。次に、直視量の3つの測度について発言内容の主効果が有意となった(回数: $F(1, 36) = 4.92, p < .03$; 平均時間: $F(1, 36) = 4.66, p < .03$; 総量: $F(1, 36) = 8.21, p < .01$)の発言内容の主効果が有意となり、いずれの測度についても非欺瞞者より欺瞞者の方が直視量が少なかった(図4-1)。したがって仮説1は支持された。

また直視平均時間では、交互作用($F(1, 36) = 5.53, p < .02$)も有意となった。つまり、内向者は、非欺瞞条件より欺瞞条件で平均時間が少ないが、外向者ではこの差はみられなかった。したがって、仮説2が直視平均時間について支持された。

(4) 面接中の視線以外の非言語行動

発言量(回数、総量、平均時間)について有意な差はみられなかった。初発時間の平均時間について、発言内容の主効果が有意となった($F(1, 36) = 4.43, p < .04$)。非欺瞞群($M = 1.70, SD = 0.53$)より欺瞞群($M = 2.13, SD = 0.75$)が長かった。また頭の動きの平均時間について、パーソナリティ特性の主効果が有意な傾向となった($F(1, 36) = 3.61, p < .06$)。外向群($M = 2.91, SD = 1.95$)より内向群($M = 1.96, SD = 0.99$)が短い傾向がみられた。その他の非言語行動については有意な差はみられなかった。

考 察

表 4-2 相互視量、直視量の平均値と標準偏差

	発言内容			
	非欺瞞		欺瞞	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
内向群				
直視回数	6.90	1.88	6.20	2.32
直視総量(%)	36.40	20.61	17.17	9.07
直視平均時間	3.00	1.30	1.60	0.70
相互視回数	6.63	2.27	5.30	2.53
相互視総量(%)	22.12	13.31	10.70	7.44
相互視平均時間	1.85	0.81	1.14	0.45
外向群				
直視回数	7.26	1.96	4.96	2.35
直視総量(%)	24.58	15.61	16.96	11.30
直視平均時間	1.95	0.91	2.01	0.91
相互視回数	5.85	1.87	4.13	2.68
相互視総量(%)	17.04	14.43	8.45	6.52
相互視平均時間	1.56	0.75	1.18	0.32

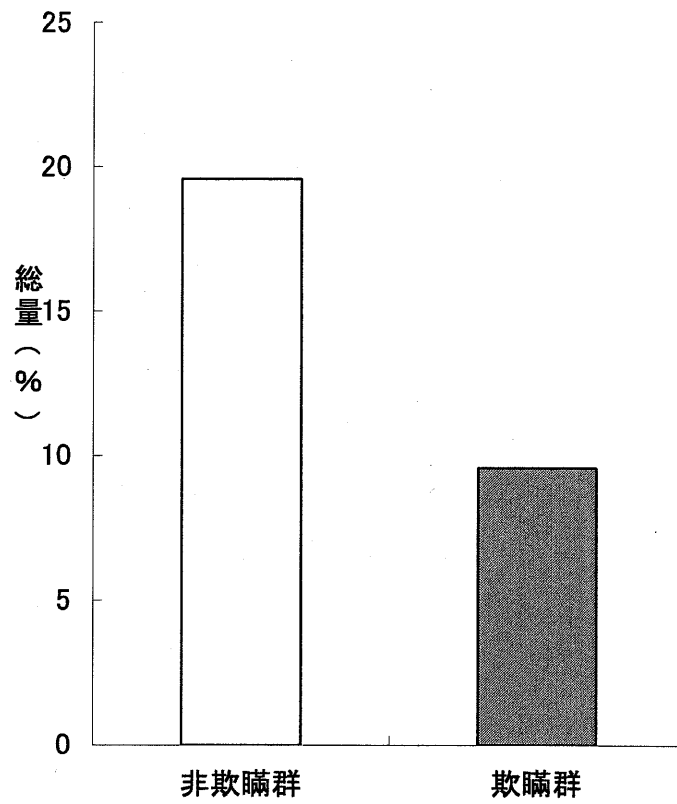


図 4-1 直視総量の平均値 (実験 4)

欺瞞群の実験後質問紙によると、被験者の多数が実際に嘘をついた気持ちになったと回答している。自分の思っていないことを回答したために、実際に嘘をついた気分になり、緊張してドキドキしたり、困ったり、とまどったり、恥ずかしく、不安で、当惑し、不愉快に感じていた。これは、実験中に役割演技として表出された肯定的（否定的）感情でも実際に肯定的（否定的）感情を経験するという Izard(1964)の指摘とも一致する。また Zuckerman et al. (1981)も指摘しているように、欺瞞には過去経験から不快な感情（経験）が関連していると考えらるなら、実験室における必然性のない文脈でも嘘をつくことは否定的な感情を喚起すると考えられる。実際に、実験後質問紙に示されているように、欺瞞者は相手に否定的な対人印象（感情）をもつことが確認されている。そしてこの否定的な感情は嘘をついている時の欺瞞者の行動にいろいろな影響を及ぼすことが知られている。

本研究の結果では、直視量、相互視量について発言内容（欺瞞、非欺瞞）の主効果が有意となり、欺瞞者が非欺瞞者より直視量が少ないことが確認され、仮説1が支持された。この結果は、欺瞞時に視線量が減少するという先行研究結果と一致している。相手に嘘をつくという状況は、不安、当惑、不快感情を惹起する（これは実験後質問紙により確認されている）。視線の対人感情包括的「接近一回避モデル」によると、この対人感情によって相手に対する回避力が相対的に強くなり、直視量、相互視量が減少したと解釈される。人に嘘を言う時、恥じたり当惑した時に、なぜ視線を外すのかについて、Exline et al. (1970)は、別の解釈を提示している。つまり嘘を言う時、視線を外すのは、相互視が生起するとお互いの関与度が高くなるので欺瞞行動がむずかしくなる。相互視によって親密さが高まるようなことは避けた方が欺瞞行動をとりやすいために、嘘を言う時、視線を相手に向けないのであろうと述べている。高マキアベリアニズム者や精神病者は別として多くの人には欺瞞状況で相互視を保持するのは非常に難しく、時には不可能であろう。人の視線回避力は主観的に非常に強いものである。これについて Argyle & Cook(1976)は、次の2つの説明を提示している。1つは、人は、相手の表情に表れる拒否などの印を見るのを避けるために視線を外す。2つ目は、正直で自然な会話中に相互視がよく生起する。従って、欺瞞時の相互視は不釣り合いである。この2つの説明とも、対面場面から

の回避欲求を予測している。つまり視線量の減少を社会的回避の一部と考えている、と述べている。

視線以外の非言語行動の初発時間（平均時間）について、発言内容の主効果が有意となり、非欺瞞群より欺瞞群が長くなっていた。実験後質問紙で非欺瞞群より欺瞞群が質問に答えるのが難しく、恥ずかしいと感じていたことからわかるように、“自分の態度とは反対の立場に立って意見を述べる”ことの認知的、感情的な困難さのために非欺瞞群より回答が遅くなったと考えられる。Zuckerman et al. (1981)によると、初発時間は準備されていない欺瞞 (low level of planning) の場合は長めになり、よく準備された欺瞞 (highly planned) の場合は短かめになると述べている。これによると本研究は、質問への立場表明の後すぐに「自分の態度とは反対の立場に立って…」という教示がなされていたので、すぐその場で考えながら回答せざるを得ない状況、即ち、「準備されていない欺瞞」に相当すると考えられる。

さて、直視の平均時間についてパーソナリティ要因（内向性、外向性）との交互作用が有意となった。つまり内向者は、欺瞞条件より非欺瞞条件で直視平均時間が多くなったが、外向者は欺瞞条件と非欺瞞条件における差はなかった。すなわち Mehrabian (1971) の指摘しているように、欺瞞時の視線行動に内向性、外向性要因が媒介していることが確認された。Kashy & DePaulo (1996) によると、外向者は内向者より嘘をついた回数を多く報告していたという。そして嘘をつくことに慣れて、習慣的になっていると述べている。このことから、本研究で外向者は欺瞞条件で嘘をついても動揺しなくなっているため、視線量の減少として表れなかったのかもしれない。また、日常生活での小さな嘘は、重大な結果を生じるわけではないので、表情にまで変化が起こらない。本実験では、単に実験の一部として嘘をつくように教示した。このため、うまく嘘をつこうという動機づけはあまり高くない状況といえる。こういう、嘘をつく動機が低い状況では、表情を上手に統制できるので、外向者は視線量を統制して欺瞞時に反映しなかったのかもしれない。

さて、本論文の立場に沿って実験 4 を要約すると以下のようなになる。

要 約

実験4では、欺瞞時における不安感情と視線行動の関連について、欺瞞者の方が非欺瞞者よりも相手に対する直視量が少ないであろうという仮説を検討した。実験計画は、発言内容（欺瞞、非欺瞞）、パーソナリティ特性（外向性、内向性）を独立変数とする2要因被験者間計画であった。女子学生130名にMPI質問紙調査を実施し、外向群20名、内向群20名を選出した。女子学生2名が、面接者として学生生活に関する質問を行った。欺瞞群に対して実験者は、全ての質問に自分の態度とは異なる立場から回答するように予め要請した。非欺瞞群に対しては、全ての質問に自分の思ったままの回答をするように要請した。複数の観察者が、ハーフ・ミラー及びVTRから直視量を測定した。分散分析の結果、直視量（回数、総量、平均時間）について発言内容の主効果が有意となり、直視量は非欺瞞群よりも欺瞞群の方が少なく、仮説が支持された(図4-1)。面接時の気持ちについては、非欺瞞群に比べ欺瞞群の方がより緊張し、不安で、当惑し、不愉快であると感じていた。モデルが示すように、不安な感情を誘発する欺瞞場面では回避力が接近力より強いと考えられるので、視線行動が少なくなると解釈された。

第3節 接近機能をもつ特殊な否定的対人感情が視線行動に及ぼす影響 (実験5)

問 題

視線の対人感情包括的「接近一回避モデル」によると、好意のような肯定的な感情は接近力と、怒りのような否定的な感情は回避力とそれぞれ関連している。しかし、モデルとは逆に否定的な感情場面である威嚇場面で視線量が増加したり、中立的感情より怒り感情の表出要請下で、相手との相互視量の増加が見いだされている(Fromme & Schmidt, 1972)。実験5では、従来モデルからの予測と矛盾する結果(Fromme & Schmidt, 1972; Kimble & Olszewski, 1980)

が報告されている場合の視線行動、すなわち他者に対し怒り感情を表出する場合の視線行動を検討した。

視線と感情表出の関係についてはまだ明らかになっていない面が多い。視線が感情表出に果たす役割については、表情の筋肉の動きに比べるとあまり注目されてこなかった。Ekman & Friesen(1969)は、6つの基本的感情(驚き、恐怖、怒り、嫌悪、悲しみ、幸福)が表情に表れる際に、眉毛の位置や目の周りの筋肉がどのように変化するかについては述べているが、表情と関連した特定の目の焦点(visual focus)については述べていない。先のFromme & Schmidt(1972)は感情を演技表出させる研究で、感情の種類(型)によって相手との相互視が変化することを示した。例えば悲しみの感情の場合、怒り、恐れなどの感情より相手との相互視が少なかった。すなわち、悲しみ、絶望、嘆きなどの感情状態では相手に視線を向けないと報告している。そして表情によって主要な感情の型が分かるように相互視も有用な指標になると示唆している。しかしこの研究は、被験者の人数(男子学生16名)も少なく、被接近人物(男性)がサングラスを着用していたため、別の効果が混入していると考えられる。また否定的な感情のみを取り上げており、肯定的な感情は取り上げられていない。Lalljee(1978)は、カメラを人物に想定して、女優にカメラに向かって感情表出させている。この結果、カメラに向けられた視線の割合が、驚き、興奮、喜び、軽蔑で高く、また絶望、怒り、不安、迷いで低かったという。また彼は、感情の対象が自分以外にある時は視線量が最大となり、自分自身である時は視線量が最小となると述べている。Natale(1977)は、女性被験者に憂うつな感情と高揚した感情を引き起こして、それぞれの場合の視線を調べている。この結果、憂うつな感情の時に、視線の回数が少なく、短い視線になったと報告している。さて、人は暖かさや好意を示す時、相手に視線を多く向けることが知られている(Exline & Winters, 1965; Fugita, 1974; Kleinke, 1986)。これは従来、“好意－視線”(like-look)関係の研究として多く行われてきている。Mehrabian(1972)は一連の研究で被験者が相手や仮想人物に対して好意的又は非好意的にふるまう役割演技をさせて、被験者の非言語的行動を調べている。例えば視線について、非常に嫌いな人物に対して最も相互視が少なく、非常に好きな人物に対しては中程度に多くなったという。さらに、被験者の性と相手、

仮想人物の性によっても非言語的行動に変化があることを示唆している。

さて、Ellsworth & Carlsmith(1968)は、相互視と会話内容が面接者に対する評価に及ぼす影響を検討した。肯定的な言語内容では相互視の回数が多いと面接者に対する評価がより肯定的となり、否定的な言語内容では相互視の回数が多いとより否定的な評価となった。つまり感情が肯定的なものでも否定的なものでも、視線は感情の強化子(intensifier)となると述べている。感情のエンコーディング(encoding)研究で、McClintock & Hunt(1975)は、各10名の男女学生をいろいろな話題で面接した。これらの話題は、それぞれ愉快的関与(pleasant involvement)、受動性、不愉快的関与をもたらすものであった。また4つ目の条件は被験者に嘘をつかせるような教示の条件である。この結果、被験者の視線の割合が、受動的话题(関心、興味や面白味のない話題)で、他の3条件に比べて最も低かった。つまり、感情的関与度が高くなると視線量も多くなることを示している。Exline, Paredes, Gottheil, & Winkelmayer(1979)は、分裂病者と正常な女性が、1名の男子面接者に、幸福であった、また悲しかった、あるいは怒ったような個人的な経験を話す場面をフィルムに収録した。正常な女性について、幸福な経験を話す時に面接者に向けた視線が最大となり、悲しい話の時に下向きの視線が最大となった。そしてこのパターンは、特に話の内容が強烈であると評定された場合に非常に明確であったという。ここでも視線が感情の強化子の役目をしていることが示唆されている。

さて Kimble & Olszewski(1980)は、女子学生43名に、カメラに向かって肯定的な感情を示す文章と否定的な感情を示す文章を演技させた。被験者の半分は強い感情を、残り半分には弱い感情を表出させた。結果として、強い感情を演技する時に、視線量が多くなった。しかし、感情が肯定的か否定的かは視線には影響を及ぼさなかった。また Kimble et al.(1981)は、48名の女子学生にカメラおよび一人の男性に向かって好意的文章と怒りの文章を強い調子、弱い調子で演技させた。結果として、表出の対象が人物でもカメラでも、また文章のポジティブさ(肯定性)に関係なく、強い感情はより多い直視を引き起こした。ここでも相互視が感情表出の強化子として作用することが示されている。Kimble et al.(1981)の研究では、視線レベルと感情の強さに正の関係があることは確認されたが、感情を向ける相手が変わるとどうなるかの検討はなされて

いない。すなわち、女性被験者が男性の表出対象に向かって感情を表出した結果だけで、同性（女性）の表出対象については検討されていない。Ellsworth & Ludwig(1972)によると、男女が被験者になっている視線の研究では、原則として必ず性差がでるといふ。従って、女性被験者が異性に感情表出する場合と同性に表出する場合では視線量に違いがあるのは当然予想される。また表出する感情のポジティブさとの相互作用も予想される。

さてはじめに述べたように、視線の対人感情包括的「接近—回避モデル」によると、嘘をついている人、当惑している人には視線を避ける（視線回避）力があるように、怒りの感情（非好意的感情）を表出するような場面では視線の回避がある。しかし、先行研究の中には、怒り感情が視線量を増加させるというモデルからの予測と矛盾する結果を報告するものもあり、視線行動に及ぼす怒り感情の影響を確認する必要がある。

本研究では、視線の対人感情包括的「接近—回避モデル」および Kimble & Olszewski(1980)、Kimble et al. (1981)の研究を踏まえて、女性被験者を対象として対人感情の種類（好意、怒り）、感情の表出対象人物（女性、男性）、感情の強さ（強、弱）という3つの要因をとりあげ、次の仮説を設定した。

仮説1 否定的な怒り感情表出より肯定的な好意感情表出の時に、直視量が多くなると予測される。さらに、

仮説2 好意感情が強い時には直視量は増加するが、非好意感情（怒り）が強い時には直視量は減少するであろう。

仮説3 女性被験者は、表出対象が異性より同性の場合に直視量が多いであろう。

仮説4 怒り感情の表出においては、相手が、同性より異性の場合に直視量が減少するであろう。

方 法

(1) 被験者

女子短大生 64 名である。表出対象人物は男子大学生 2 名、女子短大生 2 名である。実験期間を通じて、表出対象人物となる男女学生ともに同様な服装（白

色シャツ)で被験者と対面する。なお、表出対象人物は、被験者と面識はない。

(2) 実験計画

2×2×2 の混合計画。第1の要因は対人感情の種類(好意感情[好意]、非好意感情[怒り])、第2の要因は感情表出対象人物(女性[2名]、男性[2名])であり、これらの要因は被験者間配置である。第3の要因は対人感情の強度(強、弱)で、被験者内配置である。

(3) 手続き

1) 教示と実験前教示

実験者は被験者を1人ずつ面接室に案内し、椅子に座らせる(図5-1)。そして次のような教示を行う。「今日はお忙しいところをどうもありがとうございました。私たちは、人は話している時にどのように感情を伝達するかについて調べています。以前お渡しした文章は覚えて頂いたと思います。ここでお願いしたいのは、覚えて来て頂いた文を、感情をこめて、この人(対象人物)に向かって表現して頂きたいのです。ここで大事なことは、一字一句正確に言うことではなく感情表現が大切ですから、途中で少々間違ってもためらわずにそのままやって下さい。このようなことを相手を変えたりして4通り行って頂きます。」各被験者には実験日の3日前に好意の文章又は怒りの文章が手渡されている。各文には次のような教示が印刷してある。「…以下にある文章を、紙を見ないで言えるぐらいに覚えてきて頂きたいのです。当日は、あなたにこの文章を感情をこめて言ってもらいます。少々の間違ひは構いませんが、紙は見ないで言ってもらいますので、よく覚えてきて下さい。」

2) 対人感情の種類の種類

好意の文章(肯定的な感情)は次のような内容である。「そうそう、あなたはみんなに好かれているみたいよ。だって友達にわたしがあなたの親友だっていったら、みんなに『とってもうらやましい』っていわれたの。あなたのその優しさと明るさがみんなにうけているみたい。わたしもあなたのその優しさと明るさが好きなの。いっしょにいただけで楽しくなっちゃう。わたしあなたの友達で本当によかったわ。これからも仲良くしましょうね。」(178字)。

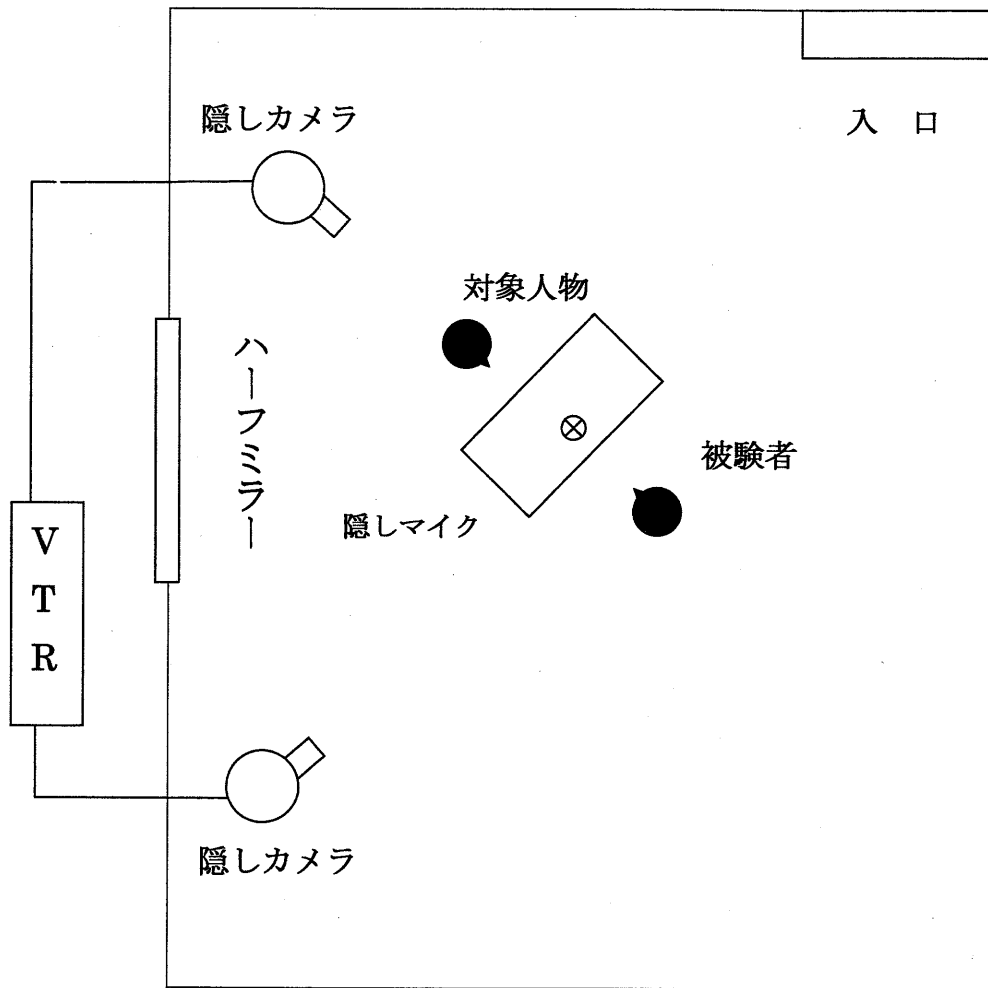


図 5-1 実験状況

怒りの文章（否定的な感情）は次のような内容である。「どうしてあなたはいつもそんな考え方しかできないの。わたしはあなたのそういうわがままで、意地悪なところがきらいなのよ。あなたのそういう性格、友達の間でうわさよ。だからいつもあなたはのけ者なのよ。それを直さないかぎり、あなたには友達なんかできないでしょうね。でも今まで何回いってもその性格直らなかつたから、もういってもしかたないわね。」（174字）。以上2つの文章はほぼ同量の字数となっている。

3) 対人感情の強度の操作

感情の強度については実験者が口頭で次のような教示をして操作した。強い感情的調子の教示は「文章をこの人に向かって、非常に強く表現して伝えて下さい。」、弱い感情的調子の教示は「文章をこの人に向かって、非常に弱く表現して伝えて下さい。」である。さて、被験者と対象人物は、約1m離れて机を真中に置いてお互いに椅子に座っている。各被験者は2名の女性（又は男性）の表出対象人物に、強い感情と弱い感情で2回ずつ計4回表出する。各性2名の対象人物へ感情表出するのは、表出対象の性の影響を検討するためである。対象人物は被験者が話しかけている間中、常時、中性的な表情をしている。被験者の強い調子に対しても弱い調子に対しても笑ったり、にらみ返したり、うなずいたりして表情を変えない。また被験者が話している間中、常時、被験者の顔を見ている。姿勢は前傾でもなく後傾でもなく真っ直に座っている。両手は膝の上へ置いている。男女各2名の対象人物は同様にふるまうように十分訓練された。2名の対象人物に対して強弱の感情を4回表出する順序はランダムに行われた。被験者が感情表出する前に、実験者は観察室へ退出する。その後、実験室で被験者は1人の対象人物に向かって表出する。各回の表出が終了した直後、実験者は面接室へ戻り対象人物を観察室へ退出させる。そして、被験者に自分の感情表出に関する次のような実験後質問紙に回答してもらう。

(4) 実験後質問紙

1) 感情の肯定性－否定性とその強度の測定

肯定性－否定性は「好意的な(7)－非好意的な(1)」、「肯定的な(7)－否定的な(1)」、「受容的な(7)－拒否的な(1)」の3項目を用いて7点法で得点化した。こ

れら3項目について、 α 係数を算出した結果、.91と満足のいく値であったので、合計値をもって肯定性－否定性の指標とした。なお、値が大きいほど肯定的になるように得点化した。また感情の強度は、「強い(7)－弱い(1)」、「能動的な(7)－受身的な(1)」、「深い(7)－浅い(1)」の3項目を用いて7点法で得点化した。これら3項目について、 α 係数を算出した結果、.83と満足のいく値であったので、合計値をもって強度の指標とした。なお、値が大きいほど感情の強度が強くなるように得点化した。

2) 表出中の気持ち

「自然な(7)－不自然な(1)」、「当惑した(1)－当惑しない(7)」の2項目を用いて7点法で得点化した。これら2項目について、 α 係数を算出した結果、.69とおおむね満足のいく値であったので、合計値をもって気持ちの指標とした。なお、値が大きいほどゆったりした自然な気持ちになるように得点化した。

3) 自分の非言語的行動の評定と文章の覚えやすさの評定

4回の表出がすべて終了した直後に、被験者は、各回における自分の非言語的行動を推測して評定した。すなわち、声の大きさは「非常に大きい(7)－非常に小さい(1)」、視線量(どのくらい相手を見たと思うか)は「非常に多い(7)－非常に少ない(1)」、表情は「非常に愉快(7)－非常に不愉快(1)」のそれぞれ7点法で得点化した。また、渡された文章が覚えやすかったかどうかを、「覚えやすい(7)－覚えにくい(1)」の7点尺度で評定した。これらは項目別に分析した。

4) 非言語的感情表出能力

非言語的感情表出個人差を測定するために、感情的コミュニケーションテスト(ACT; 大坊, 1989; Friedman, Price, Riggio, & Dimatteo, 1980)を実施した。これは次のような13項目からなる。「私は、電話ででも、たやすく感情を表すことができる」、「私は、その気になれば、人を引きつける眼差しができる」などの項目で、「当てはまる(9)」から「当てはまらない(1)」までの9点尺度である。高得点ほど対人的な表出能力が高いことなどを表している。得点範囲は13～117である。

(5) 従属変数の測定

ハーフ・ミラーの後方から観察者2名が1名ずつ交代で被験者の視線量を測定した。録音式行動記録器（竹井機器製）により、精度1秒で測定がなされた。観察者は被験者が対象人物を見ている間、エンコーダーボタンを押している。対象人物から目を外した時にはボタンを離す。エンコーダーから発信された音信号がテープレコーダーに録音される。この音信号をデータアナライザーによって数値に変換し、後の分析に用いた。

結 果

(1) 信頼性の検討

従属変数の測定は、実験者とは別の2名の観察者により行われた。2名の観察者は64名の被験者のほぼ半数ずつを受けもって測定した。2名の測定がどの程度一致しているかをみるために、被験者7名の22回の表出を2名が独立に測定した値について、一致度（Pearsonの相関係数）を求めた。これによると、視線回数が $r = .87$ ($p < .001$)、視線総量が $r = .98$ ($p < .001$)となった。一致度は満足すべきものであるので、2名の観察者の測定値を合わせて以下の分析に使用した。

(2) 実験操作の有効性

好意の文章 ($M = 3.75$)、怒りの文章 ($M = 3.63$) の覚えやすさの評定で2つの文章の間に有意差はみられなかった ($t(62) = 0.35, ns$)。したがって、これらの文章は特に覚えやすくも覚えにくくもなく、また2つの文章の難易度に差はないといえよう。

ACT得点の平均値は61.0となった。これはFriedman et al. (1980)の結果(女性: 72.8)と比べて低くなっている。この得点が高いほど感情の表出能力が高いといわれている。ACT得点について2要因の分散分析を行ったところ、感情の種類要因の主効果にのみ有意な傾向がみられた ($F(1, 60) = 2.73, p < .10$)。その他の要因の主効果と交互作用効果は有意でなかった。すなわち、非言語的感情表出能力に関して被験者が各条件にほぼランダムに割り当てられていたと考えられる。

感情の肯定性は、好意の文章と怒りの文章によって操作された。この有効性を3項目の尺度の合計得点で確かめた。この指標について3要因の分散分析を行ったところ、感情の種類要因の主効果が有意であった ($F(1, 60) = 94.16, p < .001$)。すなわち、怒りの文章表現中は好意の文章表現中に比べ、被験者はより非好意的で、否定的で、拒否的であると認知していた。したがって感情の種類操作は有効であったといえよう。次に感情強度の操作は教示によって行われたので、その効果を3項目の尺度の合計得点で確かめた。この指標について3要因の分散分析を行った結果、感情強度要因の主効果が有意となった ($F(1, 60) = 391.53, p < .001$)。すなわち被験者は、弱い感情表出より強い感情表出の場合に強く、能動的で、深いと認知していた。したがって感情強度の操作の有効性も確認された。

(3) 仮説の検討

1) 視線量

データの分析については、男女各2名の表出対象人物に向けた被験者の視線量の和を測度として用いた。すなわち、直視総量 (%) は、(対象人物1に視線を向けていた時間+対象人物2に視線を向けていた時間) / (対象人物1の時の全表出時間+対象人物2の時の全表出時間) ×100 として算出する。1分当りの直視回数及び直視の平均時間 (総量/回数) についても同様の操作をして算出した。なお、直視総量については、これを角変換した値について以下の分析を行った。各条件における従属変数の平均値と標準偏差を表 5-1~表 5-3 に示した。さて仮説1は、否定的な怒り感情表出より肯定的な感情表出の時に、直視量が多くなるということであった。従属変数に3要因分散分析を施した。その結果、対人感情の種類の主効果は3つの測度 (直視総量、直視回数、直視平均時間) すべてにおいて有意ではなかった (図 5-2)。好意的な感情表出においても怒り感情表出においても直視量に有意差はなく、仮説1は支持されなかった。このように、怒り感情の場合にも好意感情の場合と同じという、モデルの予測に反する結果が得られた。また3つの測度すべてにおいて、対人感情の種類と強度要因の交互作用は有意でなく、仮説2も支持されなかった。これらの結果から、モデルにおいて、怒り感情と視線行動増加の関連を説明する別の

表 5-1 直視総量 (%) の平均と標準偏差

	表 出 対 象			
	同 性		異 性	
	強	弱	強	弱
好意感情	41.80 (29.65)	29.67 (27.86)	39.70 (32.99)	23.80 (27.87)
非好意感情	47.69 (33.18)	40.92 (30.54)	27.73 (27.01)	16.96 (20.90)

() 内は標準偏差

表 5-2 直視回数（1分当り）の平均と標準偏差

	表 出 対 象			
	同 性		異 性	
	強	弱	強	弱
好意感情	14.5 (6.0)	12.3 (6.1)	12.8 (9.6)	10.3 (8.7)
非好意感情	14.5 (6.5)	13.0 (6.7)	11.5 (7.7)	7.5 (6.9)

() 内は標準偏差

表 5-3 直視平均時間の平均と標準偏差

	表 出 対 象			
	同 性		異 性	
	強	弱	強	弱
好意感情	2.47	1.79	3.31	1.44
	(3.29)	(2.81)	(6.41)	(1.98)
非好意感情	2.72	2.08	1.41	0.89
	(3.92)	(2.36)	(1.42)	(0.74)

() 内は標準偏差

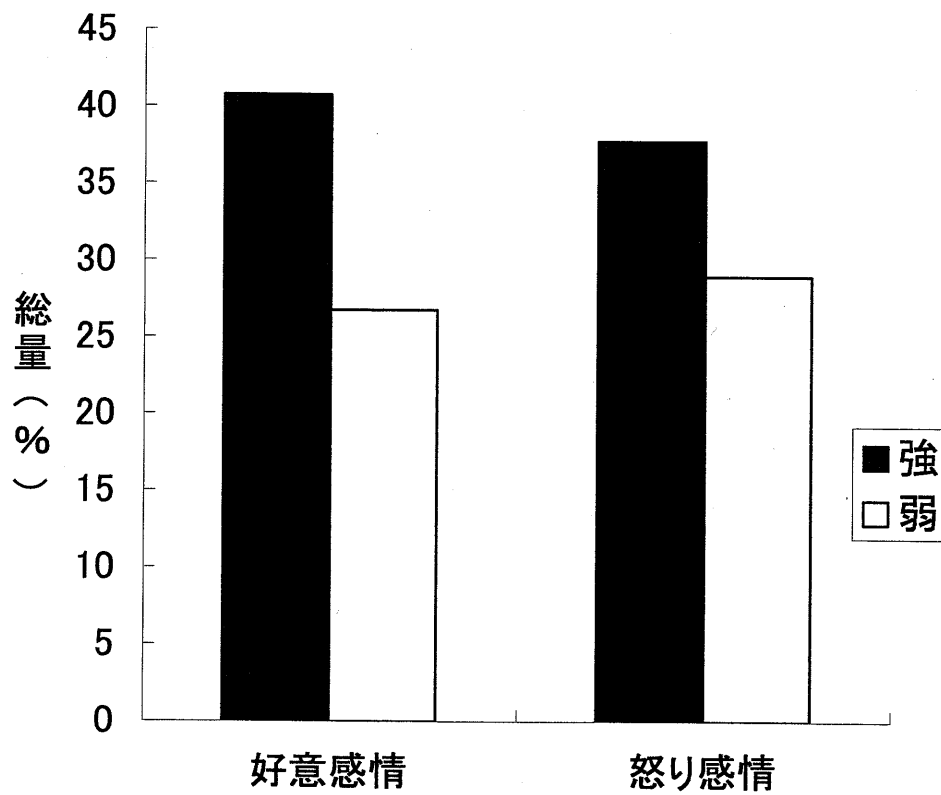


図5-2 直視総量の平均値 (実験5)

過程を想定する必要性が示されたといえる。

次に仮説3は、感情表出対象が女性の場合に男性の場合より直視量が多いということであった。まず直視総量についての分析結果では、表出対象要因の主効果が有意であった ($F(1, 60) = 12.23, p < .001$)。すなわち、予測どおり相手が女性の場合に視線を多く向けていた。次に1分当りの直視回数についての分析結果でも、表出対象要因の主効果が有意であった ($F(1, 60) = 9.92, p < .003$)。すなわち、相手が女性の場合に視線を向ける回数も多くなっていた。しかし、平均時間については、表出対象要因の主効果は有意ではなかった。ただ、表出対象が女性の場合に平均時間が大きい方向にあった (表 5-3)。したがって、直視の総量と回数については仮説3が支持されていた。すなわち、女性被験者が感情表出する時、相手が異性より同性の場合により多く視線を向けていた。

さらに、直視総量について感情の種類要因と表出対象要因の交互作用が有意となった ($F(1, 60) = 5.19, p < .02$)。単純効果の検定によると、怒り感情表出においては、表出対象が男性の場合には女性の場合に比べて、直視量が少なくなっていた ($F(1, 120) = 8.80, p < .005$)。また平均時間についての分散分析の結果、感情の種類要因と表出対象要因の交互作用に有意な傾向がみられた ($F(1, 60) = 3.02, p < .08$)。直視回数については感情の種類要因と表出対象要因の交互作用は有意ではなかった。このように、直視総量については仮説4が支持されていた。つまり、女性被験者が異性に否定的な感情を表出する時には、肯定的な感情の場合より視線活動が抑制された。

2) その他の測度

対象人物への感情表出中の被験者の気持ちは、2項目の形容詞対の合計得点によってチェックした。この得点に3要因分散分析を行った結果、感情の種類要因の主効果が有意となった ($F(1, 60) = 4.33, p < .03$)。すなわち、怒り感情表出時には好意感情表出時に比べて、不自然で当惑すると感じていた。また表出対象要因の主効果も有意となった ($F(1, 60) = 12.56, p < .001$)。すなわち、男性より女性へ感情表出している時に、より自然で当惑しないと感じていた。他の要因の主効果、交互作用は有意で

なかった。

次に、被験者の感情表出中における非言語的行動に関する推測値について3要因分散分析を行った。まず、声の大きさについては、感情強度要因の主効果が有意であった ($F(1, 60) = 506.69, p < .001$)。すなわち、強い感情表出の時に自分の声が大きかったと推測している。他の要因は有意ではなかった。次に「どのくらい相手を見たと思うか」(視線量)に関して、感情強度要因の主効果が有意となった ($F(1, 60) = 4.72, p < .03$)。すなわち、強い感情表出の時により多く相手を見ていたと推測している。また、感情の種類要因と表出対象要因の交互作用に有意な傾向が見られた ($F(1, 60) = 3.02, p < .08$)。次に感情表出中に自分の表情が愉快であったかどうかの推測については、感情の種類要因の主効果が有意であった ($F(1, 60) = 21.01, p < .001$)。すなわち、怒り感情より好意感情表出の場合により愉快的な表情であったと推測している。また、感情の種類要因と感情強度要因の交互作用が有意となった ($F(1, 60) = 6.89, p < .01$)。すなわち、強い感情表出時には怒りより好意の場合により愉快的な表情になったと推測している ($F(1, 60) = 14.97, p < .001$)。また好意感情表出時においては、弱い表出より強い表出時により愉快的な表情になったと推測している ($F(1, 60) = 6.04, p < .02$)。

考 察

仮説1は、視線の対人感情包括的「接近一回避モデル」から、否定的な怒り感情表出より肯定的な感情表出の時に、直視量が多くなるというものであった。しかし、否定的な怒り感情の場合にも好意感情の場合と直視量は同じという、モデルの予測に反する結果が得られた。好意感情でも怒り感情でも視線量が多くなった理由を解明するのは意義がある。視線は、二面的機能をもつことが知られている。好意感情も怒りも覚醒 (arousal) が高まった状態であるから、視線量が多くなるとも考えられる。本研究では、否定的な感情表出より肯定的な感情表出の時に、直視量が多いということは見いだされなかったのである。これは Kimble & Olszewski (1980)

や、Kimble et al. (1981)の結果とも一致している。つまり、感情の型（種類）の違いが視線量にどのような影響を及ぼすかについての明確な結果は得られなかった。しかし以前の研究では、感情の種類によって相手との相互視が変化するとか、肯定的な感情と視線の間に正の相関があるとの報告もある。Tomkins(1963)は、目の動きと目の周辺の筋肉によって喜び、興奮、恐れ、苦悩、怒り、恥ずかしさが表出されると示唆している。すなわち、感情の種類は視線量よりも視線の方向や動きなどによりよく反映されるのかもしれない。したがって、視線量だけでなく視線の動かし方などを定性的に分析してみる必要があるだろう。ところで、感情表出中の被験者の気持ちには感情の型の違いが影響を与えていた。好意と怒りを表出中の被験者の気分に関する質問紙を検討すると、このことがうかがわれる。被験者は、非好意感情を表出している時には、好意感情を表出している時よりも非好意的、否定的、拒否的に感じている。また、感情を強く表出する時より弱く表出する時に好意的、肯定的、受容的に感じると報告している。さらに、強い感情表出においては好意感情の方をより好意的、肯定的、受容的に感じている。また好意感情では、強く表出する時により好意的、肯定的、受容的であるが、怒り感情では逆に弱く表出する時により好意的、肯定的、受容的な感じをもつと報告している。このように、感情の種類は視線量に影響を及ぼさなかったが、表出中の被験者の認知には影響が表れていると思われる。

さて仮説2は、強い好意感情表出において、直視量は増加するが、非好意感情（怒り）が強い時には直視量は減少する、というものであった。実験結果は、予測と異なり、強い感情を表出する時には、感情が肯定的でも否定的でも直視総量が多くなっており、仮説2は支持されなかった。これもKimble & Olszewski(1980)やKimble et al. (1981)の結果と一致している。なお、直視回数と平均時間の測度についてはいずれも感情強度要因の主効果は有意とならなかった。しかし、平均測定値を見ると、強い感情表出の場合にいずれの測度も多い方向になっている（回数：強 13.3、弱 10.8；平均時間：強 2.47、弱 1.55）。また、このエンコーディング研究の結果は、好意的内容で相互視量が多いと、より肯定的に評価され、

非好意的内容で相互視量が多いと、より否定的に評価されるというディコーディング研究の結果 (Ellsworth & Carlsmith, 1968) と対応している。相互作用における関与 (involvement) 行動パターンの予測には親密性機能だけでなくそれ以外のものにも注目する必要がある。親密性機能の中核とする親和葛藤理論では、非好意的、または不愉快な相互作用の期待から来る高い関与行動を説明することができないと思われる。仮説 1 と仮説 2 が支持されなかった。つまり、怒り感情の場合にも好意感情の場合と直視量が同じという、モデルの予測に反する結果が得られた (図 5-2)。この結果から、モデルにおいて、怒り感情と視線行動増加の関連を説明する別の過程を想定する必要性が示されたといえる。

さて仮説 3 は、男性より女性の対象人物に対する視線量が多いということであった。直視総量と回数について表出対象要因の主効果が有意となり、女性被験者は男性より女性に対して直視総量、回数が多くなり仮説 3 が支持された。直視の平均時間については表出対象要因の主効果は有意ではなかったが、男性より女性の場合に平均時間が大きい方向となっている。このような結果は、視線量の性差に関する従来の結果と一致している (Argyle & Ingham, 1972; Hall, 1984)。すなわち、女性は男性よりも相手に多く視線を向けている。また異性同士より同性同士の場合に視線活動が高く、女性同士の方が男性同士より視線活動が高いのである。同性に対しては、比較的ストレートに接近力にしたがって視線量を増加させることができる。しかし、異性に対しては、抑制が働き、思ったようには視線量を増加させることができないと考えられる。Tomkins (1963) は、「見ることに対する普遍的タブー」が存在するという。Exline et al. (1965) は、これを親密な人間関係に関わることへの恥の機能と解釈し、この恥は男女間で最も強くなると述べている。

さて直視総量について、感情の種類要因と表出対象要因の交互作用が有意であった。下位検定の結果、怒り感情の表出において、女性に比べて男性が相手の場合に直視量が減少していた。しかし、好意感情の表出では対象人物が女性でも男性でも差はなかった。このように直視総量について仮説 4 が支持された。つまり、男性に対して否定的な感情を表出することに

ついて強い抑制が働いていたようである。初対面で未知の男性に怒りの感情を表現することに躊躇していたものと考えられる。しかし、好意のような肯定的な感情表現の場合には抑制は少ない。このことは、実験後質問紙の結果からも確認できる。表出中の気持ちを問う項目をみると、好意表出よりも怒り表出において、「自然でなく、当惑している」と感じていた。また女性よりも男性に対して「自然でなく、当惑している」と回答していた。

以上のように本研究では、感情の型と視線量の間には明確な関係は見いだせなかったが、感情の強弱と視線量の関係については明確な関係が得られたといえよう。なお、Matsumoto(1989)は、人は目の周囲の部分を見て感情の強さを判断すると示唆している。つまり、写真による表情判断の実験で、上のまぶたを上げて感情表出している場面は強い感情を表していると判断されていたという。このように、視線量だけでなく目自体の表情も感情強度の指標の1つであろう。さらに、表出時間(秒)について3要因分散分析を行ったところ感情強度要因の主効果のみが有意となった($F(1, 60) = 4.24, p < .04$)。すなわち、強い表出では弱い表出よりも表出時間が短かった。発話の速さや声の高さなど、いわゆるパラ言語には話し手の感情状態が反映される。発話の速さについて本実験では分析目的にはしていなかったが、結果が示すように感情の強い表出では、発話が速くなる傾向が認められた。本研究では感情表出と視線量の関係だけに注目した。しかし感情表出時には、視線のチャンネル以外の様々な非言語的チャンネル(音声、身体の動き、姿勢など)への変化が予想される。したがって、さらに感情表出と他の非言語的行動との関係についても検討すべきであろう。

さて本研究では、役割演技(role playing)によって感情表出させている。すなわち本研究での感情が、自然発生的、自発的な(spontaneous)感情ではなく、ある程度演技された(posed)、意図的な(intentional)感情だということである。Freedman(1969)が批判しているように、役割演技による研究結果では、被験者がある状況でどのように行動すると思っているかという考え(認知)や推測を示しているだけである。実際の場面で、

その人が実際にどのように行動するかは分からないのかもしれない。特に感情的な非言語行動は意識しないレベルで生起するので、演技された感情表出を被験者の真の反応としてよいかどうかは問題かもしれない。しかし彼は、役割演技にもいろいろな程度があるという。全く現実離れした役割演技を要求するものから、かなり現実場面に近い状況で役割演技するものまでである。もちろん望ましいのは後者の方である。またMixon(1971)が指摘するように、もしより現実的なシナリオで実験を行った場合には現実性が高くなり、自然場面での結果と同様な結果が得られるかもしれない。さらに、役割演技法による感情研究は、結果をみると感情理論や役割演技法以外の方法による結果から外れていないので、有効な方法であると、Fromme & Schmidt(1972)は述べている。本実験の場合、実際の人物の前で、好意や怒りの意味をもつ文章によって実際に感情を表出させているので、極端に現実から遊離した役割演技とも考えられない。事実、被験者の内省報告を調べてみると、表現中に本当に、好意や怒りの感情を感じたという被験者が多数みられた。Buck(1988)も、役割演技によっても演じた人の多くが強烈な感情経験をしたことを報告している。

また本実験では、被験者と対象人物は面識がない。被験者にとって見知らぬ初対面の人物に感情を表すのは抵抗があるかも知れない。特に初対面の人に怒りの感情などは表現しにくいであろう。被験者と対象人物が知り合いの場合についての実験も必要に思える。本研究では、被験者が女性のみであり、また感情の種類も2種類だけである。今後、男性被験者を加わえたり別の感情についても実験する必要がある。また、役割演技による方法ではなく、自然な感情表出について検討する必要がある。

さて、本論文の立場に沿って、実験5を要約すると以下のようなになる。

要 約

実験5では、モデルからの予測と矛盾する結果 (Fromme & Schmidt, 1972; Kimble & Olszewski, 1980) が報告されている、他者に対して怒り感情を表出する場合の視線行動を検討した。被験者は女子学生64名であ

り、表出対象人物は男女学生各2名であった。実験計画は $2 \times 2 \times 2$ の混合計画であった。第1の要因は対人感情の種類（好意感情[好意]、非好意感情[怒り]）、第2の要因は対人感情の表出対象人物（女性[2名]、男性[2名]）で、この2つの要因については被験者間要因とし、第3の要因は対人感情の強度（強、弱）で、被験者内要因とした。好意感情と非好意感情は、発言内容である文章内容により操作した。また、対人感情の強さについては、実験者が口頭で強くあるいは弱く表現して伝えるように教示をして操作した。操作チェックにより対人感情の種類と強度の操作の有効性を確認した。被験者は、常時、視線を向けている実験協力者に向かって、好意または怒りの内容を、強い感情または弱い感情の調子で表出した。この時の直視量を、ハーフ・ミラーの後方から観察者が測定した。直視総量は、 $(\text{対象人物1への直視時間} + \text{対象人物2への直視時間}) / (\text{対象人物1の時の全表出時間} + \text{対象人物2の時の全表出時間}) \times 100$ として算出した。回数および平均時間についても同様の手続きによって算出した。これらの従属変数に分散分析を施した。その結果、直視総量について対人感情の強度の主効果が有意であった。また、3つの測度すべてにおいて対人感情の種類の主効果及び強度と種類の交互作用は有意ではなかった。

第3章 総合考察及び今後の課題

第1節 本研究の結果の要約と総合考察

本研究の目的は、日本において、肯定的あるいは否定的な対人感情が視線行動に及ぼす影響を視線の対人感情包括的「接近一回避モデル」の立場から体系的に検討することである。この目的を達成するために、接近機能をもつ肯定的対人感情（実験1と実験2）、回避機能をもつ否定的対人感情（実験3と実験4）、最後に、他者に接近機能をもつ特殊な否定的な対人感情のなかでも、攻撃性・支配性を含むと考えられる怒り感情が表出された場合にも、モデルからの予測が妥当するかどうかを検討し、妥当しない場合、更に視線の対人感情包括的拡張「接近一回避モデル」の提案を示唆した（実験5）。

実験1では、操作された好意感情が視線行動に及ぼす影響を究明することであった。その結果、相手に好意感情を抱いた者は、直視量が多いことが見いだされた。次に実験2では、交際中の男女において、実際の恋愛的好意感情が視線行動に及ぼす影響を究明することであった。その結果、恋愛的好意感情をもっている男女間では、直視量が未知の男女間よりも多いことが見出された。実験1と2の結果から、実験的操作によって好意感情をもたせる場合でも、現実に恋愛的好意感情を抱いている場合でも、好意感情によって視線行動が増加することが確認された。これはモデルが示すように、接近力が回避力より強い場合には、直視量を増やすような力が強くなり、直視量や相互視量が多くなるというメカニズムが働いたためと解釈される。なお本研究では取り上げなかったが、直視量の増加によって好意感情が結果として生起するという方向の影響も考えられる。

実験3では、当惑感情が視線行動に及ぼす影響を究明することであった。その結果、自己開示を求めるような当惑話題で会話する者は、直視量が少ないことが見いだされた。実験4では、欺瞞から誘発される不安感情が視

線行動に及ぼす影響を究明することであった。その結果、非欺瞞者よりも欺瞞者において直視量が少ないことが見いだされた。実験3と4の結果から、当惑感情や不安感情によって視線行動が減少することが確認された。これはモデルが示すように、回避力が接近力よりも強い場合には、直視量を減らすような力が強くなり、直視量や相互視量が少なくなるというメカニズムが働いたためと解釈される。

実験5では、怒り感情が視線行動に及ぼす影響を検討した。その結果、怒り感情の場合は、好意感情と同程度の直視量になることが判明し、従来のモデルの予測に反する結果が得られた。視線の対人感情包括的「接近－回避モデル」では、一般的に肯定的な感情が接近力、否定的な感情が回避力と関連するとされている。しかし実験5では、否定的な感情と考えられる怒り感情においても、視線行動が増加するというデータが得られた。怒り感情は、不快な感情であると同時に攻撃性・支配性をも含んでいる (Fromme & Beam, 1974; Osgood, 1966)。一般に動物は、攻撃性や支配性を示すのに相手に視線を多く向けて睨むという事実がよく知られている。したがって、実験5の怒り感情表出における視線量増加は、攻撃性・支配性が顕著に表出された結果の反映とみられる。

このように、実験5の結果をも包括的に説明するためには、新たに“攻撃・支配欲求”を接近力の中に含める必要がある。なおこの場合の接近力は、好意感情のもつ肯定的な接近力とは異なる、否定的な接近力であると考えられ、その存在が確認されたといえよう。つまり怒り感情表出の場合には、攻撃欲求を高めるような特殊な否定的対人感情が相対的に接近力を高めるために、視線量が増加したと考えられる。

また、回避力に基づく視線回避に、恭順 (submission) や慰撫 (appeasement) などの意味を伝えるものがあることが知られている。恭順欲求は、マレー (Murray, 1938) の提唱した欲求の分類に含まれている。これは、相手の思うように動きたいという欲求で、相手を自分の思ったように動かしたいという支配的欲求とは反対である。尊敬すべき優越者に進んで従い、協力しようとする人は恭順欲求によって左右される。また慰撫は、一方が他方をなだめる (事を荒立てないで穏やかにする) という過程

である。人間以外の動物の慰撫では、視線回避、姿勢を丸める、身体を小さくするなどの服従行動が見られる。これによって、社会的脅し (social threat) を和らげ、つながりを回復するという肯定的な意味を持つ反応である (Keltner & Buswell, 1997)。そして、視線回避が必ずしも否定的な感情を示すとは限らないという指摘もあり、恭順や慰撫などは肯定的な回避力に基づくものとみなせるかもしれない (Ellsworth & Carlsmith, 1968, 1973)。比較行動学の観点から、Eibel-Eibesfeldt (1970) は、「人間の媚態行動のもつ典型的要素が、相手の方へ視線を向ける動作と相手から視線をそらす動作であるとしている。その例として、サンプル族の少女は相手と視線が合うと、うつむいてまぶたを伏せる。しかし、この後、少女は、たいていの場合すぐにまた相手と視線を合わせることを報告している。九鬼 (1930) も、媚態の表現の1つとして「流し目」をあげている。即ち、「流し目とは、瞳の運動によって媚びを異性に向かって流しやることである。その様態化としては、横目、上目、伏目がある。……伏目もまた異性に色気ある恥ずかしさを暗示する点で媚びの手段に用いられる。」(p. 75)。日本では、視線行動が複線化 (二重構造、屈折している) かもしれない。以心伝心とか腹芸ということがある。普通、好意をもつと視線を向けるのが基本だが、気になるからかえって相手に視線を向けないことがある。好意を持っているからかえって視線を向けないことがある。対人恐怖症などは、人に関心がありすぎて目を向けないのである。さらに、視線のディコーディング (decoding) 研究から、視線量が多いことが必ずしも肯定的な感情を伝えるとはいえないことが知られている。例えば、被験者が次の5つの視線パターンをとる実験協力者と対面する。即ち、①ほとんど視線を向けない、②話している間だけ視線を向ける、③聞いている間だけ視線を向ける、④普通の視線を向ける、⑤常時、視線を向ける、の5つの条件である。被験者の実験協力者に対する好意度評定は、①から④となるにつれて高くなったが、⑤では低くなったことを見いだしている (Argyle, Lefebvre, & Cook, 1974)。Cook & Smith (1975) も同様の結果を見いだしている。即ち、実験協力者の視線を、普通の視線、持続する視線、視線をそらす、の3条件とし、大学生と約3分間の対面会話をさせたところ

ろ、実験協力者に対する好意度が直線的に増加するのではなく、普通の視線で最も多くなることを見いだしている。

以上のことから、Kahlbaugh & Haviland(1994)も示唆しているように、肯定的対人感情が接近力と関連し、否定的対人感情が回避力と関連するというように必ずしも一義的に対応するものではないと考えられる。つまり、接近力、回避力それぞれに肯定的感情と否定的感情両方の心理的意味があることを十分考慮する必要がある。そこで、攻撃欲求を高めるような特殊な否定的対人感情は相対的に接近力を高めて視線量を増加させるであろうという仮定と、恭順欲求を高めるような特殊な肯定的対人感情は相対的に、回避力を高めて視線量を減少させるであろうという仮定をモデルに取り込むことによって、本研究は対人感情包括的拡張「接近—回避モデル」を提案する(図6-1)。図6-1のモデルによって、肯定的(接近力)、否定的(回避力)な対人感情表出時における視線行動の説明だけでなく、怒り感情(否定的接近力)表出の場合の説明も可能になった。この拡張モデルでは、肯定的対人感情による回避力から視線行動を説明する場合も想定される。これについては今後、実証的に検討する必要がある。

第2節 今後の課題

本研究で提案した修正モデルの妥当性をさらに確かめるため、先の総括でも触れたように、恭順欲求などに基づく肯定的対人感情(回避力)をもつ者の視線行動についても実験的に検討する必要がある。肯定的対人感情による直視量の減少を報告した研究例は非常に少ない。Thornquist et al. (1991)は、58組の男女カップルにRubin(1970)の好意、恋愛尺度及び幸福感評定、相手の反応の予測(相手が自分についてどう思っているか)の評定をさせ、「デートしているカップル間の会話実験」という名目で会話中の視線行動を測定した。その結果、相互の愛情(自己評定)と相互視量の間には正の関連はなく、むしろ負の関連が見られた。特に、相手の愛情

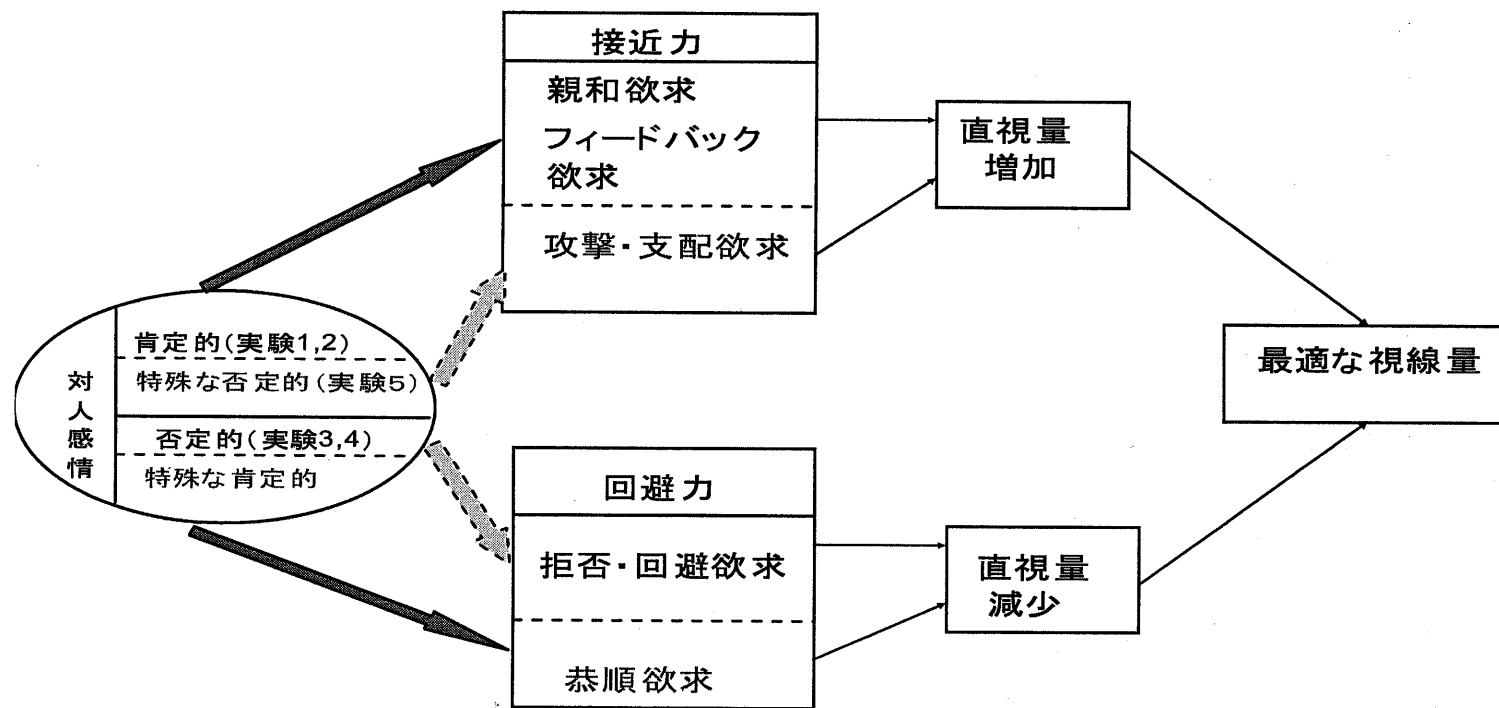


図6-1 視線の対人感情包括的拡張「接近一回避モデル」

に自信を持っている男性は、相手に対する直視量が少なくなっていた。その結果、相互の愛情（自己評定）と相互視量の間には正の関連はなく、むしろ負の関連が見られた。女性の相手（男性）に対する恋愛感情と相互視量の間には負（ -0.28 ）の相関があった。そして、相手（女性）の愛情に自信を持っている男性は、相手に対する直視量が少なくなっていた。Thornquist et al. (1991) は、女性は恋愛関係の早い時期で、母性的、養護的な優しさ (compassionate) の段階に移行しやすいと考察し、女性の恋愛感情が特殊な肯定的対人感情欲求（養護欲求）的なものになっていることを示唆している。また、相手（女性）の愛情に自信を持っている男性は、安定し、信頼感を持っている（つまり、特殊な肯定的対人感情）と考えられる。大坊（1990）は、夫婦間では恋人同士より会話も不活発で、視線を向け合うことも少ないと述べている。これらのことは、特殊な肯定的対人感情によって視線量が減少することを予測する拡張モデルの方向に沿ったものであろう。

さて、羞恥感情による視線回避や赤面が“慰撫”や“媚び”に関連した機能を持ち、肯定的な意味合いを持つとする見解がある（Goffman, 1967; Keltner & Buswell, 1997; 菅原, 1998）。菅原（1998）によると、羞恥の表出行動の構造は、恥の意識と照れの意識という2次元性をもつ。照れの意識は視線を回避したり、笑ったり、舌を出したりして“媚び”という印象を与える。そして、「褒めて頂いて有り難い（肯定的対人感情）ですが、私はそれほどの人間ではありません。」というようなメッセージ内容が、照れの意識や表出行動となると述べている。また羞恥感情による視線回避や赤面は、他者に対する一種の非言語的アピールで、謝罪、服従、言い訳などの気持ちの表れである。そしてこれが、他者に何らかの影響を及ぼし、失態を演じた個人への怒りや批判を多少なりとも緩和させる効果を持つとしている、つまり、対面相互作用をスムーズに持続させていくという肯定的、積極的な意味を持つ行動である（Goffman, 1967）。Keltner & Buswell（1997）は羞恥感情が果たす肯定的な社会的機能の過程を次のように述べている。①規則違反などから人間関係の崩れるおそれを経験し、人はつながりを回復しようとする。②そして、慰撫（羞恥）に関連する服従・親和

行動（視線回避、赤面など）を示すとする。③これにより相手の攻撃性を和らげ、相手の接近を促すことで人間関係の回復がなされる。このような肯定的な対人感情の1つと考えられる照れの感情を喚起する場面（例えば、賞賛場面）を設定し、そこで直視量の減少が観察されれば、まだ検証されていない、拡張モデルの部分が実証されたことになるであろう。

次に本研究では、会話場面の視線量の多少だけを分析してきたが、会話過程でのどこで、どのような（短く頻発する、長く持続する、など）視線が向けられているかなどの質的な分析も必要であると考えられる。また、実験2,3でも検討したが、視線量測度（回数、平均時間、総量）の機能の違いを明らかにする研究が必要である。更に、発言との合成変数である発言中、聴取中の視線の機能も明確にすることも今後の課題である。

引用文献

- Abele, A. 1986 Functions of gaze in social interaction: Communication and monitoring. *Journal of Nonverbal Behavior*, 10, 83-101.
- Aiello, J.A. 1987 Human spatial behavior. In D. Stokols & I. Altman (Eds.), *Handbook of environmental psychology* (Vol.1) New York: John Wiley & Sons, Inc. Pp. 389-504.
- Anderson, D.R. 1976 Eye contact, topic intimacy and equilibrium theory. *Journal of Social Psychology*, 100, 313-314.
- Argyle, M. 1969 *Social Interaction*. London: Methuen.
- Argyle, M. 1972 Nonverbal communication in human social interaction. In R.A.Hinde (Ed.), *Nonverbal communication*. Cambridge: Cambridge University Press. Pp. 243-269.
- Argyle, M. 1983 *The psychology of interpersonal behaviour*. 4th ed. London: Penguin Books Ltd.
- Argyle, M. 1994 *The psychology of interpersonal behaviour*. 5th ed. London: Penguin Books Ltd.
- Argyle, M., & Cook, M. 1976 *Gaze and mutual gaze*. Cambridge: UK: Cambridge University Press.
- Argyle, M., & Dean, J. 1965 Eye contact, distance and affiliation. *Sociometry*, 28, 289-304.
- Argyle, M., & Graham, J. A. 1977 The Central Europe experiment—looking at persons and looking at objects. *Environmental Psychology and Nonverbal Behavior*, 1, 6-16.
- Argyle, M., & Ingham, R. 1972 Gaze, mutual gaze, and proximity. *Semiotica*, 6, 32- 49.

- Argyle, M., & Kendon, A. 1967 The experimental analysis of social performance. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*. Vol. 3. New York: Academic Press. Pp. 55-98.
- Argyle, M., Lefebvre, L., & Cook, M. 1974 The meaning of five patterns of gaze. *European Journal of Social Psychology*, 4, 125-136.
- Baeslen, E. J., & Burgoon, J. K. 1987 Measurement and reliability of nonverbal behavior. *Journal of Nonverbal Behavior*, 11, 205-233.
- Bailenson, J.N., Blascovich, J., Beall, A.C., & Loomis, J.M. 2001 Equilibrium theory revisited: Mutual gaze and personal space in virtual environments. *Presence*, 10, 583-598.
- Bailenson, J.N., Blascovich, J., Beall, A.C., & Loomis, J.M. 2003 Interpersonal distance in immersive virtual environments. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 29, 819-833.
- Beier, E. G., & Sternberg, D. P. 1977 Marital communication. *Journal of Communication*, 27, 92-97.
- ベネデクト, R.F. 長谷川松治 (訳) 1951 菊と刀 社会思想社
(Benedict, R. F. 1946 *The chrysanthemum and the sword: Patterns of Japanese culture*. Boston: Houghton Mifflin.)
- Bond, C. F., Kahler, K.N., & Paolicelli, L.M. 1985 The miscommunication of deception: An perspective. *Journal of Experimental Social Psychology*, 21, 231-345.
- ボンド, M.H. ・ 白石大介 1973 面接者の「姿勢」と「地位」が被面接者に及ぼす影響—non-verbal communicationの研究
実験者社会心理学研究, 13, 11-21
- Breed, G. 1972 The effect of intimacy: Reciprocity or

- retreat? *British Journal of Social and Clinical Psychology*, 11, 135-142.
- Buck, R. 1988 *Human motivation and emotion*. 2nd ed. New York: John Wiley & Sons, Inc.
- Byrne, D. 1961 Interpersonal attraction and attitude similarity. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 62, 713-715.
- Carr, S. J., & Dabbs, J. M., Jr. 1974 The effects of lighting, distance, and intimacy of topic on verbal and visual behavior. *Sociometry*, 37, 592-600.
- Cook, M., & Smith, M. C. 1975 The role of gaze in impression formation. *British Journal of Social and Clinical Psychology*, 14, 19-25.
- Coutts, L. M., & Schneider, F. W. 1975 Visual behavior in an unfocused interaction as a function of sex and distance. *Journal of Experimental Social Psychology*, 11, 64-77.
- Coutts, L. M., & Schneider, F. W. 1976 Affiliative conflict theory: An investigation of the intimacy equilibrium and compensation hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 34, 1135-1142.
- Cranach, M. von 1971 The role of orienting behavior in human interaction. In A. H. Esser (Ed.), *Behavior and environment: The use of space by animals and men*. New York: Academic Press. Pp. 217-237.
- ダーウイン, C. 濱中濱太郎 (訳) 1931 人及び動物の表情について 岩波書店 (Darwin, C. 1872 *The expression of emotion in men and animals*. London: Murray.)
- 大坊郁夫 1989 非言語的表出性の測定: ACT尺度の構成 日本

- 心理学会第53回大会発表論文集, 210.
- 大坊郁夫 1990 対人関係における親密さの表現—コミュニケーションに見る発展と崩壊— 心理学評論, 33, 322-352.
- 大坊郁・瀧本誓 1992 対人コミュニケーションにみられる欺瞞の特徴 実験社会心理学研究, 32, 1-14.
- DePaulo, B.M., Lindsay, J.J., Malone, B.E., Muhlenbruck, L., Charlton, K., & Cooper, H. 2003 Cues to deception. *Psychological Bulletin*, 129, 74-118.
- Eco, U. 1976 *A theory of semiotics*. Bloomington: Indiana University Press.
- Edelmann, R. J. 1987 *The psychology of embarrassment*. New York: John Wiley & Sons.
- Edelmann, R. J., & Hampson, S.E. 1979 Changes in non-verbal behavior during embarrassment. *British Journal of Social and Clinical Psychology*, 18, 385-390.
- Edelmann, R. J., & Iwawaki, S. 1987 Self-reported expression and consequences of embarrassment in the United Kingdom and Japan. *Psychologia*, 30, 205-216.
- Efran, J.S. 1968 Looking for approval: Effects on visual behavior of approbation for persons differing in importance. *Journal of Personality and Social Psychology*, 10, 21-25.
- Efran, J.S., & Broughton, A. 1966 Effects of expectancies for social approval on visual behaviors. *Journal of Personality and Social Psychology*, 4, 103-107.
- Efran, M.G., & Cheyne, J.A. 1974 Affective concomitants of the shared space: behavioral, psychological, and verbal indications. *Journal of Personality and Social Psychology*, 29, 219-226.

- アイブルーアイベスフェルト, I. 日高敏隆・久保和彦 (訳) 1974 愛と
憎しみ—人間の基本的行動様式とその自然誌 1, 2 みすず書房
(Eibl-Eibesfeldt, I. 1970 *Liebe und Hass - Zur naturgeschichte
elementarer Verhaltensweisen*. Munchen: P. Piper & Co. Verlag.)
- Ekman, P., & Friesen, W. V. 1969 The repertoire of nonverbal
behavior: Categories, origins, usage, and coding.
Semiotica, 1, 49-98.
- Ellsworth, P. C., & Carlsmith, J. M. 1968 Effects of eye
contact and verbal content on affective response to a
dyadic interaction. *Journal of Personality and Social
Psychology*, 10, 15-20.
- Ellsworth, P. C., & Carlsmith, J. M. 1973 Eye contact and
gaze aversion in an aggressive encounter. *Journal of
Personality and Social Psychology*, 28, 280-292.
- Ellsworth, P. C., Carlsmith, J. M., & Henson, A. 1972 A stare
as a stimulus to flight in human subjects : A series of
field experiments. *Journal of Personality and Social
Psychology*, 21, 302-311.
- Ellsworth, P. C., & Ludwig, L. M. 1972 Visual behavior in
social interaction. *Journal of Communication*, 22,
375-403.
- Ellyson, S. L., Dovidio, J. F., Corson, R. L. 1981 Visual
behavior differences in females as a function of
self-perceived expertise. *Journal of Nonverbal Behavior*,
5, 164-171.
- Ellyson, S. L., Dovidio, J. F., Corson, R. L. & Vinicur, D. L. 1980
Visual dominance behaviour in female dyads: situational and

- personality factors. *Social Psychology Quarterly*, 43, 328-336.
- Ellyson, S. L., Dovidio, J. F., & Fehr. 1985 Visual behavior and dominance in women and men. In S. L. Ellyson & J. F. Dovidio (Eds.), *Power, dominance, and nonverbal behavior*. New York: Springer-Verlag. Pp. 63-79
- Exline, R. V. 1963 Explorations in the process of person perception: Visual interaction in relation to cooperation, sex and need for affiliation. *Journal of Personality*, 31, 1-20.
- Exline, R. V. 1972 Visual interaction: The glances of power and preference. In J. K. Cole (Ed.), *Nebraska symposium on motivation*, 1972. Lincoln: University of Nebraska Press. Pp. 162-205.
- Exline, R. V., Ellyson, S. L., & Long, B. 1975 Visual behavior as an aspect of power relationships. In P. Pliner, L. Kramer, & T. Alloway (Eds.), *Advances in the study of communication and affect*. Vol. 2. *Nonverbal communication of aggression*. New York: Plenum. Pp. 21-52.
- Exline, R. V., Gray, D., & Schuette, D. 1965 Visual interaction in a dyad as affected by interview content and sex of respondent. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1, 201-209.
- Exline, R. V., & Messick, D. 1967 The effects of dependency and social reinforcement upon visual behaviour during an interview. *British Journal of Social and Clinical Psychology*, 6, 256-266.

- Exline, R. V., Paredes, A., Gottheil, E.G., & Winkelmayr, R. 1979 Gaze patterns of normals and schizophrenics retelling happy, sad, and angry experiences. In C.E. Izard (Ed.), *Emotions in personality and psychotherapy*. New York: Plenum.
- Exline, R. V., Thibaut, J., Hickey, C. B., & Gumpert, P. 1970 Visual interaction in relation to Machiavellianism and an unethical act. In R. Christie & F. L. Geis (Eds.), *Studies in Machiavellianism*. New York: Academic Press. Pp.53-75.
- Exline, R. V., & Winters, L. C. 1965 Affective relations and mutual glances in dyads. In S. S. Tomkins & C. E. Izard (Eds.), *Affect, cognition, and personality*. New York: Springer.
- Fehr, B. J., & Exline, R. V. 1987 Social visual interaction: A conceptual and literature review. In A. W. Siegman & S. Feldstein (Eds.), *Nonverbal behavior and communication*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates. Pp.225-326
- Foot, H. C., Chapman, A. J., & Smith, J. R. 1977 Friendship and social responsiveness in boys and girls. *Journal of Personality and Social Psychology*, 35, 401-411.
- Freedman, J. L. 1969 Role playing: Psychology by consensus. *Journal of Personality and Social Psychology*, 13, 107-114.
- Friedman, H.S., Price, L. M., Riggio, R. E., & Dimatteo, M. R. 1980 Understanding nonverbal expressiveness: The affective communication test. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 333-351.
- Fromme, D.K., & Beam, D.C. 1974 Dominance and sex differences in nonverbal responses to differential eye contact. *Journal of Research in Personality*, 8, 76-87.
- Fromme, D. K., & Schmidt, C. K. 1972 Affective role enactment

- and expressive behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 24, 413-419.
- Fugita, S. S. 1974 Effects of anxiety and approval on visual interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, 29, 586-592.
- 藤原武弘・黒川正流・秋月左都士 1983 日本版 Love-Liking 尺度の分析 広島大学総合科学部紀要Ⅲ, 7, 39-46.
- 深田博己 1987 対人感情 小川一夫(監修) 改訂新版社会心理学用語辞典 北大路書房 p.221.
- 深田博己 1998 インターパーソナル・コミュニケーション 北大路書房
- 福原省三 1977 社会的相互作用過程における視線行動の実験的研究 実験社会心理学研究, 17, 30-38.
- Gibson, J. J., & Pick, A. D. 1963 Perception of another person's looking behavior. *American Journal of Psychology*, 76, 386-394.
- Glasgow, R. E., & Arkowitz, H. 1975 The behavioral assessment of male and female social competence in dyadic heterosexual interactions. *Behavior Therapy*, 6, 488-498.
- Goffman, E. 1967 *Interaction Rituals*. London: Penguin Books.
- Goldberg, M. L., & Wellens, A. R. 1979 A comparison of nonverbal compensatory behaviors within direct face-to-face and television-mediated interviews. *Journal of Applied Social Psychology*, 9, 250-260.
- Goldstein, M. A., Kilroy, M. C., & Van de Voort, D. 1976 Gaze as a function of conversation and degree of love. *Journal of Psychology*, 92, 227-237.
- Guerrero, L. K. 1997 Nonverbal involvement across interactions with

- same-sex friends, opposite-sex friends and romantic partners: Consistency or change? *Journal of Social and Personal Relationships*, 14, 31-58.
- Hall, J. A. 1984 *Nonverbal sex differences: Communication accuracy and expressive style*. Baltimore: Johns Hopkins University Press.
- Hall, J. A., & Halberstadt, A.G. 1986 Smiling and gazing. In J.S.Hyde & M.C.Linn (Eds.), *The psychology of gender: Advances through meta-analysis*. Baltimore: Johns Hopkins University Press. Pp.136-158.
- Harper, R.G., Wiens, A.N., & Mattarazzo, J.D. 1978 *Nonverbal communication: The state of the art*. New York: John Wiley & Sons.
- Heider, F. 1954 *The psychology of interpersonal relations*. New York: John Wiley & Sons.
- 樋口匡貴 2000 恥の構造に関する研究 社会心理学研究, 16, 105-113.
- Hobson, G.N., Strongman, K.T., Bull, D., & Craig, G. 1973 Anxiety and gaze aversion in dyadic encounters. *British Journal of Social and Clinical Psychology*, 12, 122-129.
- 市河淳章・車谷ひとみ・香西貴代 1989 会話場面における非言語行動の分析—性、対人距離、2者関係の影響について— 香川大学教育学部研究報告第Ⅱ部, 39, 137-147.
- 井上忠司 1982 まなざしの人間関係 講談社
- Izard, C.E. 1964 The effect of role-played emotion on affective reactions, intellectual functioning and evaluative ratings of the actress. *Journal of Clinical Psychology*, 20, 444-446.
- Jurich, A.P., & Jurich, J.A. 1974 Correlations among nonverbal

- expressions of anxiety. *Psychological report*, 34, 199-204.
- Kahlbaugh, P.E., & Haviland, J.M. 1994 Nonverbal communication between parents and adolescents: A study of approach and avoidance behaviors. *Journal of Nonverbal Behavior*, 18, 91-113.
- Kashy, D.A. & DePaulo, B.M. 1996 Who lies? *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 1037-1051.
- Keltner, D., & Buswell, B. N. 1997 Embarrassment: Its distinct form and appeasement functions. *Psychological Bulletin*, 122, 250-270.
- Kendon, A. 1967 Some functions of gaze direction in social encounters. *Acta Psychologica*, 26, 1-47.
- Kendon, A., & Cook, M. 1969 The Consistency of gaze patterns in social interaction. *British Journal of Psychology*, 69, 481-494.
- Kimble, C. E., & Forte, R. A., & Yoshikawa, J. C. 1981 Nonverbal concomitants of enacted emotional intensity and positivity: Visual and vocal behavior. *Journal of Personality*, 49, 271-283.
- Kimble, C. E., & Olszewski, D. A. 1980 Gaze and emotional expression: The effects of message positivity-negativity and emotional intensity. *Journal of Research in Personality*, 14, 60-69.
- Kleinke, C. L. 1986 Gaze and eye contact: A research review. *Psychological Bulletin*, 100, 78-100.
- Knapp, M.L., Hart, R.P., & Dennis, H.S. 1974 An exploration of deception as a communication construct. *Human Communication Research*, 1, 15-29.
- 九鬼周造 1930 いきの構造 岩波書店
- LaFrance, M., & Mayo, C. 1976 Racial differences in gaze

- behavior during conversations: Two systematic observational studies. *Journal of Personality and Social Psychology*, 33, 547-552.
- Lalljee, M. 1978 The role of gaze in the expression of emotion. *Australian Journal of Psychology*, 30, 59-67.
- Lefebvre, L.M. 1975 Encoding and decoding of ingratiation in modes of smiling and gaze. *British Journal of Social and Clinical Psychology*, 14, 33-42.
- Lochman, J.E., & Allen, G. 1981 Nonverbal communication in conflict. *Journal of Research in Personality*, 15, 253-269.
- Lott, D.E., & Sommer, R. 1967 Seating arrangement and status. *Journal of Personality and Social Psychology*, 7, 90-95.
- Matsumoto, D. 1989 Face, culture, and judgements of anger and fear: Do the eyes have it? *Journal of Nonverbal Behavior*, 13, 171-188.
- Maxwell, G.M., Cook, M.W., & Burr, R. 1985 The encoding and decoding of liking from behavioral cues in both auditory and visual channels. *Journal of Nonverbal Behavior*, 9, 239-263.
- McAdams, D. P., Jackson, R. J., & Kirshnit, C. 1984 Looking, laughing, and smiling in dyads as a function of intimacy motivation and reciprocity. *Journal of Personality* 52, 261-273.
- McClintock, C. C., & Hunt, R. G. 1975 Nonverbal indicators of effect and deception in an interview setting. *Journal of Applied Social Psychology*, 5, 54-67.
- McGuire, W. J. 1985 Attitudes and attitude change. In G.

- Lindzey & E. Aronson (Eds.), *Handbook of social psychology*.
3rd ed. Vol. 2. New York: Random House. Pp. 233-346.
- Mehrabian, A. 1968 Relationship of attitude to seated posture,
orientation and distance. *Journal of Personality and Social
Psychology*, 10, 26-30.
- Mehrabian, A. 1971 Nonverbal betrayal of feeling. *Journal of
Experimental Research in Personality*, 5, 64-73.
- Mehrabian, A. 1972 *Nonverbal communication*. New York:
Aldine- Atherton.
- メラビアンの, A. 西田司・津田幸男・岡本輝人・山口常夫 (訳) 1986
非言語的コミュニケーション 聖文社 (*Mehrabian, A. 1981
Silent messages: Implicit communication of emotion and attitudes*.
Belmont, CA: Wadsworth Publishing Company, Inc.)
- Mehrabian, A., & Friar, J.T. 1969 Encoding of attitude by seated
communicator via posture and position cues. *Journal of Consulting
and Clinical Psychology*, 33, 330-336.
- Miller, N. E. 1944 Experimental studies in conflict. In J.
McV. Hunt (Ed.), *Personality and behavior disorders*. Vol.
1. New York: Ronald. Pp. 431-465.
- Mixon, D. 1971 Behavior analysis treating subjects as actors
rather than organisms. *Journal of Theory for Social
Behavior*, 1, 19-31.
- Modigliani, A. 1971 Embarrassment, facework, and eye
contact: Testing a theory of embarrassment. *Journal of
Personality and Social Psychology*, 17, 15-24.
- Mulac, A., Studley, L. B., Wiemann, J. M., & Bradac, J. J. 1987
Male/Female gaze in same-sex and mixed-sex dyads. *Human*

- Communication Research*, 13, 323-343.
- マレー, H.A. 外林大作 (訳編) 1952 パーソナリティ I II 誠信書房 (Murray, H.A. (Ed.) 1938 *Explorations in personality: A clinical and experimental study of fifty men of college age*. Oxford: Oxford University Press.)
- Murray, R.P., & McGinley, H. 1972 Looking as a measure of attraction. *Journal of Applied Social Psychology*, 2, 267-274.
- 中根千枝 1967 タテ社会の人間関係 講談社
- Natale, M. 1977 Induction of mood states and their effect on gaze behaviors. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 45, 960.
- Nevill, D. 1974 Experimental manipulation of dependency motivation and its effects on eye contact and measures of field dependency. *Journal of Personality and Social Psychology*, 29, 72-804.
- Nielsen, G. 1962 *Studies in self confrontation*. Copenhagen: Monksgaard.
- Noller, P. 1984 *Nonverbal communication and marital interaction*. Oxford: Pergamon Press.
- Osgood, C.E. 1966 Dimensionality of the semantic space for communication via facial expression. *Scandinavian Journal of Psychology*, 7, 1-30.
- Osgood, C. E., Suci, G. J., & Tannenbaum, P. H. 1957 *The measurement of meaning*. Urbana: University of Illinois Press.
- Palmer, M.T., & Simmons, K.B. 1995 Communicating of intentions through nonverbal behavior. *Human Communication Research*, 22, 128-160.

- Patterson, M. L. 1977 Interpersonal distance, affect, and equilibrium theory. *Journal of Social Psychology*, 101, 205-214.
- Patterson, M. L. 1983 *Nonverbal behavior: A functional perspective*. New York: Springer.
- Patterson, M. L., Mullens, S., & Romano, J. 1971 Compensatory reactions to spatial intrusion. *Sociometry*, 34, 114-121.
- Pellegrini, R. J., Hicks, R. A., & Gordon, L. 1970 The effect of an approval seeking conduct on eye contact in dyads. *British Journal of Social and Clinical Psychology*, 9, 373-374.
- Pennington, D.C., & Rutter, D.R. 1981 Information or affiliation? Effects of intimacy on visual interaction. *Semiotica*, 35, 29-39.
- Radley, A. 1991 *The body and social psychology*. New York: Springer-Verlag.
- Riggio, R. E., & Friedman, H. S. 1983 Individual differences and cues to deception. *Journal of Personality and Social Psychology*, 45, 899-915.
- Rime, B. 1983 Nonverbal communication or nonverbal behavior? In W. Doise & S. Moscovici (Eds.), *Current issues in european social psychology*. Vol 11. Cambridge: Cambridge University Press.
- Rohner, S.J., & Aiello, J. R. 1975 The effect of topic intimacy on interaction behaviors. Paper presented at the meeting of the Eastern Psychological Association, New York.
- Rubin, Z. 1970 Measurement of romantic love. *Journal of Personality and Social Psychology*, 16, 265-273.
- Russo, N. F. 1975 Eye contact, interpersonal distance, and

- the equilibrium theory. *Journal of Personality and Social Psychology*, 31, 497-502.
- Rutter, D. R., & Stephenson, G. M. 1979 The functions of looking: Effects of friendship on gaze. *British Journal of Social and Clinical Psychology*, 18, 203-205.
- 齊藤 勇 1990 対人感情の心理学 誠信書房
- Schulze, R., & Barefoot, J. 1974 Nonverbal responses and affiliative conflict theory. *British Journal of Social and Clinical Psychology*, 13, 237-243.
- Simmel, G. 1921 Sociology of the senses: visual interaction. In R.E.Park & E.W.Burgess (Eds.), *Introduction to the science of sociology*. Chicago: University of Chicago Press. Pp. 356-361.
- Steinberg, R. J. 1988 Triangulating love. In R. J. Steinburg & M. L. Barnes (Eds.), *The psychology of love*. New Haven: Yale University Press. Pp. 119-138.
- Stern, D. 1977 *The first relationship: Mother and infant*. Cambridge, MA: Harvard University press.
- Strongman, K. T., & Champness, B. G. 1968 Dominance hierarchies and conflict in eye contact. *Acta Psychologica*, 28, 376-386.
- 菅原健介 1998 人はなぜ恥ずかしがるのか サイエンス社
- Thornquist, M. H., Zukerman, M., & Exline, R. V. 1991 Loving, liking, looking and sensation seeking in unmarried college couples. *Personality Individual Difference*, 2, 1283-1992.
- Tomkins, S. S. 1963 *Affect, imagery, consciousness*. Vol. II: *The negative affects*. New York: Springer.
- 内沼幸雄 1983 羞恥の構造 紀伊国屋書店
- Vrugt, A. 1990 Negative attitudes, nonverbal behavior and

- self-fulfilling prophesy in simulated therapy interviews. *Journal of Nonverbal Behavior*, 14, 77-86.
- 和田実 1986 好意、対人感情および話題が非言語的行動と自己開示に及ぼす影響 実験社会心理学研究, 26, 1-12.
- 和田実 1989 二者関係、対人距離および話題が非言語的行動に及ぼす影響—現実の二者関係にもとづいて— 心理学研究, 60, 31-37.
- Webb, E. J., Campbell, D. T., Schwartz, R. D., & Sechrest, L. 1966 *Unobtrusive measures*. Chicago: Rand McNally.
- White, G. T. 1975 The mating game: Nonverbal interpersonal communication between dating and engaged college couples. Paper presented at the meeting of the Western Psychological Association, Sacramento. (cited in R. G. Harper, A. Wiens, & J. D. Matarazzo (Eds.), *Nonverbal communication: The state of the art.*)
- Wiener, M., & Mehrabian, A., 1968 *Language within language: Immediacy, a channel in verbal communication*. New York: Appleton-Century-Crofts.
- Word, C.O., Zanna, M.P., & Cooper, J. 1974 The nonverbal mediation of self-fulfilling prophecies in interracial interaction. *Journal of Experimental Social Psychology*, 10, 109-120.
- 柳田國男 1953 不幸なる芸術 筑摩書房
- Yarbus 1967 *Eye movement and vision*. New York: Plenum Press.
- 吉田富二雄・堀 洋道 1988 面接場面における非言語的コミュニケーション—視線行動の分析を中心に— 心理学研究, 59, 9-15.
- 吉田富二雄・飯田哲也 1981 自然場面における視線行動の分析 実験社会心理学研究, 20, 109-118.
- Zuckerman, M., DePaulo, B. M., & Rosenthal, R. 1981 Verbal and nonverbal communication of deception. In L. Berkowitz

(Ed.), *Advances in experimental social Psychology*. Vol. 14.
New York: Academic Press. Pp.1-59.

謝 辞

本論文をまとめるに当たり、広島大学大学院教育学研究科心理学講座深田博己教授に、多大なご指導を賜りました。また、広島大学大学院教育学研究科心理学教室の諸先生方にもご丁寧なご指導を頂きました。特に、利島 保教授、前田健一教授にはご激励、ご指導を賜りました。記して心より感謝申し上げます。